

# 乃万の裏遺跡

2次調査地

1999

松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

# の ま う ら 乃 万 の 裏 遺 跡

2 次 調 査 地



1999

松山市教育委員会

財團法人 松山市生涯學習振興財團

埋蔵文化財センター



卷頭図版 SX5 出土の弥生後期土器

## 序

松山平野のほぼ中央部には、県下を代表する弥生遺跡の久米遺跡群が存在します。この久米遺跡群には、福音寺遺跡、釜ノ口遺跡、筋違遺跡、久米高畠遺跡のように多くの成果が得られた遺跡があり、広範囲にわたり弥生の集落が展開することが明らかになりました。さらに、近年の調査では、弥生時代を廻る考古資料が見つかり、新たに注目される遺跡群のひとつに挙げられます。

当遺跡の周辺においては、1960年代の国道11号バイパスの建設に伴う発掘調査により、古墳時代を中心とした集落の存在がわかつてきました。その後の福音小学校構内遺跡、北久米淨蓮寺遺跡の調査により、弥生時代～古墳時代の長期にわたり大規模な集落遺跡が展開していることが明らかとなつていきました。

今回は乃万の裏地区の遺跡調査としては2カ所目にあたり、その結果、弥生時代後期から古墳時代後期、さらに中世にわたる複合遺跡であることがわかりました。また、調査で得られた遺物の検討から、当時の地域間交流の一端が明らかとなり、本遺跡の歴史的位置付けをおこなうことが出来ました。

このような貴重な成果が得られましたのも、ご協力をいただきました地権者をはじめ、調査関係各位のご理解のたまものと感謝しております。

本書が学術・教育文化の向上、文化財保護にご利用いただければ幸いに存じます。

平成11年3月31日

財團法人 松山市生涯学習振興財團  
理事長 田 中 誠 一

## 例　　言

1. 本書は、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターと略記する）が平成5年度に実施した愛媛県松山市北久米町773-1、同市星岡町647外所在遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で使用した標高数値は海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北で、磁北から東偏6度21分を測る。
3. 遺物実測図の縮尺は、土製品1/4、石製品2/3、鉄製品1/2を原則とした。遺構実測図は1/80を基本とし、異なる場合は縮尺値を記した。
4. 本書に使用した遺構実測図は、加島次郎・小玉亜紀子・宮脇和人・栗林和孝・保島秀幸・広瀬岳志・岡崎壮一・山村芳貴・西原亞紀・安永由浩が作成し、浄写は加島・丹生谷道代・矢野久子・多知川富美子がおこなった。
5. 本書に使用した遺物実測図は、加島・小玉・丹生谷・矢野・多知川・新出寿美子・山本早苗・金子育代・高尾久子・仙波ミリ子・仙波千秋・東山里美・二神千春が作成し、浄写は、加島・丹生谷・矢野・多知川がおこなった。
6. 本書で使用した遺構写真は、大西朋子・加島が撮影し、遺物写真は大西が撮影した。
7. 調査においては、下條信行（愛媛大学教授）、村上恭通（同大学助教授）、亀田修一（岡山理科大学助教授）、平井典子（岡山県総社市教育委員会）の各氏のほか、多くの先生方から貴重なご指導・ご教示を賜った。記して感謝申し上げます。
8. 本書の執筆は、第Ⅳ章5-2）を小玉、他を加島がおこなった。
9. 本書の編集は、加島がおこなった。作成に際しては、梅木謙一・水口あをいの協力を得た。
10. 本書に関わる図面・遺物は、松山市立埋蔵文化財センターで収蔵保管している。
11. 製版 カラー国版・白黒国版-175線  
印刷 オフセット印刷  
用紙 三菱製紙 ニューVマット

# 本文目次

第Ⅰ章 序 説	
1 調査に至る経緯	1
2 調査組織と刊行組織	1
3 調査・整理作業の経過	2
4 調査区の設定と呼称	4
第Ⅱ章 位置と環境	5
第Ⅲ章 調査の概要	
1 基本層位	8
2 遺構と遺物	8
第Ⅳ章 調査の記録	
1 弥生時代の遺構と遺物	17
2 古墳時代の遺構と遺物	51
3 古代～中世の遺構と遺物	56
4 近世以降の遺構と遺物	65
5 包含層出土の遺物	
1) V層出土の遺物	66
2) IV層出土の遺物	68
第Ⅴ章 調査のまとめ	88

## 挿図目次

第1図	調査地位置図（縮尺 1/3,000）	3
第2図	調査地区割図（縮尺 1/400）	4
第3図	松山平野の主要遺跡分布図（縮尺 1/80,000）	7
第4図	土層模式図	8
第5図	調査区北壁・西壁土層図（縮尺 1/40）	9
第6図	東西大ベルト・南北大ベルト土層図（縮尺 1/40）	11
第7図	主要遺構配置図（縮尺 1/400）	13
第8図	遺構全測図（第4遺構面）（縮尺 1/100）	15
第9図	S D10実測図（縮尺 1/80）	18
第10図	S D10遺物取り上げ地区割図（縮尺 1/100）	19
第11図	S D10出土遺物実測図(1)（縮尺 1/4）	20
第12図	S D10出土遺物実測図(2)（縮尺 1/4）	21
第13図	S D10出土遺物実測図(3)（縮尺 1/4）	23
第14図	S D10出土遺物実測図(4)（縮尺 1/4）	24
第15図	S D10出土遺物実測図(5)（縮尺 1/4）	25
第16図	S D10出土遺物実測図(6)（縮尺 1/4）	26
第17図	S D10出土遺物実測図(7)（縮尺 1/4）	27
第18図	S D10出土遺物実測図(8)（縮尺 1/4）	28
第19図	S D10出土遺物実測図(9)（縮尺 1/4）	29
第20図	S D10出土遺物実測図(10)（縮尺 1/3）	30
第21図	S X 5実測図（縮尺 1/50）	31
第22図	S X 5遺物取り上げ地区割図（縮尺 1/50）	31
第23図	S X 5出土遺物実測図(1)（縮尺 1/4）	32
第24図	S X 5出土遺物実測図(2)（縮尺 1/4）	33
第25図	S X 5出土遺物実測図(3)（縮尺 1/4）	34
第26図	S X 5出土遺物実測図(4)（縮尺 1/4）	35
第27図	S X 5出土遺物実測図(5)（縮尺 1/4）	36
第28図	S X 5出土遺物実測図(6)（縮尺 1/4）	37
第29図	S X 5出土遺物実測図(7)（縮尺 1/4）	38
第30図	S X 5出土遺物実測図(8)（縮尺 1/4）	39
第31図	S X 5出土遺物実測図(9)（縮尺 1/4）	40
第32図	S X 5出土遺物実測図(10)（縮尺 1/4）	41
第33図	S X 5出土遺物実測図(11)（縮尺 1/4）	43
第34図	S X 5出土遺物実測図(12)（縮尺 1/4）	44
第35図	S X 5出土遺物実測図(13)（縮尺 1/4）	45
第36図	S X 5出土遺物実測図(14)（縮尺 1/4）	46

第37図	S X 5 出土遺物実測図 ⑮ (縮尺 1/4) .....	47
第38図	S X 5 出土遺物実測図 ⑯ (縮尺 1/4) .....	48
第39図	S X 5 出土遺物実測図 ⑰ (縮尺 1/3) .....	48
第40図	S R 1 実測図 (縮尺 1/100) .....	49
第41図	S R 1 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4) .....	53
第42図	S R 1 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/4) .....	54
第43図	S R 1 出土遺物実測図 (3) (縮尺 1/4・1/2) .....	55
第44図	S D 9・S X 12・S X 13 実測図 (縮尺 1/80) .....	56
第45図	S X 13 出土遺物実測図 (縮尺 1/4) .....	57
第46図	S D 11 実測図 (縮尺 1/80) .....	58
第47図	S D 11 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4・2/3) .....	59
第48図	S D 11 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/2) .....	60
第49図	S D 11 出土遺物実測図 (3) (縮尺 1/2) .....	61
第50図	1号掘立実測図 (縮尺 1/40) .....	62
第51図	S K 実測図 (1) (縮尺 1/20) .....	63
第52図	S K 実測図 (2) (縮尺 1/20) .....	64
第53図	S K 出土遺物実測図 (縮尺 1/4) .....	64
第54図	S D 3・S D 8 実測図 (縮尺 1/80) .....	65
第55図	S D 3 出土遺物実測図 (縮尺 1/4) .....	66
第56図	S D 8 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・2/3) .....	67
第57図	V下層出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4) .....	69
第58図	V下層出土遺物実測図 (2) (縮尺 2/3) .....	70
第59図	V上層出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4) .....	71
第60図	V上層出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/4) .....	72
第61図	V上層出土遺物実測図 (3) (縮尺 1/4) .....	73
第62図	V上層出土遺物実測図 (4) (縮尺 1/4) .....	74
第63図	V上層出土遺物実測図 (5) (縮尺 1/4) .....	75
第64図	V上層出土遺物実測図 (6) (縮尺 1/2・2/3) .....	76
第65図	IV下層出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4) .....	77
第66図	IV下層出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/4) .....	78
第67図	IV下層出土遺物実測図 (3) (縮尺 1/4) .....	79
第68図	IV下層出土遺物実測図 (4) (縮尺 2/3) .....	80
第69図	IV下層出土遺物実測図 (5) (縮尺 1/2) .....	81
第70図	IV上層出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4) .....	82
第71図	IV上層出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/4) .....	83
第72図	IV上層出土遺物実測図 (3) (縮尺 1/4) .....	84
第73図	IV上層出土遺物実測図 (4) (縮尺 2/3) .....	85
第74図	IV上層出土遺物実測図 (5) (縮尺 1/2) .....	86
第75図	IV上層出土遺物実測図 (6) (縮尺 1/2) .....	87

## 表 目 次

表1	S D10出土遺物観察表（土製品・石製品）.....	89
表2	S X 5 出土遺物観察表（土製品・石製品）.....	95
表3	S R 1 出土遺物観察表（土製品・鉄製品）.....	103
表4	S X 13出土遺物観察表（土製品）.....	106
表5	S D 11出土遺物観察表（土製品・石製品・鉄製品）.....	106
表6	S K 出土遺物観察表（土製品）.....	107
表7	S D 3 出土遺物観察表（土製品）.....	108
表8	S D 8 出土遺物観察表（土製品・鉄製品）.....	108
表9	V下層出土遺物観察表（土製品・石製品）.....	109
表10	V上層出土遺物観察表（土製品・石製品・鉄製品）.....	110
表11	IV下層出土遺物観察表（土製品・石製品・鉄製品）.....	114
表12	IV上層出土遺物観察表（土製品・石製品・鉄製品）.....	117

## 写真図版目次

卷頭図版	S X 5 出土の弥生後期土器	
図版1. 1	調査前全景（西より）	図版9. 1 S K 3～6 検出状況（西より）
2	調査前近景（北より）	2 S K 2 完掘状況（南より）
図版2. 1	調査区北壁土層	図版10. 1 S D 3・S D 8 検出状況 (北より)
2	調査区西壁土層	2 S D 3・S D 8 完掘状況 (北より)
図版3. 1	完掘状況（南西より）	
図版4. 1	S D 10検出状況①（南より）	図版11. 1 S X 1 完掘状況（北東より）
2	S D 10検出状況②（北東より）	2 現地説明会
図版5. 1	S D 10遺物出土状況①（南より）	図版12. 1 S D 10出土遺物
2	S D 10遺物出土状況②（南より）	図版13. 1 S X 5 出土遺物①
図版6. 1	S X 5 検出状況①（東より）	図版14. 1 S X 5 出土遺物②
2	S X 5 検出状況②（南西より）	図版15. 1 S X 5 出土遺物③
図版7. 1	S X 5 遺物出土状況（北西より）	図版16. 1 S X 5 出土遺物④
図版8. 1	第2遺構面検出状況（西より）	図版17. 1 S R 1・S X 13出土遺物
2	第2遺構面完掘状況（東より）	図版18. 1 S D 11出土遺物
3	S D 11棒状石製品出土状況 (東より)	図版19. 1 S D 8・V下層・IV下層出土遺物 図版20. 1 IV上層出土遺物

# 第一章 序 説

## 1. 調査に至る経緯

1992（平成4）年9月30日、乃万恭一氏より松山市北久米町773-1、星岡町647、648-1、642-3地内における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課と呼称する）に提出された。

申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『116 川附遺物包含地』内にある。これまでに申請地周辺では、数多くの発掘調査が実施されており、周知の遺跡地帯として知られている（第1図）。申請地の北には福音小学校構内遺跡、東には北久米淨蓮寺遺跡、西には筋造遺跡があり、弥生時代～古墳時代を主体とする集落の存在が明らかになってきた。したがって、国道11号バイパスの北に広がる微高地は主に居住域として利用されていたことが想定される。

これらのことから、文化教育課は申請地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1992（平成4）年10月31日から同年11月6日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生～古墳時代の土器を主体とした遺物包含層を2層確認した。とりわけ、弥生時代の遺物は後期後半が主体であり、これは福音小学校構内遺跡や筋造遺跡と同時期であることから、いずれかの集落と有機的関係にあることが推定された。この結果、当該地における本格調査の必要性があるとの結論に達し、文化教育課・埋文センター・乃万恭一氏の三者は、遺跡の取り扱いについて協議を行った。協議の結果、遺跡が消失する地点に対し、当該地における弥生～古墳時代の集落構造を含めた当時の社会・文化の解明を主目的とした緊急調査を実施するものとした。調査は埋文センターが主体となり、申請者ならびに関係者各位の協力のもと、1995（平成7）年7月中旬から開始した。

## 2. 調査組織と刊行組織

乃万の裏遺跡2次調査にかかる調査組織は次の通りである。

調査組織（平成7年度）

松山市教育委員会	教 育 長	池田 尚郷
生涯教育部	部 長	渡辺 和彦
	次 長	杉本 博
	次 長	三好 俊彦
文化教育課	課 長	松平 泰定
(財)松山市生涯学習振興財團	理 事 長	田中 誠一
	事務局長	一色 正士
埋蔵文化財センター	所 長	河口 雄三
	主 幹	山内 仁
	次 長	田所 延行
	調査係長	田城 武志
	調査主任	栗田 正芳（文化教育課職員）
	調査担当	栗田 茂敏・加島 次郎・小玉里紀子

本調査の報告書刊行組織は次の通りである。

刊行組織（平成10年度）

松山市教育委員会 教育長	池田尚郷
事務局 局長	大野嘉幸
次 長	岩本一夫
次 長	丹下正勝
文化教育課 課長	松平泰定
(財) 松山市生涯学習振興財團 理事長	田中 誠一
事務局長	池田秀雄
事務局次長	河口雄三
埋蔵文化財センター 所長	河口雄三
次 長	田所延行
調査係長	田城武志
調査主任	栗田正芳（文化教育課職員）
調査担当	栗田茂敏・加島次郎・小玉亜紀子・大西朋子

### 3. 調査・整理作業の経過

本調査の調査地、遺跡名、調査期間、申請面積は以下の通りである。

調査地 松山市北久米町773-1、星岡町647、648-1、642-3

遺跡名 乃万の裏遺跡2次調査地

調査期間 1995（平成7）年7月17日～同年11月24日

申請面積 2,475m<sup>2</sup>

調査委託 乃万恭一

発掘調査は平成7年7月17日から開始した。まず、調査区内の下草刈りを行ない事務所の設置予定地の確保ならびに発掘区を設定し、発掘用具と機材の搬入を行なう。7月20日からは調査区の掘り下げを行なう。まず、重機を導入し、試掘調査報告に基づき耕作土（I～II層）と床土（III層）を除去した。これら水田層は出土遺物から現代の水田と判断し、重機による掘削はIII層までとした。なお、掘削等で生じた廃土を調査地内で処理する必要から、試掘時に湧水が著しく認められた東半を廃土置き場とした。また、発掘区内の湧水を排水し調査の効率化を図るため、調査区四方に排水溝を設定した。しかし、調査地周辺が水田として利用されているために湧水が著しく、例年ない多雨により9月以降調査区が幾たびか水没したことから、発掘調査は困難を極めた。

当地の東方、来住町長蔭寺の北に設置された3級基準点から座標点を移動し、調査対象区に4×4mの方眼区画を設定した。調査にあたり、土層堆積状況を観察・理解するために、No 2杭とNo 3杭ライン上に東西幅1m、No 2杭とNo 4杭ライン上に南北幅1mの畦を設定した（以下、前者を南北大ベルト、後者を東西大ベルトと呼称する）。また必要に応じて、各方眼区画に沿って補足の畦を設定している。IV層上面において溜め池状遺構を検出した。IV層とV層は比較的厚く堆積していたので、それぞれ10cmの人工層位による分層発掘を実施した。V層上面では溝、土坑、小穴等、VI層上面では大溝、河川、土坑、小穴等、多くの遺構を検出した。V層中（報告するV下層上面）からは土器溜り

#### 調査・整理作業の経過

(報告する S X 5) を確認した。各層で検出した遺構は写真撮影と平板測量をおこなった。遺構番号を付した後、埋土の土質・色調を記録し、遺構の発掘と実測作業を併行しておこなった。

11月1日には福音小学校児童に現場を公開し、啓蒙普及活動に努めた。その後は、記録図面の補足や写真撮影をおこない、11月24日に発掘調査（野外調査）を終了した。

整理作業（屋内調査）は、11月27日から開始した。出土遺物はコンテナ（55×39×29cm）で60箱以上を数え、その多くは弥生土器と須恵器等の土器類であった。この他に石器と鉄器がある。整理作業はこの多量の遺物に対する洗浄・注記・接合から始め、これと併行して記録図面と記録写真的台帳を作成した。基礎的な整理を平成8年3月までおこない、その後は遺物実測図を作成した。遺物実測図の作成とともに遺構実測図を整理し、これらの作業に6ヶ月を要した。その後、図版作成・浄写・執筆にとりかかり、出土遺物と検出遺構に関する資料調査をおこなった。最後に出土遺物の個別写真と集合写真を撮影した。

室内調査は、次の屋外調査と併行して進めることとなり、今次調査の報告書作成に関わる全ての作業を終了したのは平成10年3月である。



第1図 調査地位置図（縮尺 1/3,000）

#### 4. 調査区の設定と呼称

造成土・旧水田層の掘削を行った後に、業者に委託し来住町長隆寺の北に設置されている3級基準点から座標点（No.2～No.4）を調査区西半部に移動した（第2図）。座標は以下の通りである。

No.1 X=90854.000 Y=-65585.000 H=28.036

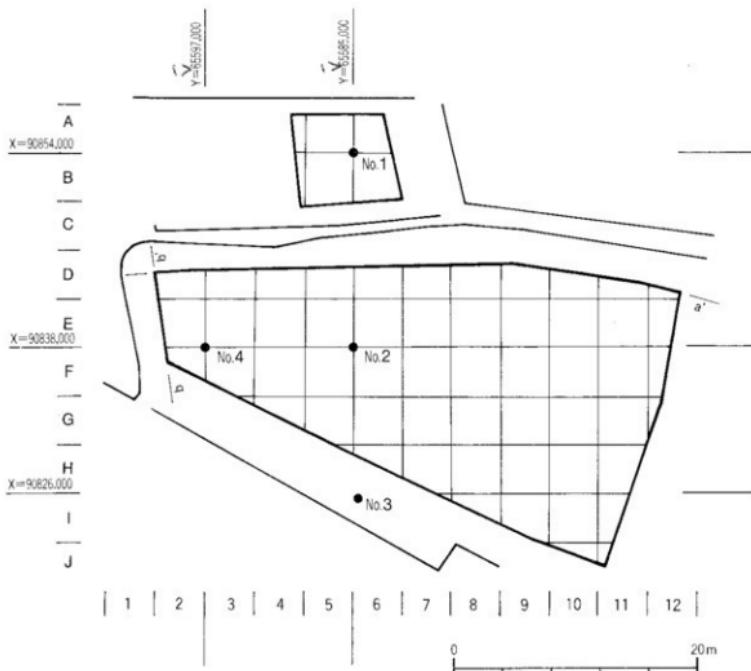
No.2 X=90838.000 Y=-65585.000 H=27.659

No.3 X=90826.000 Y=-65585.000 H=28.140

No.4 X=90838.000 Y=-65597.000 H=27.682

これら3点の座標点のうち、No.2を中心として真北方向（磁北から東偏6度21分）を軸として4m方眼区画を設定した。方眼区画は北から南へA・B・C…、西から東へ1・2・3…とし、これらを組み合わせて呼称することにした。なお、弥生時代後期の遺物が集中出土したSD10とSX5の調査では、4m方眼区画をさらに細分した地区割りを用いて遺物の分布を記録した。

なお、No.1のあるA4～6区とB4～6区は、湧水のため調査ができなかった。



第2図 調査地区割図（縮尺 1/400）

## 第Ⅱ章 位置と環境

乃万の裏遺跡は、松山平野の東にある洪積台地に立地する縄文時代から中世までの複合遺跡である。今回の調査地点は、国道11号バイパス工事に伴って実施された1次調査地点の北西200m、松山市北久米町773、星岡町647他である。

松山市の位置する松山平野（道後平野）は、四国北西部の高縄半島の南西基部に開けた平野である。平野の中央南よりを重信川が流れている。右岸側からは石手川・小野川・悪社川が、左岸側からは表川・押志川・御坂川・砥部川などの支流が合流し、重信川は東から西へ流れ、伊予灘に注いでいる。重信川本川と右岸側から合流する諸河川の山麓部には、南～南西方向に開いた扇状地性の低地が形成され、これらの扇状地の間に過去の扇状地堆積物が一部段丘化し、洪積台地が存在する。本遺跡は重信川中流右岸の小野川扇状地と石手川扇状地との間の洪積台地上に立地する。

この洪積台地を、鹿島愛彦と高橋治郎はその形成時期の古い順に「高位段丘」、「中位段丘」、「低位段丘（上）」、「低位段丘（下）」に区分する。平井幸弘は、小野川の現世の新しい扇状地を「平井面」、洪積台地のうち鷹子町付近の地形面を「鷹子面」、福音寺付近の地形面を「福音寺面」と呼称し、地形分類をおこなっている。本遺跡は鹿島・高橋の「低位段丘（下）」、平井の「福音寺面」に立地する。

さて、松山平野では旧石器時代に遡る遺跡は現在のところ発見されていない。しかし、丘陵部や「平井面」を中心にナイフ形石器と細石器が採集されている。これらの旧石器遺物は弥生時代の集落遺跡や古墳の調査時に確認される場合がある。「福音寺面」に立地する北久米浄蓮寺遺跡3次調査地では、ナイフ形石器が残核と剥片と共に出土している。東本遺跡4次調査地ではA T火山灰（一次堆積層と二次堆積層）とA h火山灰とが層位的に検出されている。さらに愛媛大学農学部内の導味遺跡においてもA T火山灰とが確認されており、これらは古環境や古地形を復元する上で有効な資料となっている。

縄文時代以降の遺跡は、平野の各所で点々と発見・調査されている。東本遺跡4次調査では、A h火山灰下から石器が出土しており、縄文草創期～早期の良好な資料となっている。前期～中期の良好な資料は稀薄である。一方、後期以降は比較的まとまった資料が調査によって得られている。久米塙田森元遺跡では土坑から後期中葉の土器群が一括出土し、南久米片廻り遺跡2次調査からは晩期後葉の土器群が出土している。南久米片廻り遺跡出土の土器群は、平野北部の大溝遺跡出土資料に後続するものと考えられている。平野中央部の低地における窯立事例の欠如のためか、晩期の生産地の様相や構造等は明らかではない。今後の調査の進展により、重信川右岸の地域とくに小野川によって形成された扇状地の「福音寺面」周辺で水田等の生産遺跡の発見を期待する。

弥生時代になると、当遺跡が立地する洪積台地上や東の来住舌状台地上に、集落遺跡が展開する。30次を越える調査を数える久米高畠遺跡からは、弥生前期末～中期初頭の環濠が検出され、環濠の付近からは隅丸長方形の土坑群が多数検出されている。将来的には環濠の規模や様相、居住区の特定といった当該期の集落構造が明らかにされるものと期待する。福音寺小学校構内遺跡では中期の土坑1基、後期の区画溝1条、堅穴住居数棟、土器溜り1、壺棺墓4基が検出されている。また11地点の調査に及ぶ筋違遺跡では後期の堅穴住居址数棟が調査され、福音寺川附遺跡では土坑内に高壙を蓋に転用した壺棺が検出されている。これらの調査成果から、弥生後期には本調査地点の北～南西の微高地に集落が展開し、居住域と墓域とが近接していたと想定される。

古墳時代には、集落関連遺構の検出例が増加する。北久米淨蓮寺遺跡、福音小学校構内遺跡、筋達遺跡からは、中～後期の堅穴住居、掘立柱建物、道路状遺構が調査され、集落構造の解明に有効な資料が得られている。遺物では、北久米淨蓮寺遺跡3次調査地、福音寺遺跡竹ノ下地区からは初期須恵器が出土しており、当該期の社会背景を考察する上で重要な資料を提供している。一方、墓の調査は集落調査に比して例は少ない。とりわけ出現期～前期の古墳の調査は稀少である。その中で、大峰ヶ台丘陵に所在する朝日谷2号墳は埴丘と埋葬主体の構造が明らかにされた前方後円墳である。調査によって豊富な副葬品とともに特異な形態の木棺痕跡や埴丘祭祀土器が明らかにされた。朝日谷2号墳は、当平野のみならず西部瀬戸内において古墳出現を考える際の基準資料として位置付けられている。本遺跡周辺において確認された首長墳は後期に集中する。経石山古墳、三島神社古墳、二ツ塚古墳、波賀部神社古墳、葉佐池古墳はいずれも重信川右岸地域に築造された大型前方後円墳である。群集墳は、小野川と川附川が合流する地点に展開する星岡、天山、東山の各分離独立丘陵に分布することが知られており、調査例が増えている。

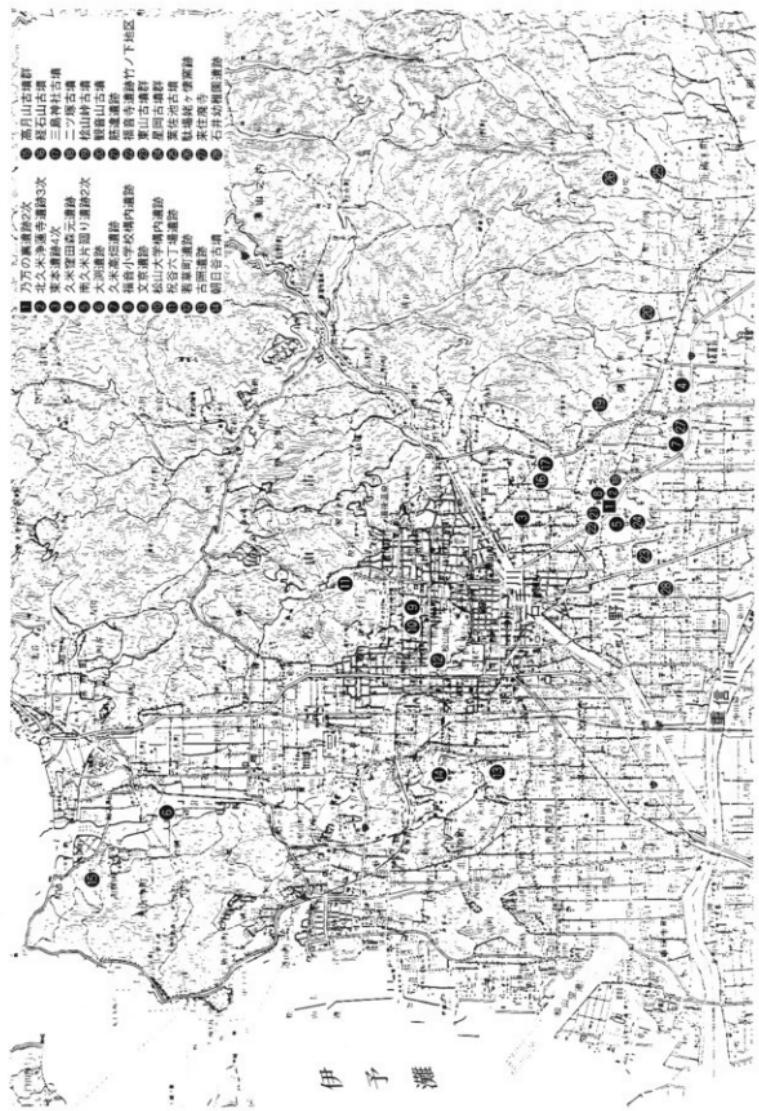
歴史時代では、来住台地上の官衙関連遺構が注目され、久米高畠遺跡7次調査地における「久米評」線刻須恵器の出土、「回廊状遺構」の検出、さらに、白鳳期の寺院である「来住庵寺」の存在があげられる。これらを考えあわせると、来住台地一帯は古代久米評・久米郡の中心地として機能したことか想定され、遺跡の構造的把握が期待されている。

中世では、来住庵寺21次調査地や鷹子遺跡で大規模な総柱の掘立柱建物群と区画溝群とが確認されている。

本遺跡周辺は標高30m前後の比較的起伏の少ない地形である。そのため現在に至っても、周辺の多くが水田として機能している。

#### 〔参考文献〕

- 松山市教育委員会 1983 「北久米遺跡（常坂・乃万の表・辰免）」『国道11号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 松山市文化財調査報告書17
- 鹿島愛彦・高橋治郎 1980 「四国平野の環境地質学的研究（1）—松山平野とその周辺部の地質—」『愛媛大学紀要自然科学Dシリーズ（地学）』
- 平井幸弘 1989 「鷹子遺跡および播磨味遺跡をとりまく地形環境」「鷹子・播磨味遺跡の調査」
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 横本旗一編 1984 「北久米淨蓮寺遺跡～3次調査地～」『松山市文化財調査報告書42』
- 高尾と長編 1996 「東本遺跡4次調査・桜松遺跡4次調査」『松山市文化財調査報告書54』
- 松山市教育委員会 1989 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
- 松村淳・梅木謙一 1996 「南久米片廻り道路2次調査地」『小野川流域の遺跡』『松山市文化財調査報告書57』
- 松山市教育委員会（財）松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1993 『松山市埋蔵文化財調査年報V』
- 松山市教育委員会（財）松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1995 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』
- 松山市教育委員会（財）松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1996 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』
- 松山市教育委員会（財）松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター 1997 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』
- 梅木謙一・武正良浩編 1998 「福音小学校校内遺跡—弥生時代廠—」『松山市文化財調査報告書50』
- 梅木謙一編 1996 「福音寺地区の遺跡」『松山市文化財調査報告書52』
- 田城武志・大森一成 1992 「経石山古墳の調査」「桑原地図の遺跡」『松山市文化財調査報告書26』
- 河野丈史 1997 「経石山古墳2次調査地」「桑原地区的遺跡Ⅲ」『松山市文化財調査報告書58』
- 松山市教育委員会 1972 「三島神社古墳」『松山市文化財調査報告書1』
- 愛媛県史編纂委員会編 1986 『愛媛県史 資料編 考古』『松山市教育委員会』



第3図 松山平野の主要排水分布図 (縮尺 1/80,000)

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 1. 基本層位 (第4~6図、図版2)

本調査区の基本層位は、6層に大別される。

〈I層〉暗灰色で、砂を少し混じえる土である。造成土と、旧水田土壤に細分できる。造成土は調査区の全城にみられず、その分布は東半に限られる。

〈II層〉灰色を呈し、調査区のほぼ全域にみられる。旧水田層の耕作土である。

〈III層〉暗黄褐色を呈し、鉄分とマンガンの沈着が顕著に認められる。旧水田層の床上部分に相当するものと考えられる。

〈IV層〉調査区の全城に分布している。層厚15~20cmを測る。灰褐色土で土のしまりがある。本層は壁面を観察する限り土層の細分をおこなうことが困難であった。そこで、調査では人工的に10cmずつ分層して遺物を収納し、上層部を「IV上層」、下層部を「IV下層」とした。遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦器・鐵冶関連遺物が出土している。本層上面（第1遺構面）では遺構検出した。

〈V層〉調査区の全城にみられる。層厚30~35cmを測る。土にしまりのある黒褐色シルト質土である。

・炭化物の細片を含んでいる。IV層同様、10cm単位の人工層位により3層（上から①、②、③）に区分している。遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・石底丁・鐵器等が出土している。土師器・須恵器の包含を基準として、これらを包含する①層を「V上層」、弥生土器を主体とする②・③層を「V下層」とした。V上層の上面（第2遺構面）では遺構を検出している。一部の遺構では輪郭が不明確なものがあり、これらは本層を一部掘り下げて検出した。なお、人為的な掘り方を伴わない遺物の溜まり（SX5）をV下層上面（第3遺構面）で検出している。

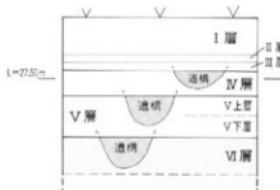
〈VI層〉調査区の全面に広がっている。純い黄褐色の粘質土で、「地山」と呼ばれるものである。本層上面（第4遺構面）では遺構を検出している。調査区の北壁と西壁は人力により深掘りしたが、遺物は出土していない。

### 2. 遺構と遺物

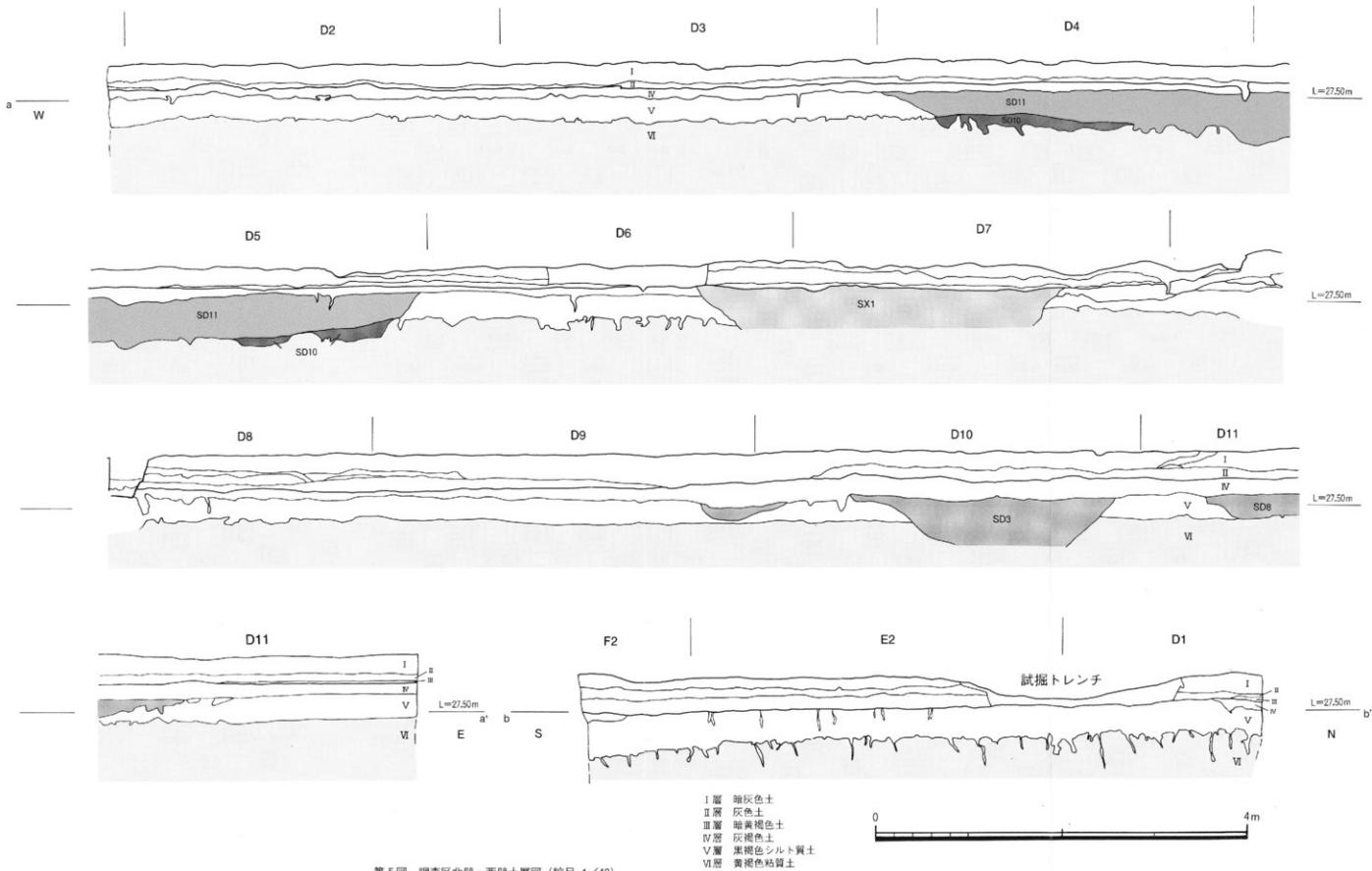
本調査では、弥生から近世までの各期の遺構を検出した。遺構の種別と数は次の通りである。

掘立柱建物	(掘立1)	1
土坑	(SK1~8)	8
溝	(SD1~11)	11
性格不明遺構	(SX1~5、9、12、13)	8
河川	(SR1)	1
小穴	(SP1~16)	16

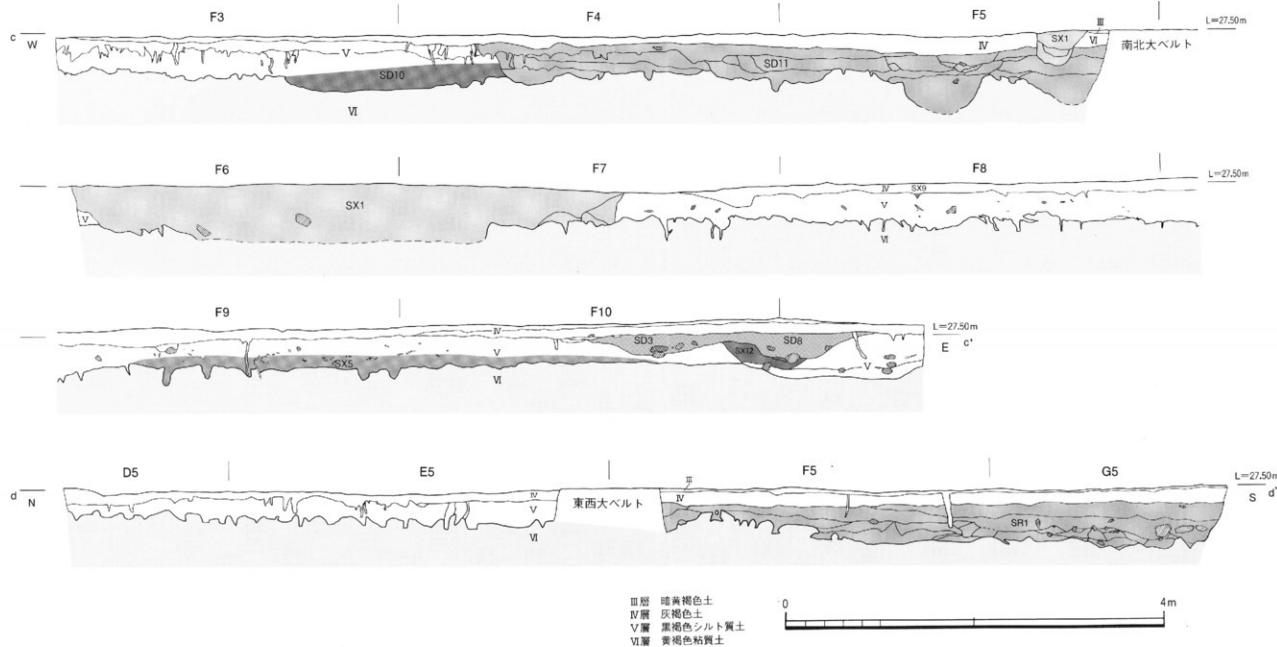
遺物は遺構出土品と包含層出土品に大別される。遺構からは弥生後期の遺物がまとまって出土した。包含層からは弥生後期・古墳後期・古代～中世の遺物が出土した。



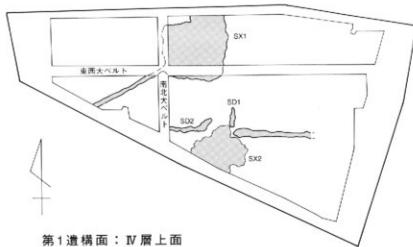
第4図 土層模式図



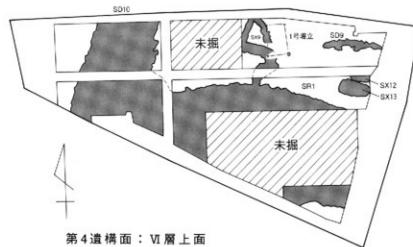
第5図 調査区北壁・西壁土層図(縮尺 1/40)



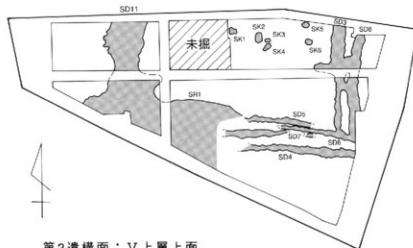
第6図 東西大ベルト・南北大ベルト土層図（縮尺 1/40）



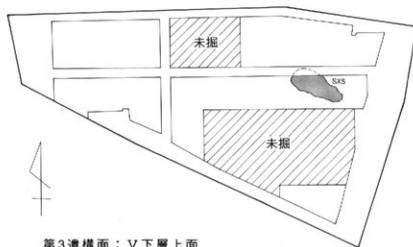
第1造構面：IV層上面



第4造構面：VI層上面



第2造構面：V上層上面



第3造構面：V下層上面

第7図 主要造構配置図（縮尺 1/400）



第8図 遺構全測図（第4遺構面）（縮尺 1/100）

## 第Ⅳ章 調査の記録

本調査では弥生時代・古墳時代・古代～中世・近世以降の各時代の遺構と遺物を確認することができます。本章では、時代別に遺構の概要を報告し、出土遺物も併せて報告することとする。

### 1. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構はSD10、SX5、SR1である。SD10とSR1は第4遺構面、SX5は第3遺構面において検出した（第7図）。SR1の検出は第4遺構面であるが、南北大ベルトの観察によって第2遺構面で遺構の輪郭が検出されていたことを確認した。SR1の埋土がV層と類似する地区があったために、第2遺構面においてSR1の輪郭を確定することは困難であった。

#### SD10（第8・9図 図版4・5）

調査区西部に位置し、南北方向にはしる溝である。調査区中央部（F5・F6・G5・G6区）において、東西方向にはしるSR1に合流する。溝幅は、6.6mと一定している。溝底は緩やかに南に向かって傾斜する。調査区の北側と南側における溝底の比高差は、30cm前後である。

SD10の周辺は、V層の黒褐色シルト質土と、IV層よりも色調が淡く1～2cm大から拳・人頭大の河原石を多量に含む淡灰褐色砂礫土で覆われていた。遺構の輪郭はこの両層を除去した後に確認することができた。東西大ベルト壁面と遺物を検討した結果、SD10が埋没し、徐々にV層が堆積し、その後に淡灰褐色砂礫土が堆積したと考えられる。

埋土は、黒色が強く、保水性に富む粘性土を基本とし、溝底には砂質土は認められない。遺物は、溝西側の中央と南に集中して出土した。出土遺物の多くは弥生土器で、破片の多くは器面に摩滅がみられない遺存良好なものである。土器片に混じって、拳大の縁が多く認められた。なお、古墳時代初頭の土器群が数点出土した。出土地点が限られており、この遺物は本遺構埋没後に構築された遺構に伴うものである。ただし、発掘調査ではこの遺構を確認することはできなかった。

遺物取り上げでは、4m方眼の大グリッドと1m方眼の中グリッドを併用した。弥生土器は遺構の南西部で多く出土する傾向が認められた。とりわけ、F3-b4区、F3-c4区で遺物が多い。大グリッド別ではF3区に遺物が多く、ここからは本遺構出土の弥生後期土器の約8割が出土した。弥生土器の器種は、壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・器台形土器・支脚形土器で構成される。器種構成比は壺形土器と壺形土器が多く、器台形土器や支脚形土器はきわめて少ない。口縁部を対象にした個体数は、壺形土器16、壺形土器33、鉢形土器7、高坏形土器2、器台形土器3、支脚形土器2であった。

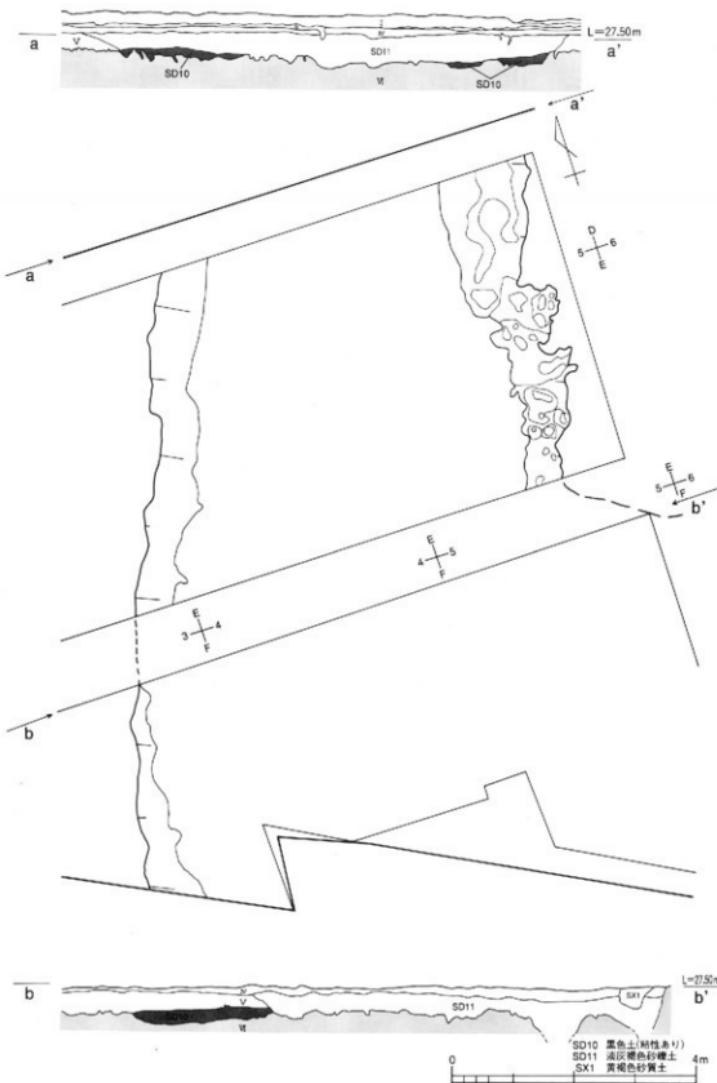
#### 出土遺物（第11～20図 図版12）

##### 壺形土器（1～25）

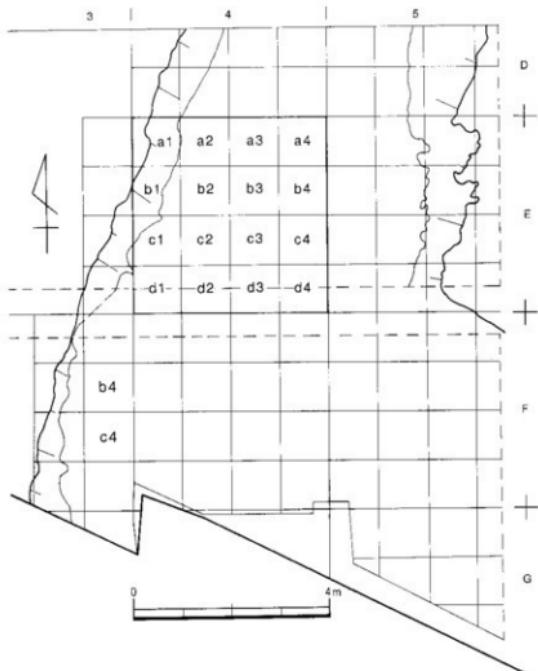
本器種は法量に大・中・小の3つのものがある。以下、法量ごとにみていく。

大型品（1～6） 口径値が20cmを超えるものである。遺物が破片資料であるため、全体の形状や器高値については判然としない。1・3は器腰が厚いもの、2・4～6は器壁が薄いものである。1は外反する短い口縁部をもち、その端部はしっかりと面取りされる。2～4は緩やかに外反する短い口縁部を有するものである。2の口縁端部は面取りされる。4は胴部最大径が口縁部の直下に位置する。

調査の記録



第9図 SD10 実測図 (縮尺 1/80)



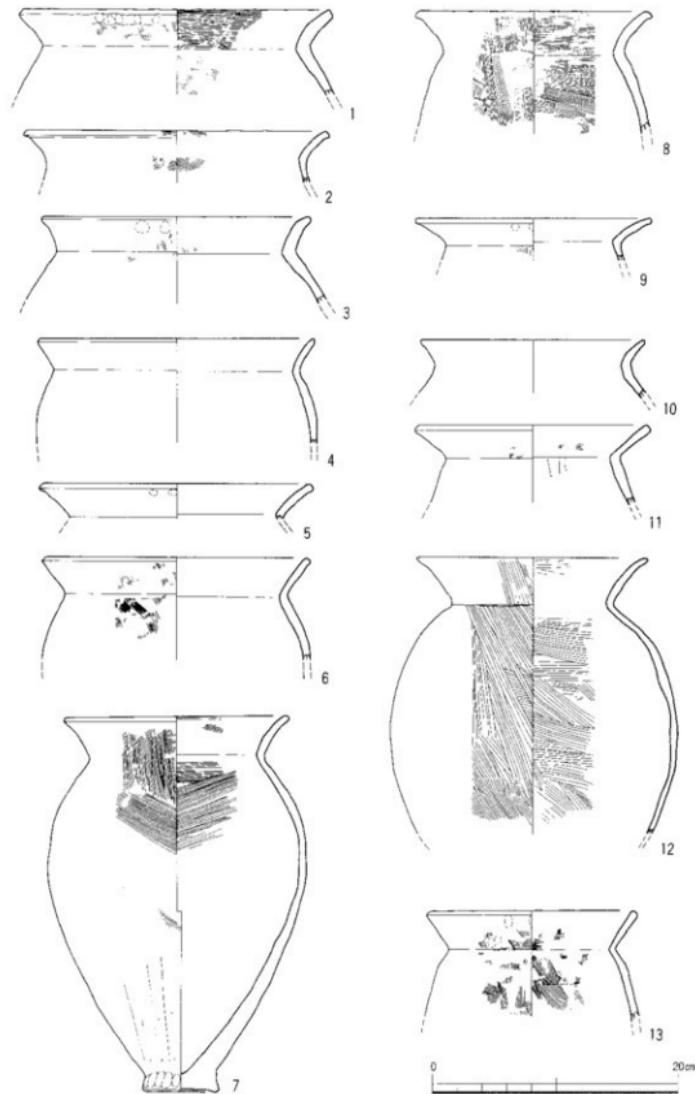
第10図 SD 10 遺物取り上げ地区割図（縮尺 1/100）

頸部の締まりは弱い。口径値と胸部最大径値はほぼ同じである。口縁端部は丸くおさめられる。6は外反するやや長い口縁部をもち、口縁端部はしっかりと面取りされる。口径値と胸部最大径値がほぼ同じに復元される。

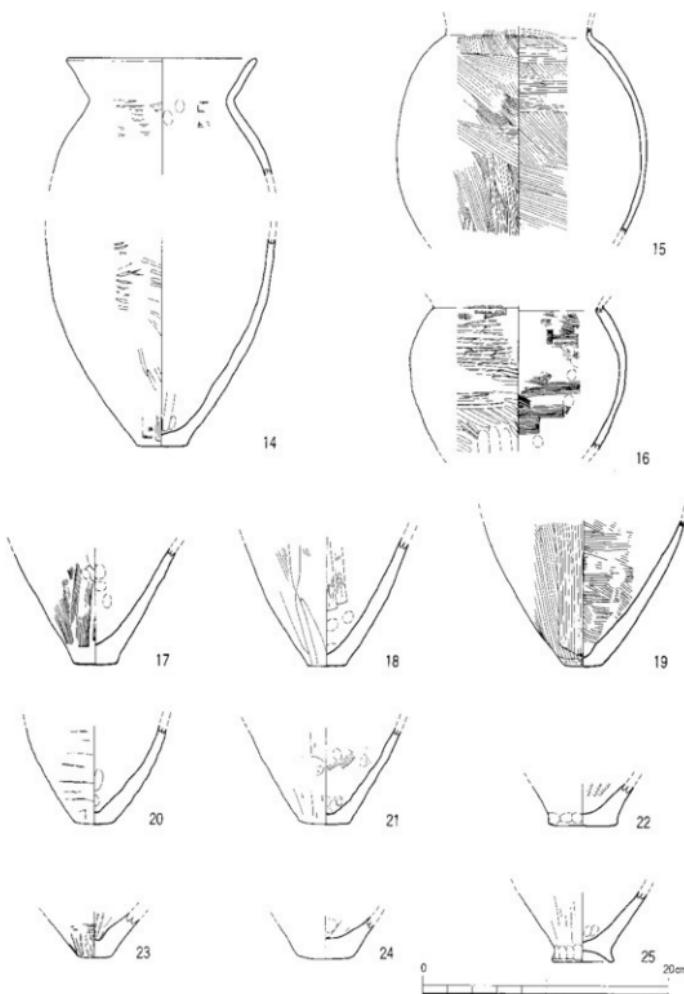
中型品a（7～12） 口径値が18～20cmのものである。口縁部が長いものが多い。7は整理作業時の接合よってほぼ完形に復元された資料である。肩部の張りは強く、胸部最大径値が口径値を凌ぐ。口縁部は長く、口縁端部は丸くおさめられる。器高値30.5cmを測る。10は短い口縁部をもち、肩部が張るものと考えられる。口縁端部は先細りする。12は肩部の張りが強く、胸部最大径値が口径値を凌ぐ。長い口縁部をもち、その端部は先細りする。

中型品b（13～16） 口径値が13～17cmのものである。13は胸部の張りが弱く、口径値と胸部最大径値がほぼ同じと考えられる。口縁端部はしっかりと面取りされる。14は一部を欠くものの、同一個体に復元したものである。長い口縁部をもち、肩部は張る。胸部最大径値が口径値を凌ぐ。器面が磨滅するものの、外面には平行タタキが看取される。15・16は肩部が張るものと考えられる。15は外面に細かい刷毛調整が施される。16は外面上半に平行タタキが看取される。

底部（17～25） 中～小型品のものであろう。平底のものと立ち上がりをもつものがあり、前者が



第11図 S D10 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4)



第12図 SD 10 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/4)

主体をなす。23は外面にタタキがみられる。立ち上がりをもつ底部には平底（22）と、上げ底（25）がある。

#### 壺形土器（26~69）

壺形土器は複合口縁をもつものと、單口縁をもつものに大別される。

##### 1) 複合口縁壺（26~48）

複合口縁壺は複合口縁部の接合部分の形態を基準に二大別される。  
 ①「コ」の字状接合部をもつもの（26~35） 破片資料のため、全体の形状を知れるものはない。26~28は口径値が20cmを超える大型品である。いずれも二次口縁部に加飾されない無文のものである。二次口縁部が内傾するものが多いが、28のように口縁端部を直立気味に立ち上げておさめるものがある。29・30・33は口径値が17~20cmの中型品である。29は直立気味にわずかに外反する長い一次口縁部をもつ。31・32・34・35は口径値が11~15cmの小型品である。中・小型品は、二次口縁部が内傾化する傾向が認められる。34は二次口縁部に加飾が施されており、横方向の4条の直線文と、その下にケシ状工具による波状文が組み合う。

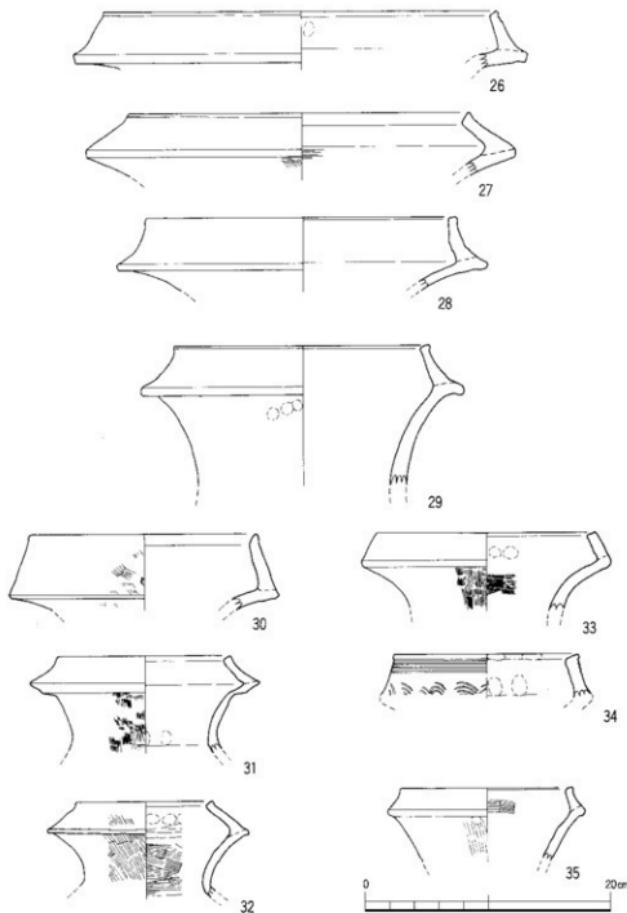
②「く」の字状接合部をもつもの（36~48） 破片資料のため、全体の形状を知れるものはない。36・37は口径値が20cmを超える大型品である。37は二次口縁部の一部が遺存する資料である。38~48は口径値が11~16cmの小型品である。小型品も、他と同様に二次口縁部が内傾するものが主体である。一次口縁が長くわずかに外反するもの（44）、一次口縁が長く直立するもの（46）、二次口縁部が袋状を呈し接合部の稜線が不明確なもの（47~48）があり、バリエーションに富む。

##### 2) 単口縁壺（49~59）

49は短い口・頸部で口縁部は大きく外反する。口縁端部はナデにより幅広の面をもつ。50~52は短く外反する口縁部をもつ。口縁端部の調整に差異が認められる。50は面取りされ、51はヨコナデにより凹む。52は丸くおさめられる。53はやや外傾する簡約な頸部に、短く外反する口縁部をもつ。頸部下端が締まり、頸部は細い形態である。54~57は口縁～胸部上半の破片資料である。54は口縁部が強く屈曲し、長く外反する。57は外面に施文がみられる。施文は横方向に二段の波状文が施された後に、弧文と魚のヒレ状文様が付加される。58は内外面ともにていねいなミガキが認められ、口縁端部は下方に拡張される。拡張された口縁端部には、ヘラ状工具による3条の沈線文後に2個一対の円形浮文が付加される。浮文には竹管文がみられる。口縁部内面にはヘラ状工具による4条の波状文が施される。本資料は器台の可能性も残されている。

60~66は底部である。60は大型品あるいは中型品の底部である。厚みがあり、立ち上がりをもつ。61・65・66は底部付近に焼成前の線刻をもつ。61は底部近くの外面に横方向に緩やかな曲線と縱方向の短い直線文が組み合う。手法は縱の後に横をひく順序である。なお、本資料は底部外面にも焼成前の線刻が施される。65の線刻は縱方向の2条の直線文である。66は小型品の底部である。線刻は横方向の緩やかなU字形の曲線と縱方向の短い直線文が組み合う。手法は横の後に縱をひいており、縱線は横線を貫通しない。

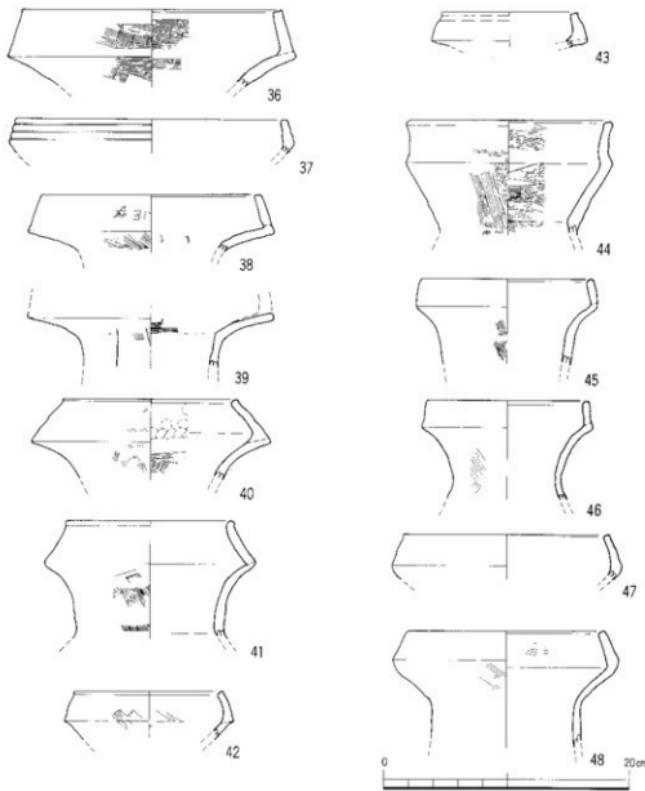
67~69は焼成前の線刻をもつ胴部片である。67は底部に近い胴部下半に線刻がみられる。縱方向を基調とした9条の線が認められるが、破片資料であるため線刻の全容は不明である。68は頭部付近の胴部上半に緩やかなU字形の線刻をもつ。頭部には斜め方向に刻みが施される。69は刻みをもつ貼付突起下に、2条一組の工具による大きな波状文が描かれる。



第13図 S D10 出土遺物実測図(3)(縮尺 1/4)

## 鉢形土器 (70~82)

破片資料が多く、器形等不明な点が多い。口径値を基準にして大型品(70)と小型品(71~86)に分けられる。70・71は口縁部が「く」の字状に折り曲げられ、頸部には刻目突帯が巡る。72は口縁部が短く外反する。73は頸部が長く、つば状に長い口縁部を持つ。胴部下半を破損するが、80~82のように底部は「ボタン」状に突出するものであろう。74・75は口縁部が内湾するものである。74は外面粗いナデ、内面はナデが施される。内面下半には指頭痕を残しており、粗いナデ調整である。75は内

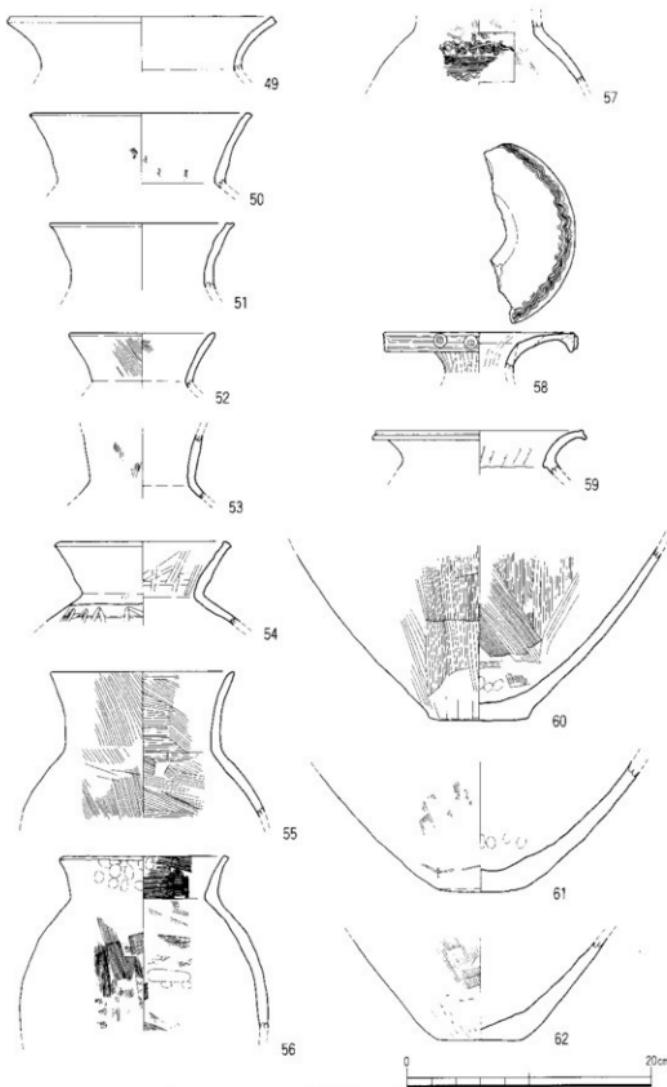


第14図 S D 10出土遺物実測図(4)(縮尺1/4)

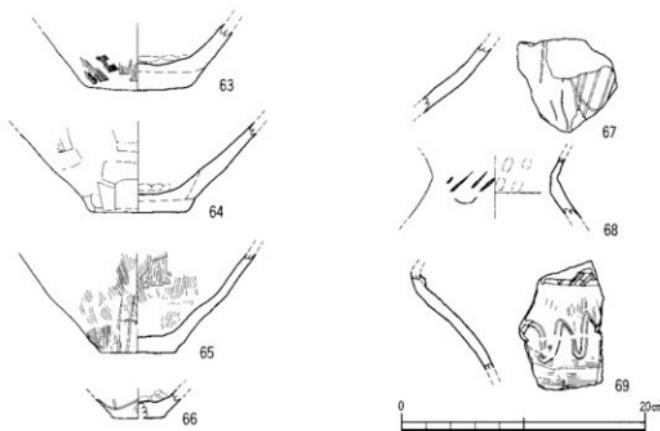
外面に縦方向のミガキがみられる。76~79は脚台付鉢である。76は直口する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめている。77~79は脚付部、80~82は底部が「ボタン」状に突出する。

#### 高坏形土器 (83~101)

完形品ではなく、器形が判然としない。83~93は坏部~脚部である。97~101は加飾高坏である。加飾高坏の裾部は、坏部同様に有段となる。柱部の出土はないものの、中膨らみの柱部と考えられる。97・98は坏部である。口径は大きく坏部が深い形態で、著しく長く外反する口縁部をもつ。99・100は裾部である。99は段をもち、裾部が外反する。段より上部に円孔がみられ、段部の稜線上に半裁竹管文が施される。



第15図 SD10 出土遺物実測図 (5) (縮尺 1/4)



第16図 SD10 出土遺物実測図(6) (縮尺 1/4)

## 器台形土器 (102~106)

いずれも破片資料である。102~104は受部である。102は口縁端部がわずかに上下に拡張され、そこに2条の沈線文が施される。103・104は貼付により口縁端が下垂する。103は拡張された口縁端面に、3条の沈線文が施される。内面は縦方向のミガキ調整で仕上げられる。赤色が顕著に認められ、顔料が塗布された可能性がある。105は縦方向に円孔がみられる。上下がスカート状に開く器形をもち、器高が10cm台の小形品であろうか。

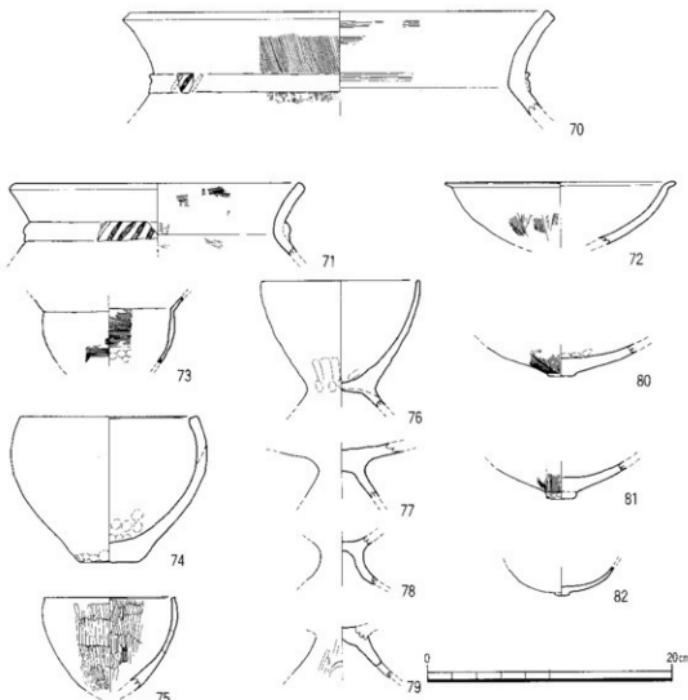
## 支脚形土器 (107・108)

107は受部が「U」字状にカットされ、傾斜部分をもつ。外面は指おさえの後に縦方向の刷毛調整と丁寧なナデによって仕上げられる。108は「U」字状にカットされ、3本の角状の突起をもつ。

## その他の遺物 (109~121)

109~114は土師器の壺形土器である。109~114は「く」の字状に屈曲し、短い口縁部をもつ。口縁端部が丸くおさめられるもの(109・110)、つまみ上げられるもの(111~114)がある。調整は肩上半部内面にケズリが顕著に施されるものがある(109・111・112)。116は土師器の二重口縁壺形土器である。117は突帯文土器である。面取りされた口縁端部には刻目が施され、下がった位置に刻目突帯が付加される。内外面は粗いナデ調整である。118~121は石器である。118~120は敲石である。121は磨石である。これらの遺物のうち、109~117は、SD10の埋没過程で混入した可能性があり、本遺構に直接伴わない遺物である。

時期：混入と考えられる土器群を除いた出土土器は壺・壺・鉢・高壺・器台・支脚で構成される。壺は「く」の字状口縁をもち、頭部が辯まり長胴化の傾向がみられる。壺は複合口縁壺・單口縁壺等で構成される。中・小型品にも複合口縁が採用される。鉢は口径20cmを超える大型品がみられる。高壺は脚部が単純に開くものと、段をもって開くものの2形態がある。器台は器形を知れる資料はないものの、垂下する口縁部をもち、支脚は胴部が中空のものであり、受部が「U」字状に傾斜する

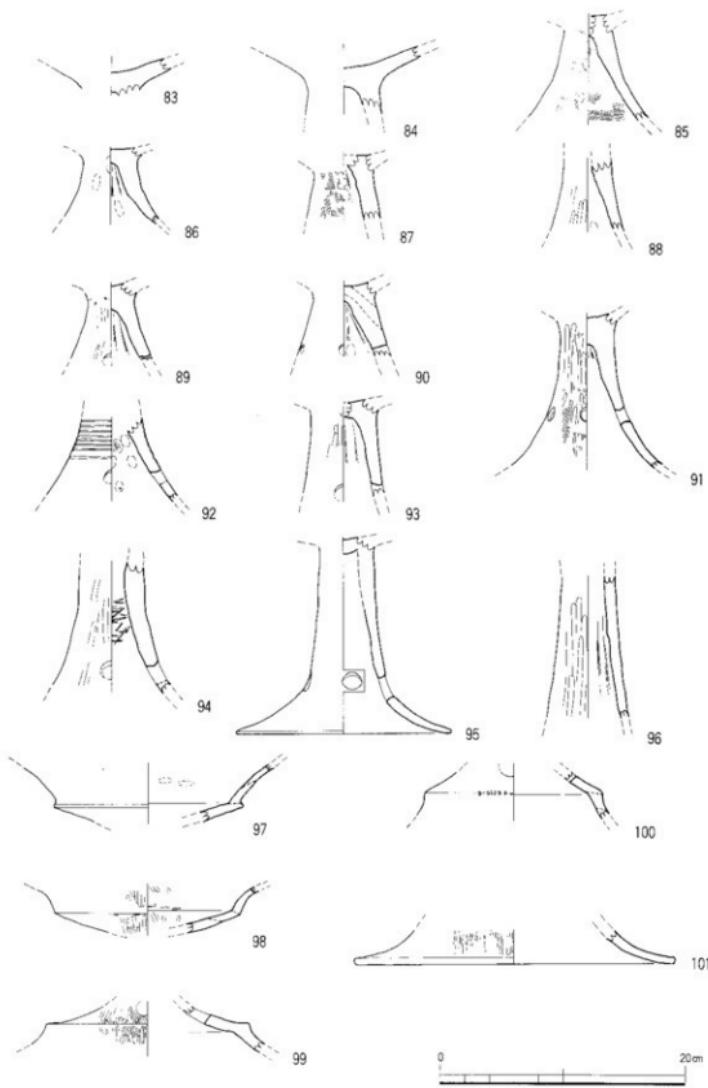


第17図 S D 10 出土遺物実測図(?) (縮尺 1/4)

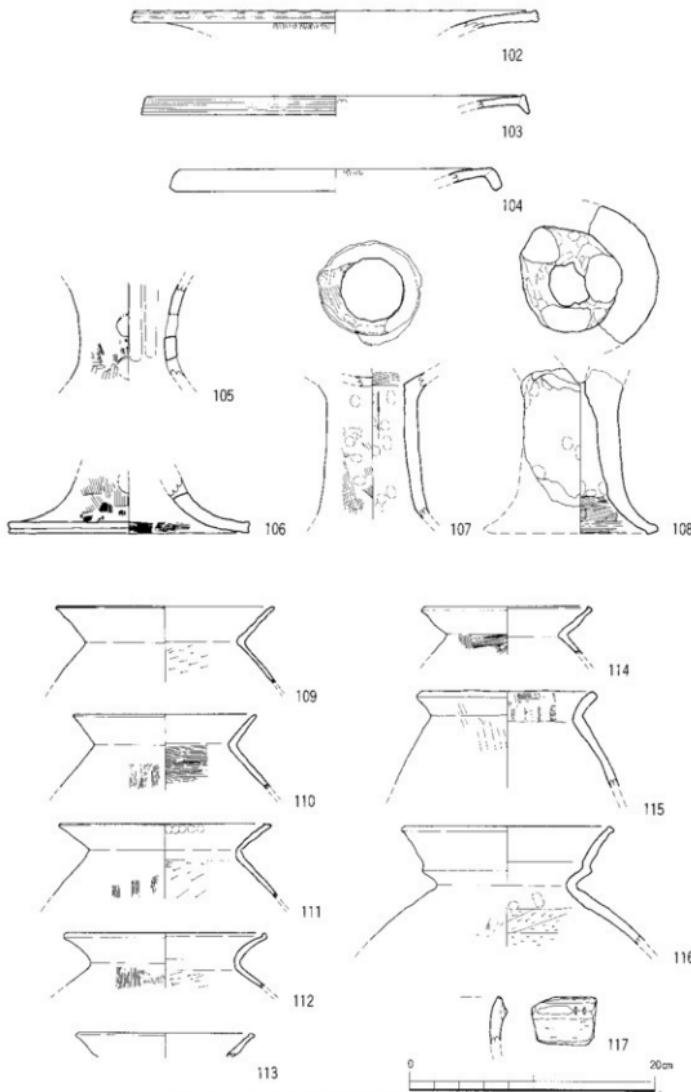
ものがある。これらは、梅木が提示した弥生後期土器編年後の後葉段階に対応するものである。ただし、小型の鉢や壺に「ボタン」状に突出する底部が数多く見られることや高壺の脚部の円孔が2段透かしてない点は、後期中葉の土器様相を一部にとどめているものとして理解できる。本調査地の北に展開する福音小学校構内遺跡 S D 3 や土器溜まり資料と併行関係にあるものと考えておきたい。

## S X 5 (遺物集中地点) (第7・21図 図版6・7)

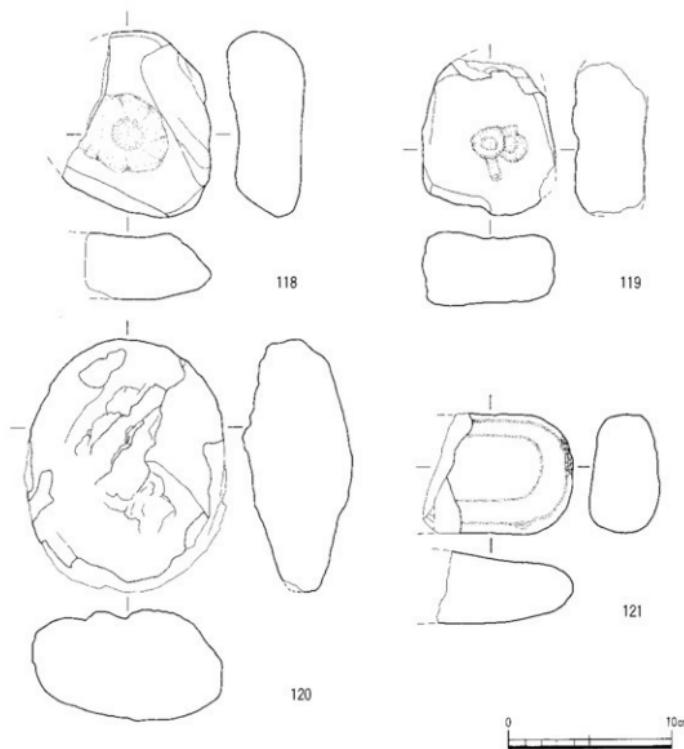
調査区の東部中央に位置する。遺物がまとまって出土した11×7 mの不整形の範囲を指す。特に、F 9区とF 10区西側において遺物が集中していた。遺物のまとまりが確認できたのは、V層を約10cm掘り下げた段階、すなわちV下層上面である。この段階で平面精査を試み、さらに遺物取り上げ時にも精査を試みた。また、東西大ベルト壁面では土層堆積状況の観察をおこなった。この結果、遺物に伴う人為的な掘り込みは未検出であった。遺物は、層厚15~20cmを測るV下層に包含されており、VI層上面まで遺物が重なる状態で出土したところもある。遺物は弥生土器が多く、S D 10同様、器面に



第18図 SD10 出土遺物実測図(8) (縮尺 1/4)



第19図 SD 10 出土遺物実測図 (9) (縮尺 1/4)



第20図 S D10 出土遺物実測図 (10) (縮尺 1/3)

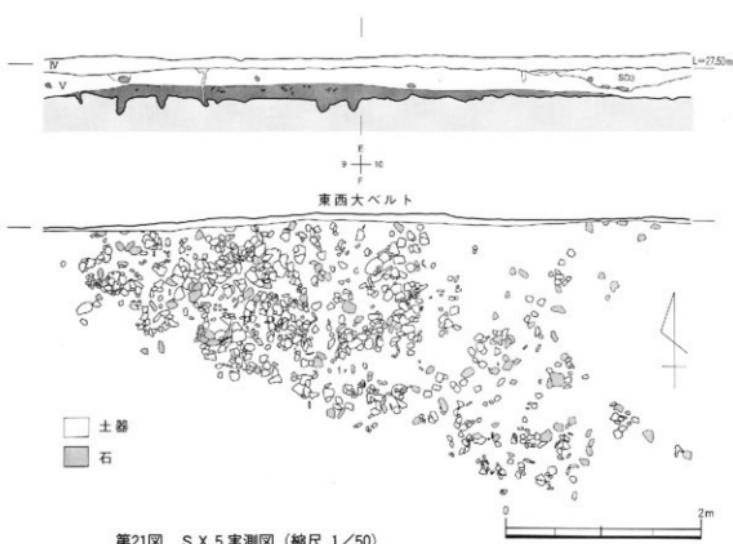
摩滅がみられないものが大半であった。接合作業中に完形に復元できたものがある。この他に拳大の礫が多く認められた。幾つかの礫は受熱により黒化・赤化したり、破碎していた。定型的な石器は2点含まれており、いずれも砥石である。土器と礫は混在するが、調査では両者の有機的関係を明らかにすることはできなかった。遺物取り上げは、50cm方眼の小グリッドを加えた、大・中・小グリッドを併用した（第22図）。

出土遺物（第23～39図 図版13～16）

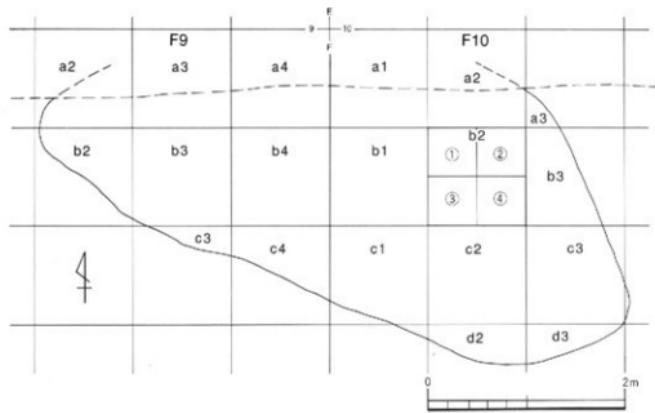
変形土器（122～164）

本器種は法量を基準にして三大別できる。以下、法量ごとに記述する。

大型品（122～130） 口径値が20cmを超えるもの。破片資料が多く、器形を知れるものは少ない。総じて肩部が張るものが多い。123は接合・復元によって器形を知ることのできる良好な資料である。口縁部は「く」の字形に短く外反し、縦部は面取りされる。肩部の張りは強く、胸部上半での最大径



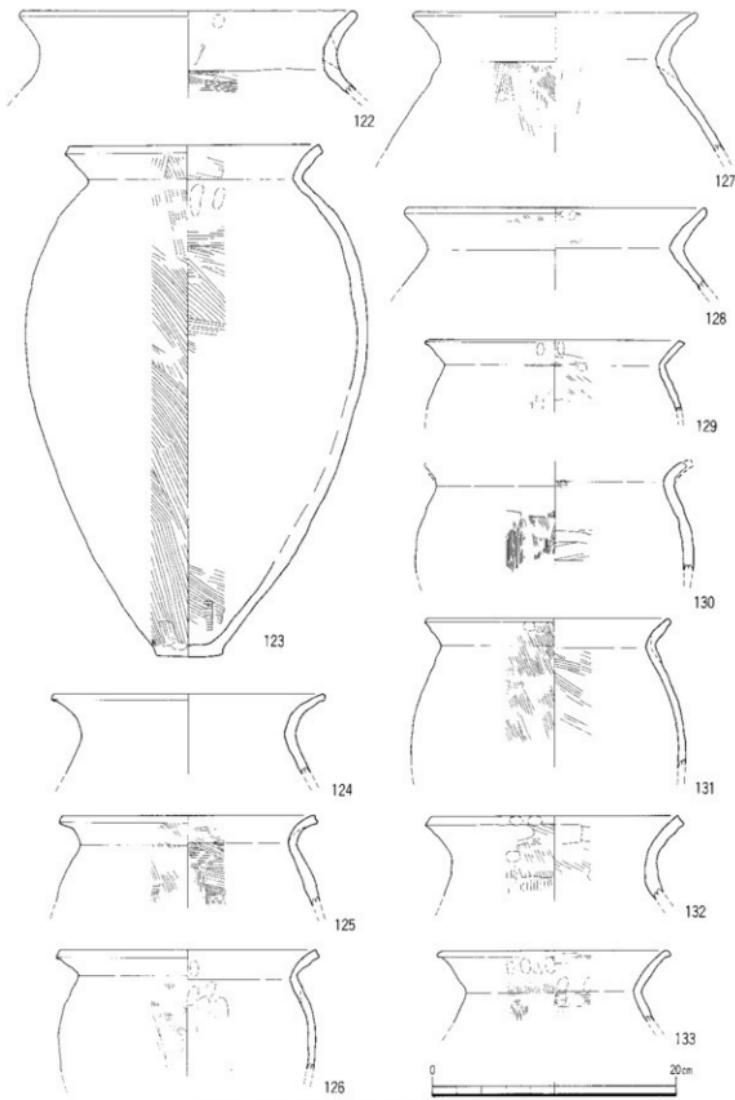
第21図 S X 5 実測図（縮尺 1/50）



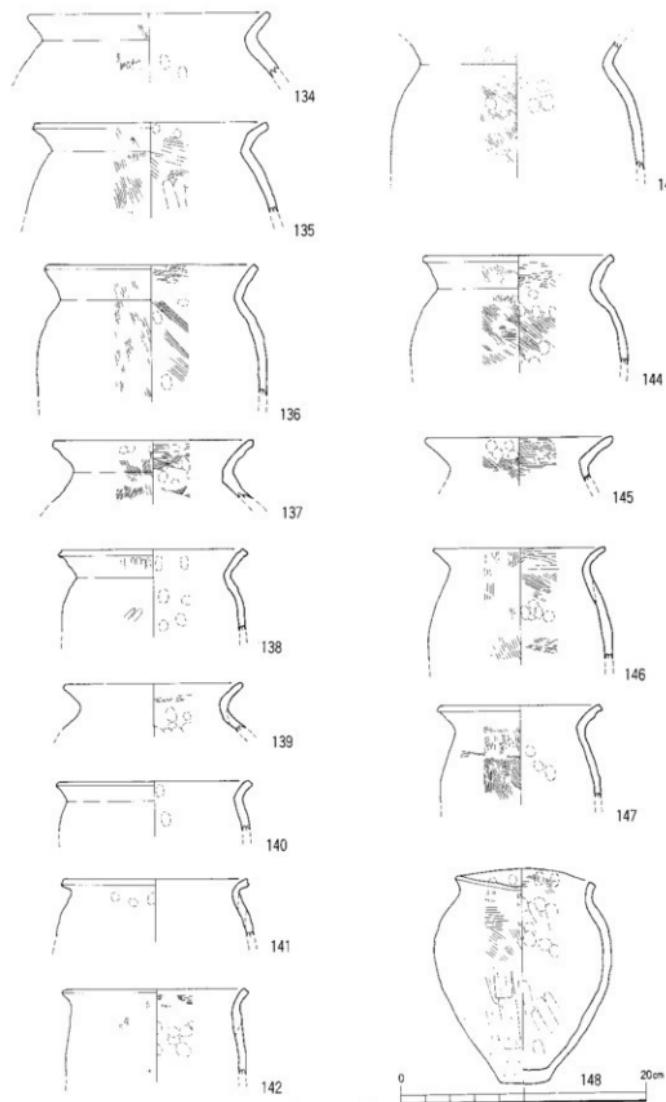
第22図 S X 5 遺物取り上げ地区割図（縮尺 1/50）

値が口径値を凌いでいる。底部はわずかに立ち上がりをもつ平底である。内外面は刷毛目調整を基本とする。器高値は40cmを超える。

中型品 a (131~136) 口径値が18~20cmのものである。口縁部が長いもの (132・133・136) と、短いもの (131・134・135) がある。

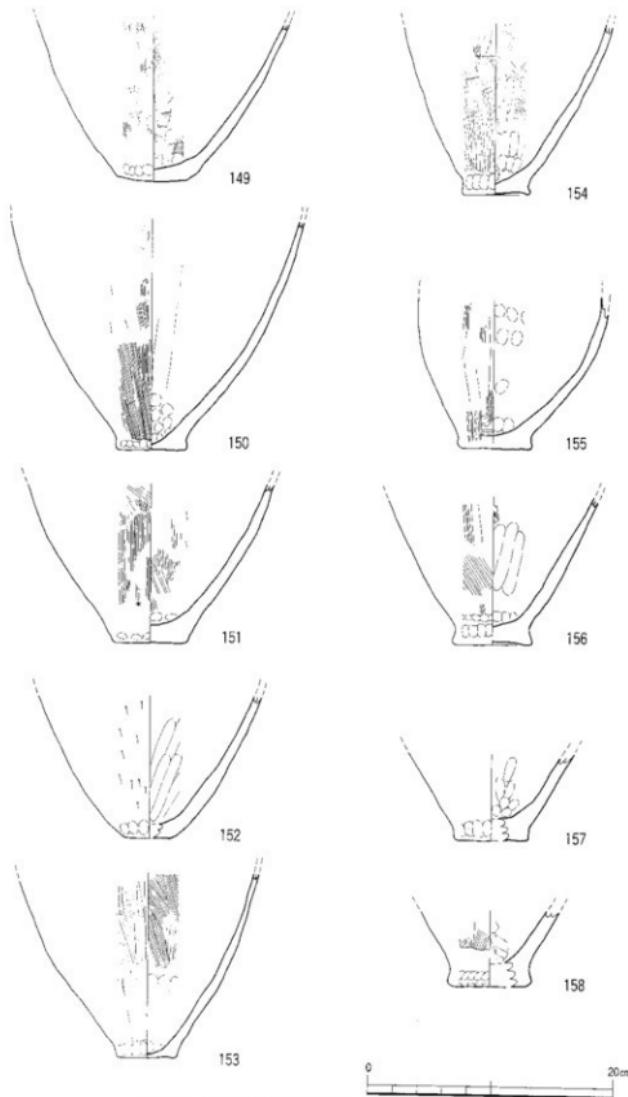


第23図 S X 5 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4)

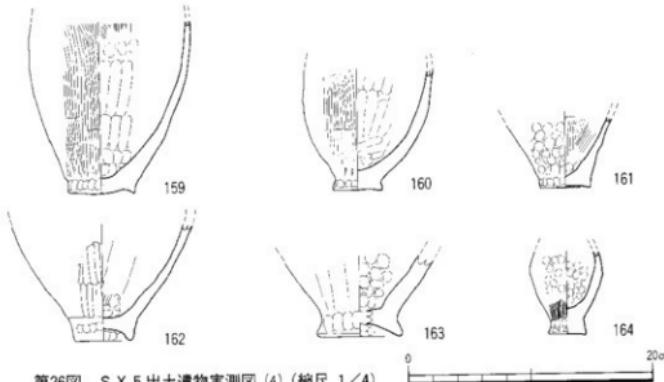


第24図 S X 5出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4)

調査の記録



第25図 S X 5 出土遺物実測図 (3) (縮尺 1/4)



第26図 S X 5出土品 (4) (縮尺 1/4)

中型品 b (137~147) 口径値が13~17cmのものである。肩部の張るものが多く、腹部最大径値が口径値を凌いでいる。少數ではあるが肩部の張らないものもある。

小型品 (148) 口径値が13cmに満たないものである。

149~164は底部である。平底が主体であり、立ち上がりをもつものと立ち上がりがないものがある。

壺形土器 (165~242)

壺形土器は、複合口縁をもつものと単口縁をもつものがあり、前者が多い。多くが破片資料であり、器形を知れるものは少ない。

1) 複合口縁壺 (165~209) 複合口縁壺は複合口縁部の接合部分の形態を基準に二大別される。

①複合口縁部の接合部が「コ」の字状を呈する (165~185)

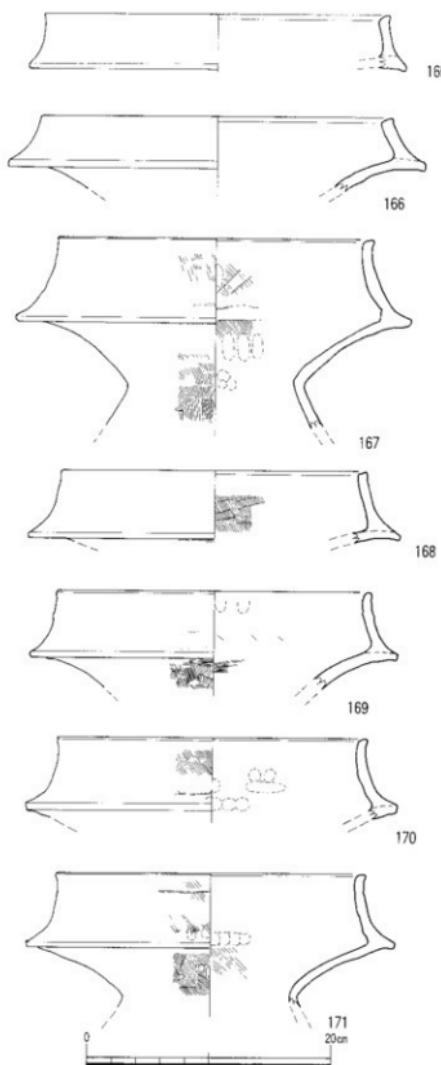
大型品 (165~177) 口径値が20cmを超える。二次口縁部が直立するものと内傾するものがある。167は長い二次口縁部が直立気味に立ち上がり、頸部は強く締まる。内外面には稜線がみられる。172は短く内傾して立ち上がる二次口縁部である。接合部内面には指頭痕がみられる。174・175は接合部が大きく外方に張り出し、タガ状を呈する。口縁部は肥厚し、端部は面取りされる。175の頸部には斜位方向に刻まれた突帯が1条巡る。

中型品 (178~179) 口径値17~20cmを測る。178・179は二次口縁部が内溝しながら立ち上がる。

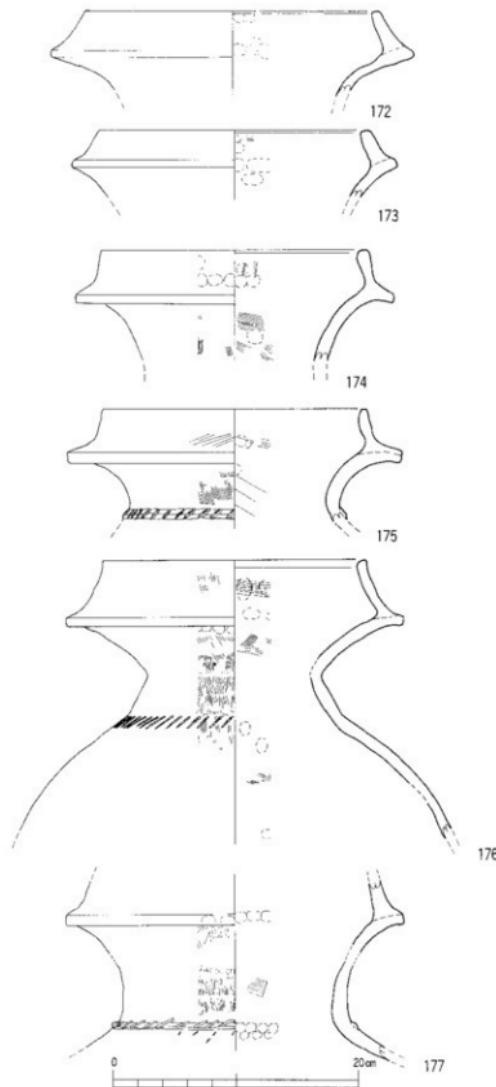
小型品 (180~185) 口径値11~16cmを測る。180は二次口縁部外面に加飾がみられる。加飾は5条の波状文の下に竹管文が横列され、この組み合せが2段にわたっている。183・184は二次口縁部がきわめて短い。183は二次口縁部が磨滅し、器面の遺存は良好とはいえないものの、外面に4条の波状文が看取される。185は完形に復元できた良好な資料である。腹部は球形を呈し、強く締まる頸部には刻目突帯が付加され、短い一次口縁部の上に直立する二次口縁部が接合されている。底部は立ち上がりをもたない平底である。器高値44cmを測る。

②複合口縁部の接合部が「く」の字状を呈する (186~209)

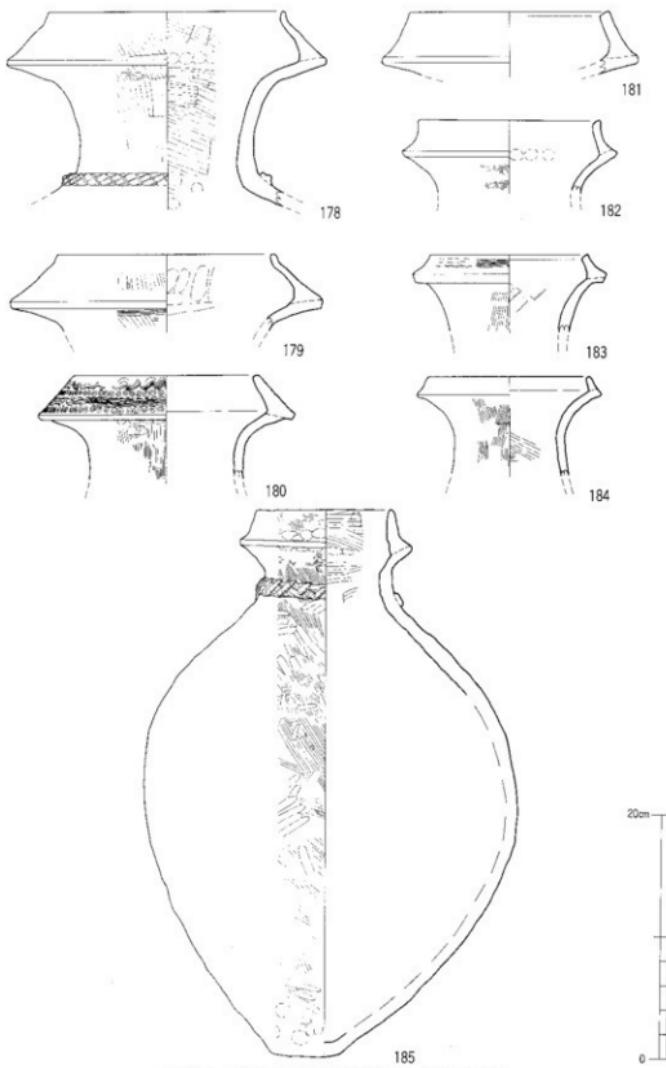
大型品 (186~188) 口径値が20cmを超える。186はやや内傾して立ち上がる頸部に複合口縁部が



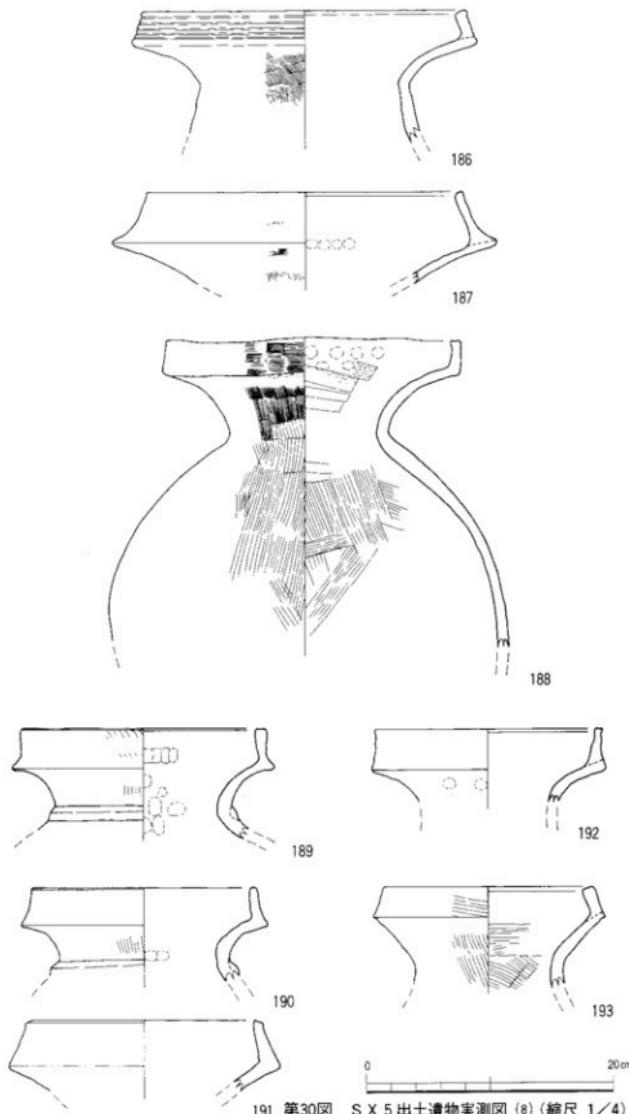
第27図 S X 5出土遺物実測図(5)(縮尺 1/4)

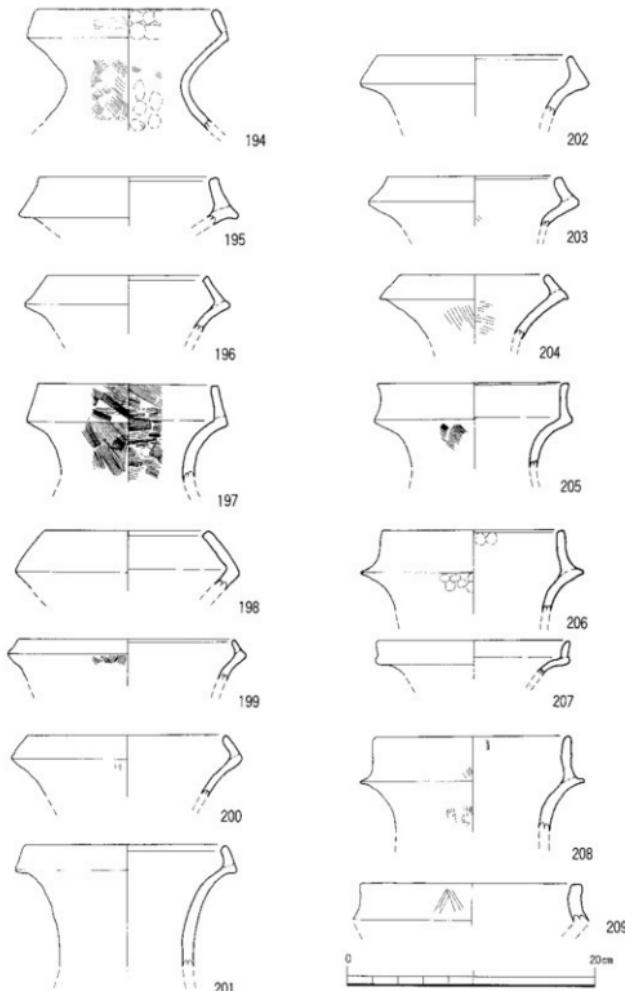


第28図 S X 5 出土遺物実測図 (6) (縮尺 1/4)

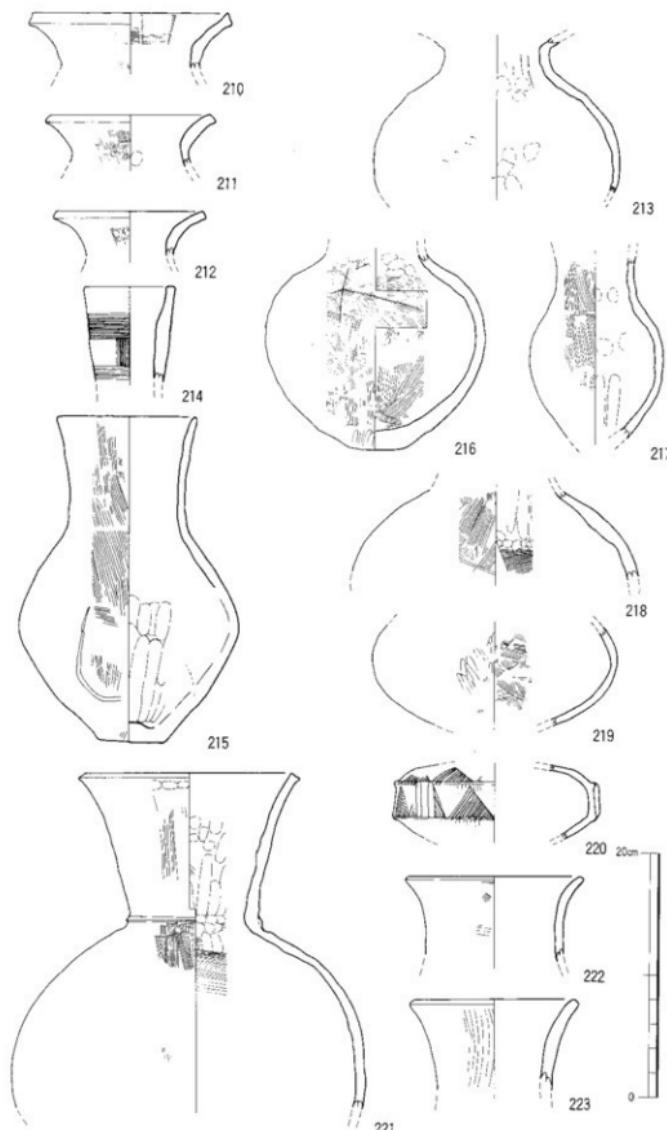


第29図 S X 5 出土遺物実測図 (7) (縮尺 1/4)





第31図 S X 5出土遺物実測図(9)(縮尺1/4)



第32図 SX 5 出土遺物実測図 (10) (縮尺 1/4)

のる。二次口縁部外面には5条の沈線文が施される。187は接合部が外方に大きく張り出しタガ状を呈する。

中型品（189～192・199・209） 口径値17～20cmを測る。二次口縁部が直立気味に立ち上がるものと、内傾するものがある。

小型品（193～198・200～208） 口径値12～16cmを測る。二次口縁部が内傾して立ち上がるものが多いう。209は中型品に復元される二次口縁部片である。三角文がみられる。

## 2) 単口縁壺（210～223）

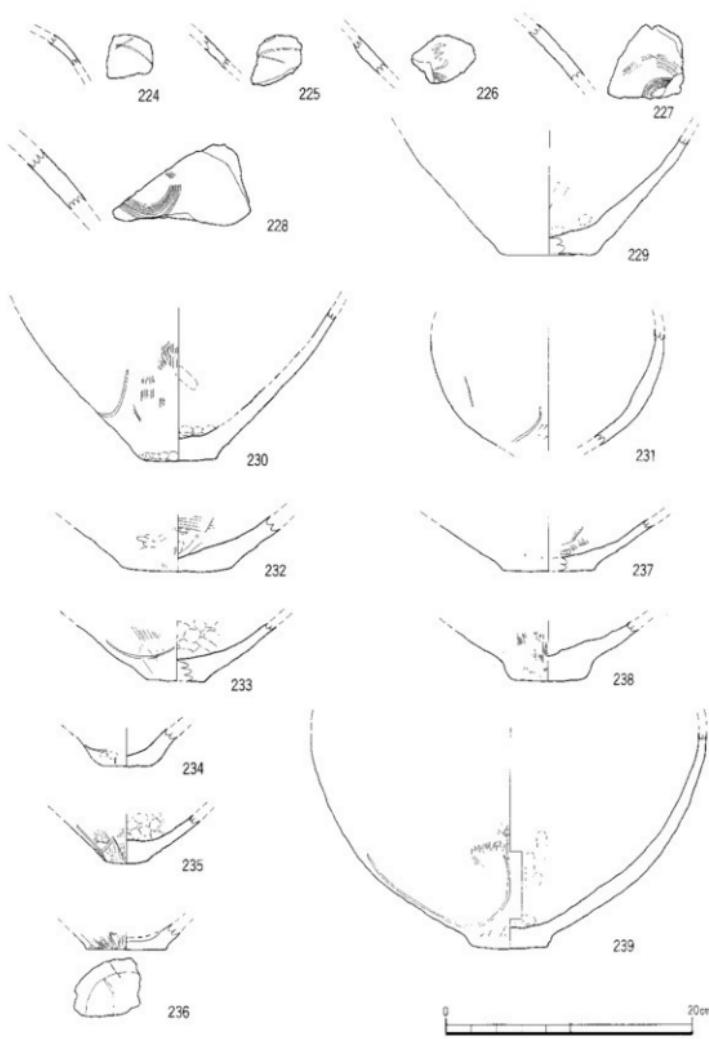
210～213は短い口・頸部のものである。210～212は横ナデにより口縁端部が幅広の面をなす。213は頸部が締まり短い筒状を呈し、外反する口縁部をもつ。214は直立する縦長い頸部と直口する口縁部をもつ。頸部外面に細く浅い多条の直線文がみられる。215～218は直立・外傾する縦長い頸部と、わずかに外傾する口縁部をもつ。215は肩部の張りが強く、胴部下半の一方に向かって焼成前の線刻が施される。220は底部を欠する胴部片である。中位がやや内傾して立ち上がる。縱方向のヘラミガキ後、胴上位と中位に加飾される。加飾は直線文と龜文が組み合い、胴中位にはさらに綴2列の棒状浮文が貼付られる。221～223は外傾する長い頸部に、外反する口縁部をもつ。221は器高値が40cmを超える大型品と考えられる。

224～239は胴上半部片と下半～底部片である。焼成前の線刻をもつものも含む。224～228は胴上半部に線刻をもつ。224・225は魚のヒレ状文様。226～228は複数の弧文が施される。底部は立ち上がりをもつ平底が主体をなし、立ち上がりをもたない平底や下方に突出するものもある。線刻は底部付近に施されるものが多い。なお、236のように線刻が底部外面にみられるものもある。

240～242は異形態。いずれも長頸壺。240は口縁部片であるが、口縁端部は上下に拡張され、沈線文がみられる。241は肩部が張り、頸部は内傾して立ち上がる。口縁部は大きく外反し端部は上方に拡張される。口縁端部には多条の沈線文、頸部に4条の凹線文、胴部最大径付近には「ノ」の字状の刺突文がみられる。調整は外面の胴上半部が縱方向のミガキ、頸部がナデである。内面は胴上半部は横方向のケズリと指頭痕、頸部にはシボリ痕がみられる。在埴土器の色調とは異なり、淡乳褐色を呈する。形態・施文・胎土等から本資料は搬入土器と判断される。242は完形に復元された資料である。筒状の頸部にはタテ刷毛調整後に浅い沈線文が施される。胴上半部に最大径をもつ。肩部には板の木口を押しつけた「ノ」の字状の刺突文がみられる。底部はわずかに立ち上がりをもつ上げ底である。

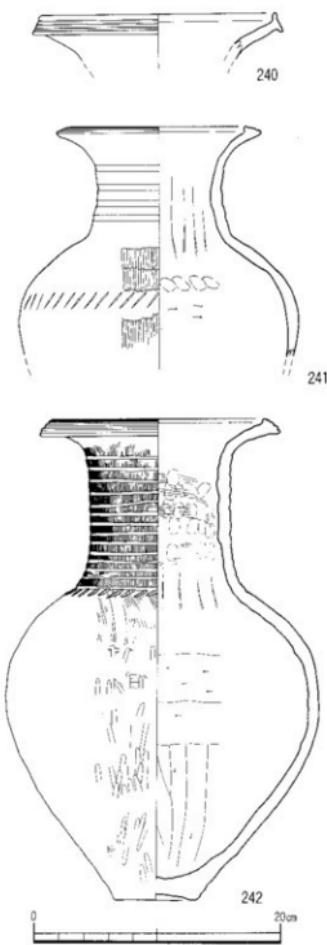
鉢形土器（243～251） 口縁部を折り曲げるものと直口のものがある。244は内湾する口縁部をもつ小型品である。246は大きな平底をもち、調整は外面がヘラミガキ、内面が横～斜め方向の刷毛である。248は台付き鉢の台部、249・250は底部である。底部は下方に突出するものがある。251は脚付き鉢の脚部である。緩やかに大きく外反する裾部に焼成前の穿孔をもつ。穿孔は円形で4方向である。

高坏形土器（252～270） 252～255は坏部である。坏部の接合部に稜をもつものと段をもつものがある。252は接合部に稜をもち、大きく外反する口縁部をもつ。253は口縁部が直立してから外反する。成形は指おさえによってなされ、外面にはタテ方向の刷毛目、内面には横方向の刷毛目とミガキによる調整がなされる。254は坏部の接合部に段をもち、大きく外反し著しく長い口縁部をもつ。255は外面に焼成前の線刻をもつ。256は接合時に完形に復元された良好な資料である。坏部の接合部に稜をもち、外反する口縁部をもつ。脚部は、柱部がやや外反し、裾部が広がる形態をとる。裾部には5方向に円形の焼成前穿孔が施される。258は坏部の接合部に段をもち、直立気味に外反する口縁部をも



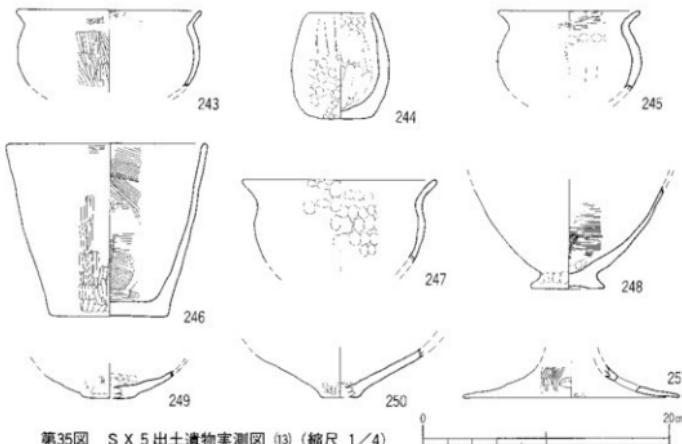
第33図 S X 5 出土遺物実測図 (11) (縮尺 1/4)

調査の記録



第34図 S X 5 出土遺物実測図 (12) (縮尺 1/4)

つ。口縁部は強い横ナデにより仕上げられ、端部は面取りされている。脚裾部の5方向に焼成前穿孔がみられる。260~268は坏部~脚部片、脚部片である。脚部の短いものと長いものがある。裾部はゆるやかに外反し、円孔が施されるものが多い。269は坏部の接合部に段をもつ加飾高坏である。口縁



第35図 S X 5 出土遺物実測図 (13) (縮尺 1/4)

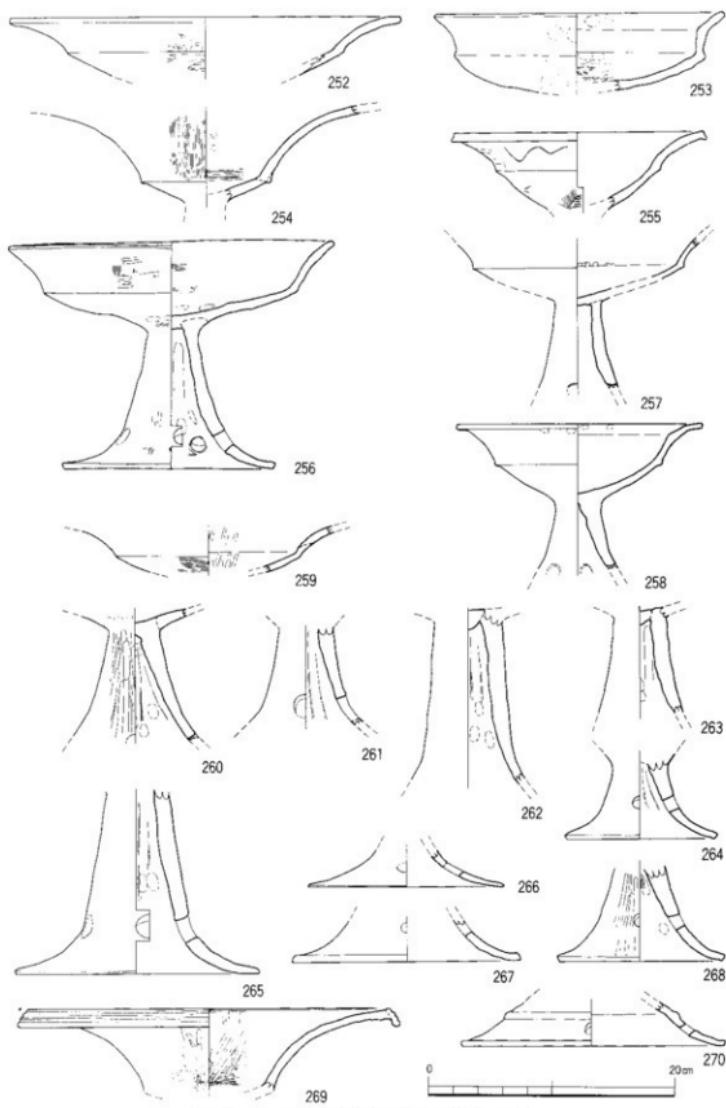
部は大きく外反し、著しく長い口縁部をもつ。口縁端部が下方に拡張され、3条の沈線文がみられる。内外面の調整は縱方向のミガキである。口縁端部と内面の一部には赤色顔料とみられる顔料が観察される。本資料は254と同一固体の可能性がある。270は裾部の接合部に段をもつ。段より下部に焼成前穿孔がみられる。

**器台形土器 (271~276)** 個体数が少なく形態のバリエーション等、詳細不明な部分が多い。271は接合時に完形に復元できた資料である。柱部が太く、上下がスカート状に大きくひらく形態をとる。口縁(受部)の裾部は下方に拡張され、斜線充填による三角文が施される。柱部には2段にわたる円孔がみられる。円孔は互い違いに配置され、ともに4方向である。裾部は外反し、端部はナデにより面取り気味におさめられる。273は受部上面に半截竹管文が2列施される。274~276は裾部である。276は裾部端面が上下に拡張され、裾部には5条の凹線状の施文がみられる。外来系か。高環形土器の裾部の可能性もある。

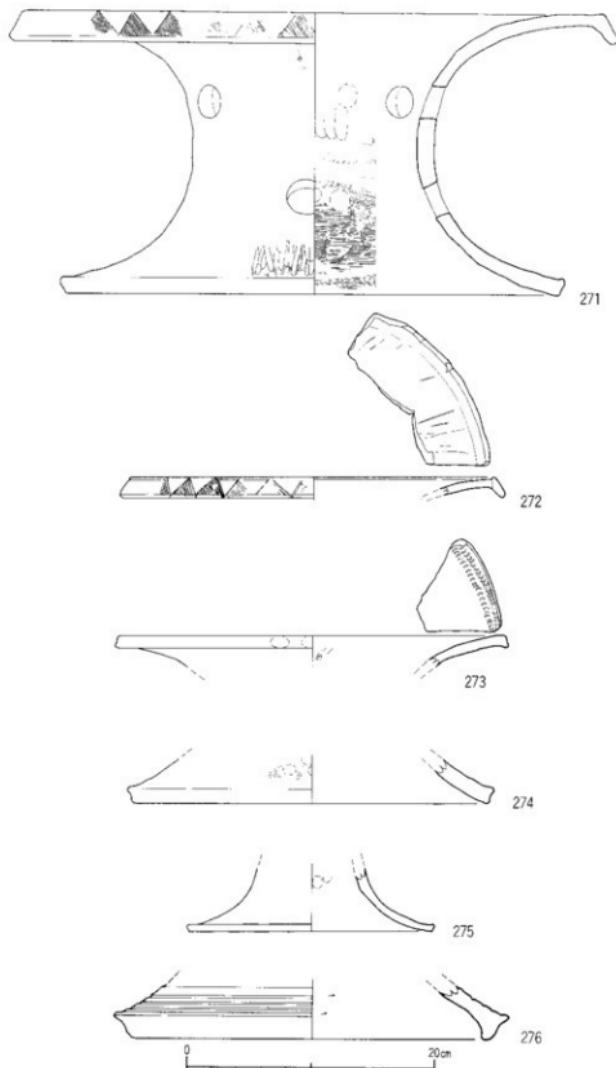
**支脚形土器 (277~278)** 受部が「U」字状にカットされ、傾斜部分をもつ。指痕が顕著に残り、粗い調整により仕上げられる。

**石器 (279・280)** 2点出土した。ともに砥石である。実測図の横断面形で示したように、各面は中央部分が凹んでおり、器面には摩滅痕や削痕が観察される。このことは4面のいずれもが機能面として扱われていたことを示している。さほど大きくないことと考えあわせて、ここでは携帯用の手持ちの砥石として理解しておきたい。

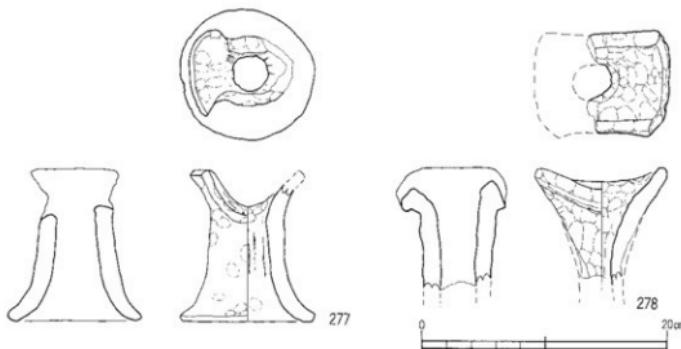
**時期:** 出土土器は甕・壺・鉢・高環・器台・支脚で構成される。甕は「く」の字状口縁をもち、頸部は綺麗化の傾向がみられる。壺は複合口縁壺・短頭壺・長頭壺・広口壺等で構成される。中・小型品の多くが複合口縁をもつ。高環は脚裾部が単純にひらくものと、段をもってひらくものの2形態がある。器台は器形を知れる資料は少ないが、完形に復元された271のように垂下する口縁部に斜線充填の三角文が施され、上下がスカート状に大きくひらくものがある。支脚は胴部が中空で、



第36図 S X 5出土遺物実測図 (14) (縮尺 1/4)



第37図 S X 5 出土遺物実測図 (16) (縮尺 1/4)

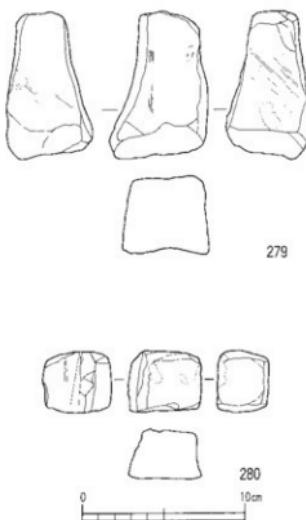


第38図 S X 5出土遺物実測図 (16) (縮尺 1/4)

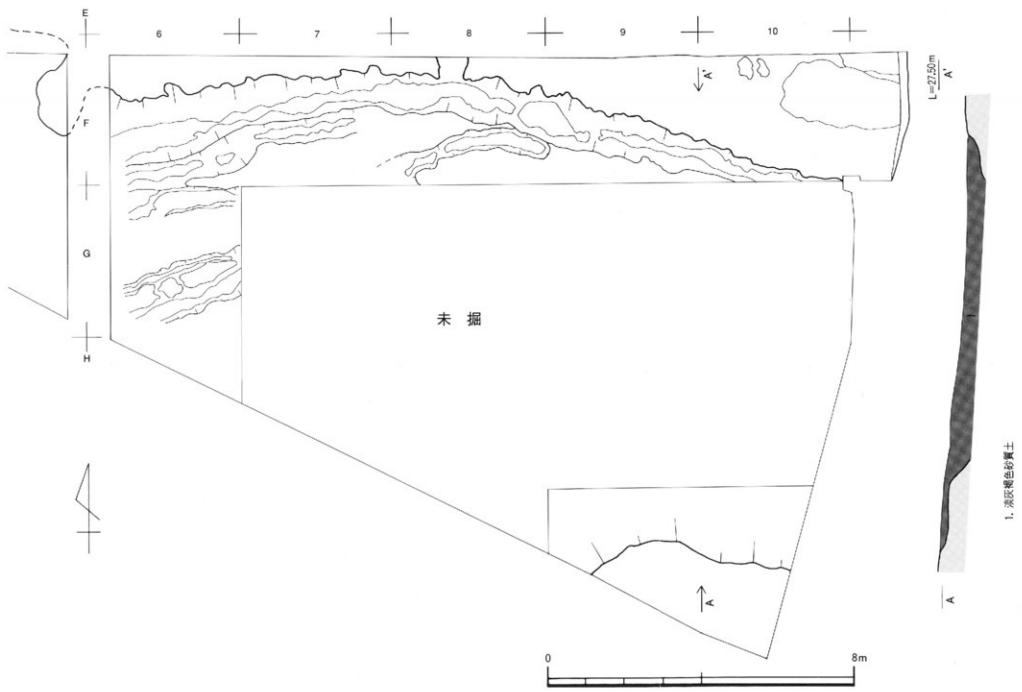
受部が「U」字状に傾斜する。これらは、梅木が提示した弥生後期土器編年の後葉段階に対応する。ただし、小型の鉢形土器や壺形土器にボタン状に突出する底部が数多くみられないことや高坏の脚部の円孔が2段透かしでない点は、後期中葉の土器様相を一部に留めているものと理解できる。時間的には、S D10出土土器とはほぼ同時期と考えられ、弥生時代後期中葉～後葉に位置付けられる。

## S R 1 (第7・40図)

調査区南半を東西にはしる幅広な河川（自然流路）である。河川東端は調査区外へ続く。西端は北方向から流れるS D11と合流し、南西方に向かう方向が振れるものと想定される。調査工程上、一部の調査に留めざるを得なかった。河川幅10m、溝底は緩やかに西へむかって傾斜する。底には凹凸のある幅狭な小溝が多数検出された。東西大ベルトの南壁面でいくつかの落ち込みを確認したが、湧水が著しくその性格を明らかにすることはできなかった。河川の埋土は、5～10cm大の河原石と角礫を多量に含む淡灰褐色砂質土を基本とする。粒の粗い砂と細かい砂が互層となって堆積しており、恒常的に流水のあったことを示している。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器・鐵器等がある。ローリングを受けているため土器の器面は磨滅が著しく、調整や施文が識別できないものが多い。このことは埋土の所見と合致する。本遺構は弥生～古代にわたって機能し、完全に埋没したのは



第39図 S X 5出土遺物実測図 (17) (縮尺 1/3)



中世である。

#### 出土遺物（第41～43図 図版17）

弥生土器（281～294） 壺・壺・高坏・器台がある。281～283は壺形土器である。281は肩部の張りが強く、胴部最大径値が口径値を凌ぐ。口縁端部は横ナデ調整により面をもつ。284～291は壺形土器である。284は「コ」の字接合部をもつ複合口縁壺の大型品である。285～287は「く」の字接合部をもつ。288は口縁部の屈曲が強く短い口頭部をもつ。口縁端部は強い横ナデが施され、上下に拡張される。289・290は頭部に刻目突起が巡る。291は頭部を沈線によって区画された長頸壺の頭部片である。292は高坏形土器、293・294は器台形土器である。294は受部の端部が上方に拡張され、単位不明ながら円形の浮文が付加された加飾器台である。浮文は4条の沈線文の後に付加される。

須恵器（295～320） 壺、壺蓋、壺身、壺、高坏、甌がある。295・296は壺である。295は外反する口縁部をもち、壺部は丸くおさめられる。沈線文の上下に波状文が施される。297～305は壺である。297・298は天井部中央に宝珠状のつまみが付く。298は器高が高く、口縁部内面にかえりをもつ。かえりは口縁端部とほぼ同じ高さである。300は口径13cmを測る壺身である。304・305は高台がつく壺身である。306は短頸壺の蓋であろう。307～312は短く直立する頭部に外反する口縁をもつ壺、313は短頸甌である。なお、312は肩部にヘラ記号をもつ。314・315は長頸甌、317・318は無蓋高坏、319是有蓋高坏である。317は長脚2段の透かし孔をもち、壺部には刺突文が施される。320はほぼ完形の甌である。河川中央南寄りのG7区から横倒しの状態で出土した。本遺構出土の須恵器の多くが破片資料であるなか、これは一部を欠くもののほぼ完形品であり注目される。胴部は球形を呈し、頭部は強く縮まっており、長く緩やかに外反する口頭部をもつ。

321～323は鉄滓とふいごの羽口である。321・322の羽口には気泡を残す鉄滓が付着する。混入品の可能性が高いと考える。

時期：出土土器から弥生後期～古代に機能したと想定される。鉄滓とふいごの羽口の存在は当地周辺で鉄器の生産が実施されていたことを示唆する。出土土器が多時期にわたるため特定することは困難ではあるが、出土量から判断して古墳後期～古代に帰属する資料と考えておきたい。

## 2. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、SD9、SX9、SX12、SX13、SR1である。SD9とSX9は第4遺構面で検出できた。SX12とSX13は、中世段階の水路であるSD3とSD8に切られてはいるが、第2遺構面検出と考えておきたい。

#### SD9（第7・44図）

調査区北東端に位置し、東西方向の溝である。溝の東端は調査区外へ続き、西端は遺構の遺存が良好ではない。溝幅は、0.2～1.2mを測り、東半には著しい凹凸が認められた。深さは5～10cmと浅く、遺存は悪い。底には凹凸が顕著に認められる。

遺構の輪郭はVI層上面で確認した。しかし、溝の遺存より、本来はV層上面から掘り込まれた可能性が高い。埋土は粘質の黒褐色土である。埋土から判断する限り、恒常に流水があったとは考え難く、ここでは区画を意図した小溝と理解しておきたい。出土遺物は弥生土器ないし土師器の細片が数点あるが、図化できない。

時期：遺物が少なく、細片であることから特徴することは困難である。ここでは、検出面と遺構の遺存から古墳時代後期としておく。

#### S X 9 (第7・50図)

調査区北東部の中央、屈曲しながら北から南へ続き、南端はS R 1に合流する。遺構の北端と西端は未調査のため不明である。溝幅は、0.6~1.5mと均一ではない。遺構の輪郭はVI層上面で検出したが、SD 9同様、V層上面から掘り込まれた可能性が高い。埋土は、粘質の黒褐色土であり、流水が恒常的でなかったと理解できる。出土遺物はわずかに土師器・須恵器片がある。屈曲した遺構のプランと出土遺物から、本遺構の性格を特徴することは困難である。

時期：SD 9同様、古墳時代後期としておく。

#### S X 12 (第7・44図)

調査区東端の中央部、F 11区に位置する。遺構の北半部は東西大ベルトにかかり、未調査である。後述するS X 13に切られる。VI層上面で検出したが、東西大ベルト壁面と調査区東壁面で土層堆積状況を検討したところ、V層上面から掘り込まれていた可能性が認められた。検出面における平面形は不整長方形を呈し、規模は長軸長1.8m、短軸長0.6mを測る。埋土は暗青灰色~黒褐色シルト質土であり、7~15cm大の河原石を僅かに含む。遺物は須恵器片が出土したが、図化できない。

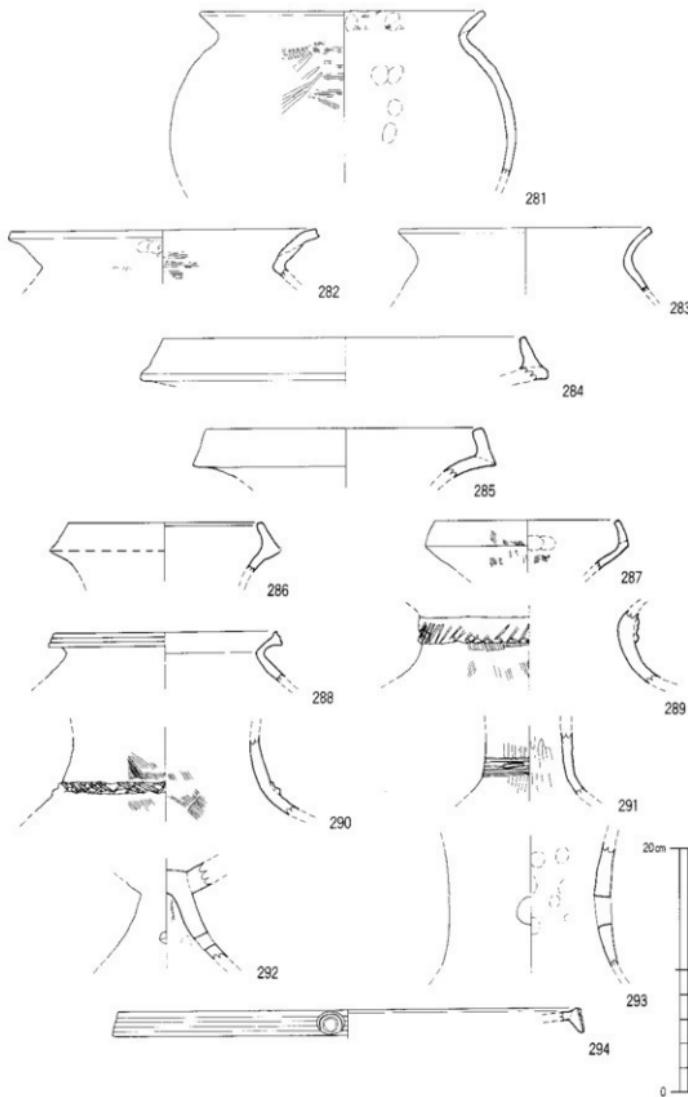
#### S X 13 (第7・44図)

調査区東端の中央部、F 10・F 11区に位置する。S X 12を切り、調査区外に続く。S X 12同様、V層上面から掘り込まれていた可能性が高い。検出面における平面形は不整隅丸長方形で、長軸長3.2m、短軸長1.6mを測る。埋土は、3~5cm大の川原石を多量に含む暗青灰色シルト質土である。遺物は土師器甕・須恵器大型直口壺、环身・高坏が出士した。直口壺は底部を欠き、遺構の底から破碎状態で出土しており、本遺構の性格を考える上で興味深い遺物の出土状況を示している。

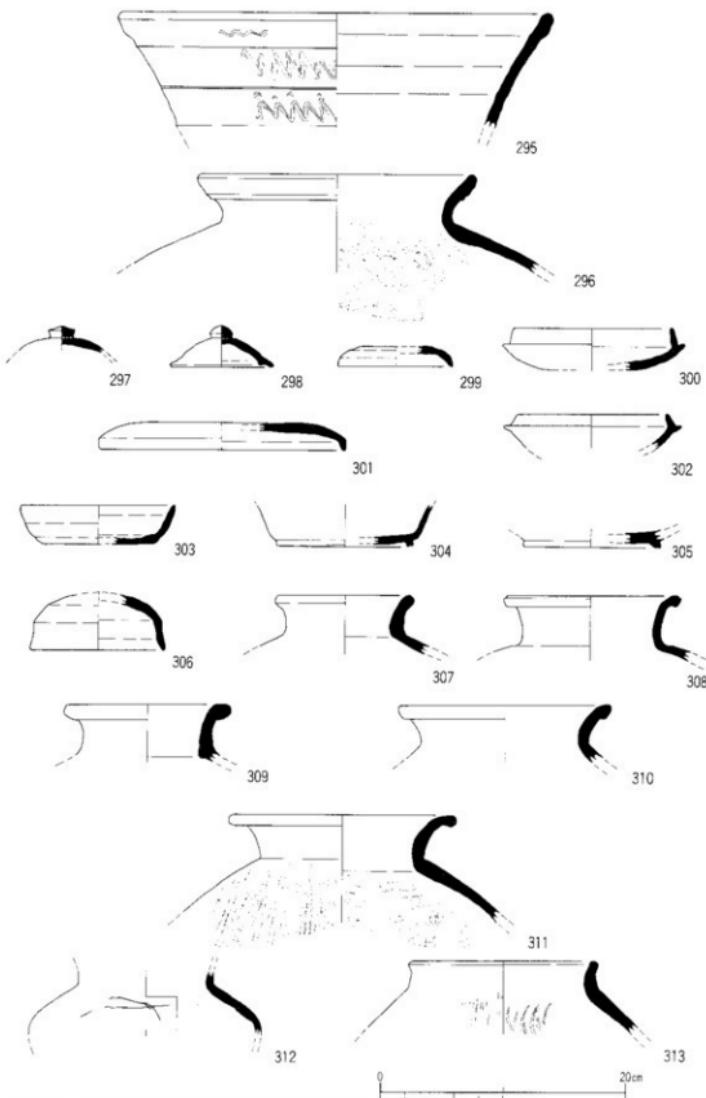
##### 出土遺物 (第45図 図版17)

324は土師器の甕の口縁部片である。325~327は須恵器である。325は底部を欠くが、遺存の良い大型品である。口縁部は短く内頬気味に直立し、端部は丸くおさめる。胴部上半部に最大径をもち、やや丸みをもちながら底部へと続く。調整は口縁部内外面が丁寧なナデ、胴部外面はカキ目の後タタキである。胴部下半にはカキ目は少なく、タタキが顕著に認められる。内面には同心円状のあて具痕跡が顕著に残る。326は环身、327は短脚の高坏。

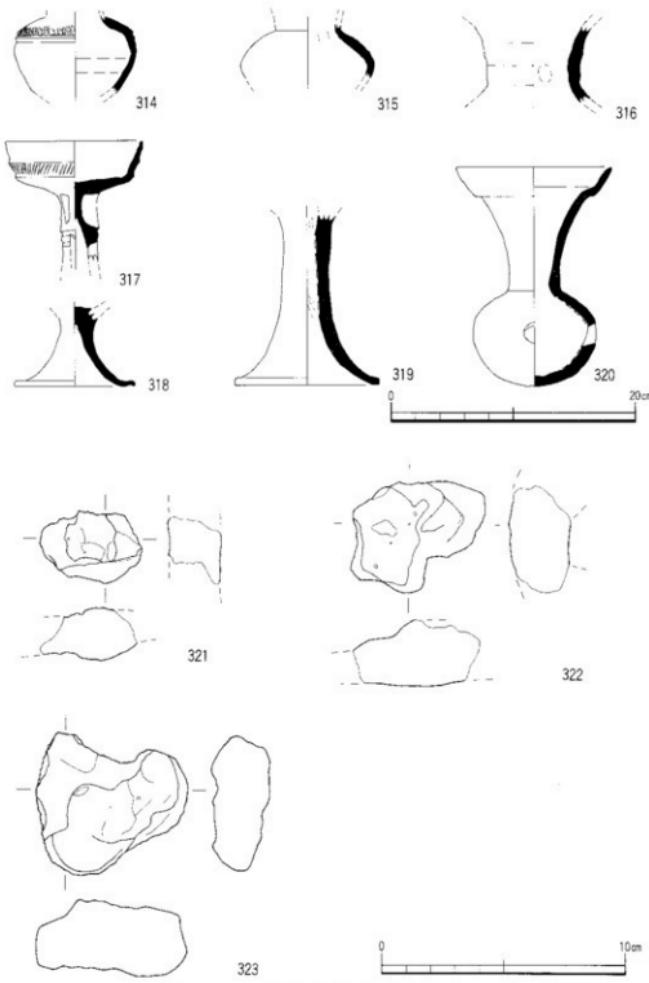
時期：遺物の形態から7世紀前半段階と考える。なお、埋土がS X 12と酷似することから、S X 12もこの段階に位置付けておく。



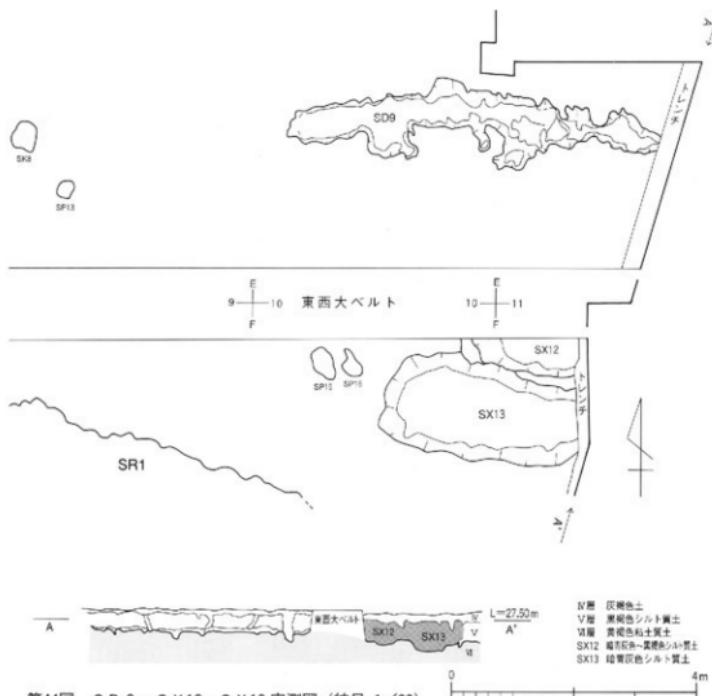
第41図 SR 1 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4)



第42図 SR 1 出土遺物実測図(2)(縮尺 1/4)



第43図 SR 1 出土遺物実測図 (3) (縮尺 1/4・1/2)



第44図 SD9・SX12・SX13実測図（縮尺1/80）

### 3. 古代～中世の遺構と遺物

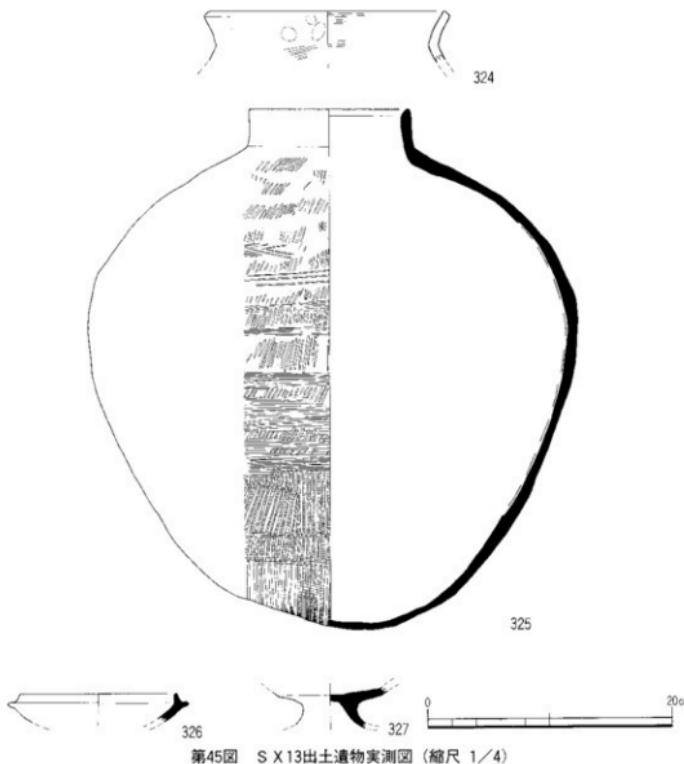
該期の遺構はSD11、1号掘立、SK1～6、SD3～8である。1号掘立は第4遺構面、他は第2遺構面で検出された。

#### SD11（第7・46図 図版8）

調査区西部に位置し、南北方向にはしる溝である。調査区中央部のF5・F6・G5・G6区でS R1と合流する。溝幅は、1.4～5.6mと一定しておらず、深さは20～50cmを測る。埋土は淡灰褐色の砂礫土である。埋土には1cm～拳・人頭大の河原石が多くあり、特に上層に集中していた。出土遺物は、土師器・須恵器・瓦器・鉄器である。土器の多くは細片である。注目すべき遺物に、硬玉製の丁字頭勾玉がある。これはE4区の東西大ベルト近くの遺構床面直上で確認した。また、D4区埋土中から出土した権状石製品も注目すべき遺物である。いずれも近接して土器は出土していない。

#### 出土遺物（第47～49図 図版18）

土師器（336・338・339・341） 336は円盤高台がつく壺である。底外面には回転ヘラ切り痕がみられる。338・341は皿である。338は口径値12.8cm、底径値9.4cm、器高1.6cmを測る。磨滅のため底外



第45図 S X 13出土遺物実測図（縮尺 1/4）

面の観察は困難である。口縁部周辺に横ナデ調整を施したため、口縁部がゆるやかに外反する。341は口径値8cmの小型品である。外底面には回転糸切り痕がみられる。339は壺である。口径値12.7cm、底径値6cm、器高4cmである。胴下半がわずかに内湾し、口縁部が外反する。比較的厚手のつくりで、底外面には回転ヘラ切り痕がみられる。

須恵器（328～335・337・342） 壺、壺、壺身、鉢がある。これらは主として古代に時期比定されるものである。343は中世須恵器である。343は亀山焼きの大壺。「く」の字形に強く折り曲げた口縁部をもち、端部は横ナデにより凹む。胴上半部外面には格子目叩き、内面には丁寧なナデ調整が施される。

瓦器（340） 脇部上半が屈曲して外面には弱い稜がみられる。内面には丁寧な横方向のミガキがみられる。

勾玉（344） 頭部に放射状の線刻が施された「丁字頭勾玉」である。入念に研磨され器面の仕上

がりは良好である。

椎状石製品（345） 軟質の乳白色の石を素材とする。頭部に紐通し用の鉢をもつ。身部は扁平な方柱状を呈し、器面には整形と研磨の痕跡が残る。両面に線刻がみられる。a面は縱方向に3本、b面は横方向に1本の線刻である。b面下半には整形痕が残る。紐は両面穿孔による。重量57.0g。

鉄器・鉄器関連遺物（346～358） 346・347は横断面が長方形を呈する鉄器である。347はタガネ状の鉄器か。348・349はふいごの羽口と考えられる。いずれも気泡のみられる鉄滓が付着する。350～358は鉄滓である。大きさは一定しておらず、器面には繊かい気泡が多くみられる。

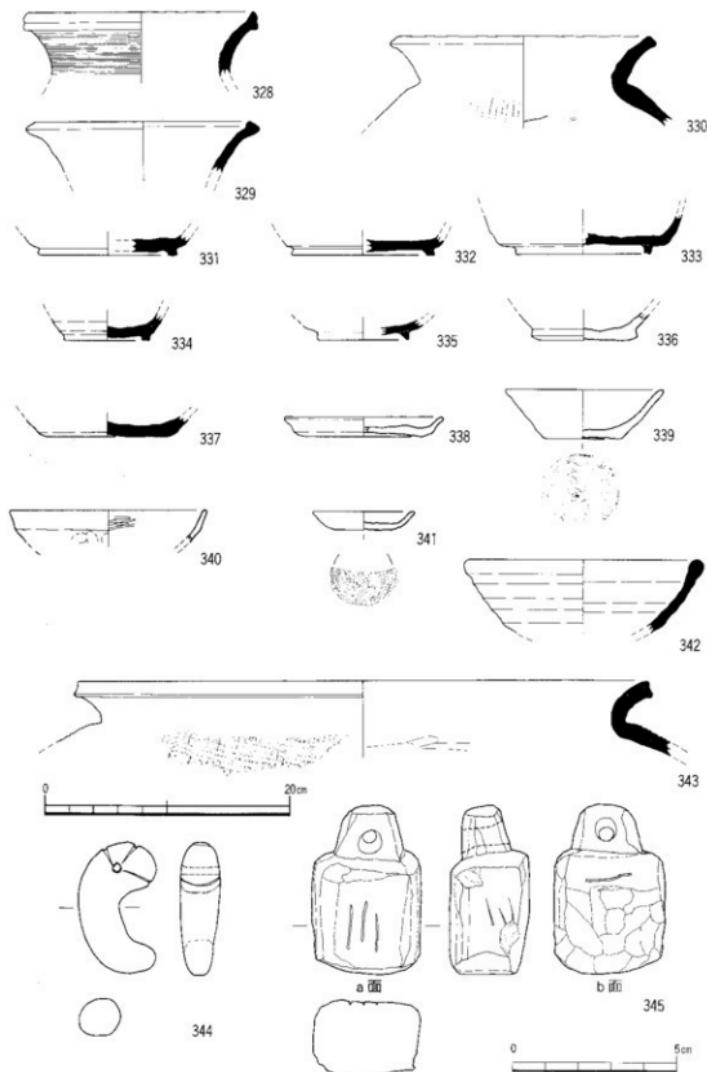
時期：出土土器から古代～中世を考えておく。完存で出土した勾玉と椎状石製品は、造構埋没初期の混入品の可能性がある。鉄器と鉄器製作関連遺物の存在は、当地を含めた周辺で鉄器製作が実施されていたことを示している。

### 1号掘立（第7・50図）

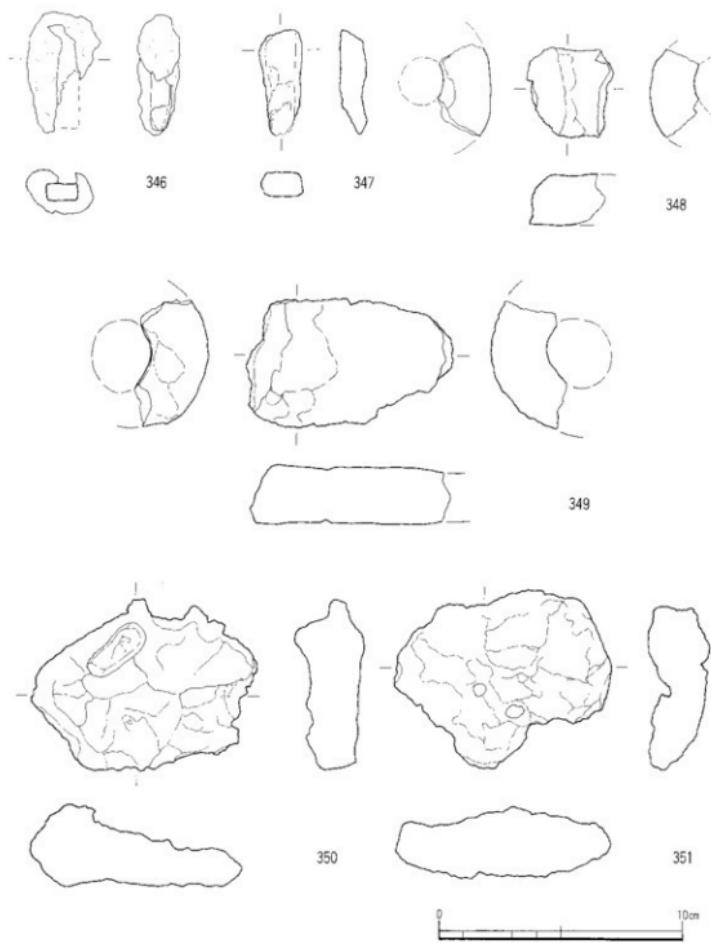
調査区北半部の中央、D区とE区に位置する。S P 8・9・11・13を柱穴として構成される梁間・桁行ともに1間の建物である。梁間の長さはS P 8とS P 11間、S P 9とS P 13間が2.4m、桁行の長さはS P 8とS P 9間、S P 11とS P 13間が3.1mを測る。柱穴はすべてVI層上面で検出した。しかし、いずれの柱穴も現存で深さ10cm前後と浅いことから、本来はV層上面から掘り込まれた可能性が高い。



第46図 SD 11 実測図（縮尺 1/80）



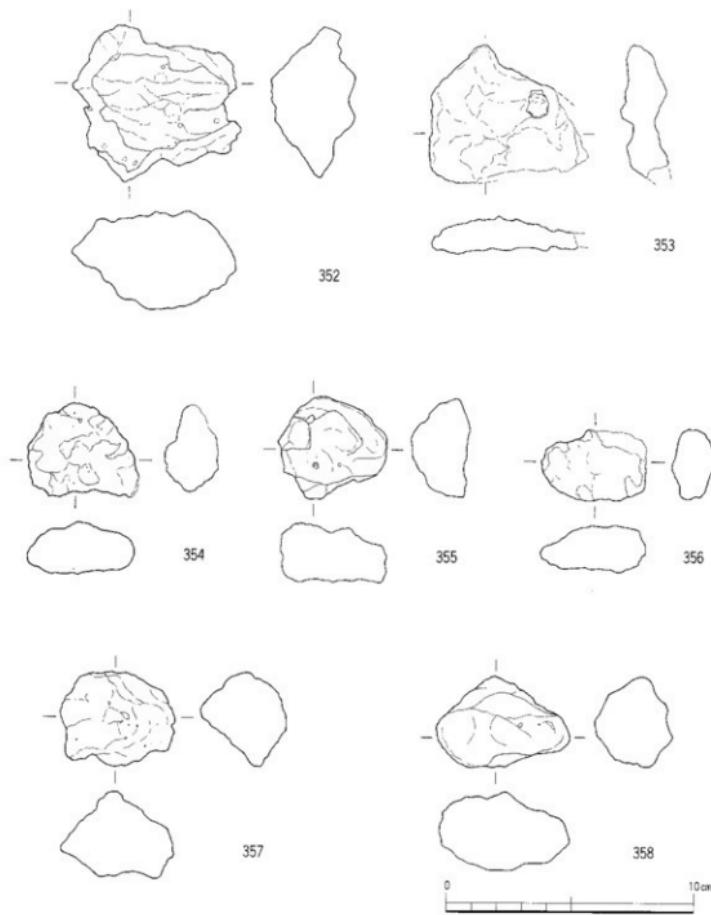
第47図 S D11 出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4・2/3)



第48図 S D11 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/2)

柱痕跡は確認できなかった。埋土は炭化物の小片が混じる褐色土である。出土遺物はない。

時期：S X 9を切ることから古墳時代後期以降を上限として設定できる。ここでは建物の規模と柱穴埋土から中世に比定しておきたい。



第49図 SD 11 出土遺物実測図(3)(縮尺 1/2)

**S K 1** (第51・53図)

調査区北東部の中央、D 7 区に位置し、主軸は東西方向である。平面形は隅丸の長方形で、検出面での長軸長0.7m、短軸長0.6mを測る。埋土は、1cm大の円礫を含む灰褐色土を基本とする。検出面での深さは10cmと浅く、遺構の遺存は悪い。遺物は土師器の壊があるが細片が多い。

出土遺物 (第53図) 359は皿であろう。底外面には回転糸切り離し痕がみられる。

**S K 2** (第51図)

調査区北東部の中央、S K 1 の東に位置する。主軸は南北方向であり、S K 1 と直交する位置にある。平面形は隅丸長方形で、検出面では長軸長1.0m、短軸長0.6mを測る。埋土は、1cm大の円礫をわずかに含む灰褐色土を基本とする。床はほぼ水平である。検出面での深さは20cm前後を測る。遺物は、床面上と床から10cm程度離れて土師器片・中・大型の角礫が出土している。大型の角礫は、土坑西側で掘りかたの傾斜に沿う状態で出土した。遺物は土師器の碎片で、図化できない。

**S K 3** (第51図 図版9)

調査区北東部の中央、S K 2 の東側に位置する。主軸は東西方向であり、S K 2 と直交する位置にある。平面形は隅丸長方形を呈し、検出面では長軸長0.5m、短軸長0.4mを測る。埋土は、円礫をわずかに含む灰褐色土を基本とする。横断面形は浅い皿状を呈する。検出面での深さは6cmを測る。遺物は土師器の壊がある。

**出土遺物** (第53図) 360は壊である。比較的厚手のつくりである。口縁部周辺に横ナブ調整を施すために口縁部が外反する。

**S K 4** (第51図 図版9)

調査区北東部の中央、S K 3 の南側に位置する。主軸は北東～南西方向である。平面形は不整形を呈している。埋土は灰褐色土であり、検出面での深さは8cmである。遺物は土師器の壊がある。

**出土遺物** (第53図) 361は壊である。やや厚手のつくり。外底面には回転糸切り離し痕がみられる。

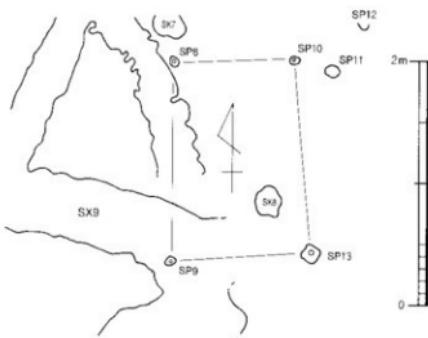
**S K 5** (第52図 図版9)

調査区北東部、D 9 区に位置する。平面形は不整円形状を呈し、整ってはいない。埋土は灰褐色土であり、検出面での深さは10cmである。遺物は出土していない。

**S K 6** (第52図 図版9)

調査区北東部、E 9 区に位置する。主軸はほぼ東西方向である。平面形は隅丸長方形を呈し、埋土は灰褐色土である。検出面での深さは10cmである。遺物の出土はない。

**時期**：S K 1～6 は出土遺物と検出面、そして土坑に切り合いかないことから中世とし、同時期に存在していたと理解しておきたい。



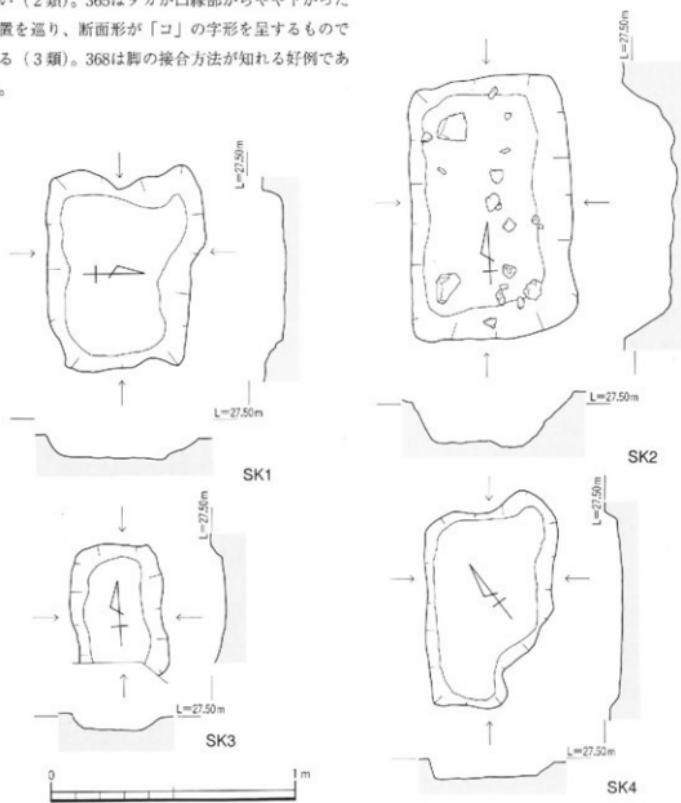
第50図 1号掘立実測図 (縮尺 1/40)

## SD 3 (第54図 図版10)

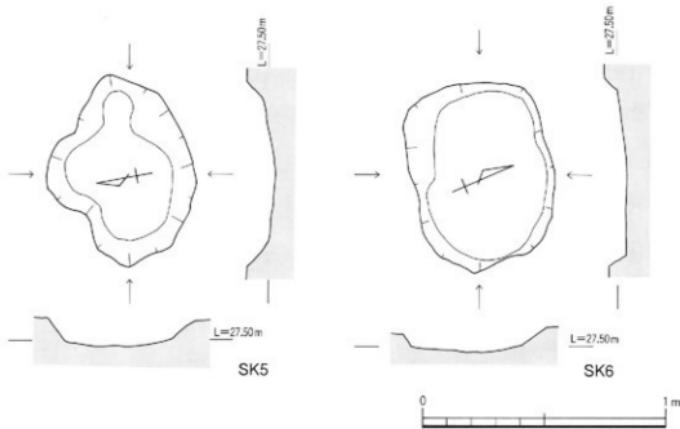
調査区東端部。SD 8の西に位置し、南北方向にはしる溝である。溝の北端は調査区外へ続き、南端はSD 6と合流する。溝幅は0.4~1.4m、深さは現存で30cmを測る。埋土は暗青灰色粘質土である。拳大の河原石が局部的に存在する。底の北端と南端の比高差は10cmで、ゆるやかに傾斜する。遺物は土師器の三足付き羽釜、瓦質土器の三足付き羽釜がある。

## 出土遺物 (第55図)

瓦質土器 (362~368) 362~367は瓦質土器の三足付き羽釜の口縁部である。タガの巡る部位と断面形から3種に分けられる。362~364・366はタガが口縁部から下がった位置に巡り、断面形は「コ」の字形を呈するものである(1類)。367はタガが口縁部から下がった位置に巡り、断面形が三角形に近い(2類)。365はタガが口縁部からやや下がった位置を巡り、断面形が「コ」の字形を呈するものである(3類)。368は脚の接合方法が知れる好例である。



第51図 SK実測図(1) (縮尺1/20)



第52図 SK実測図(2) (縮尺1/20)

土師器(369~373) 369~373は土師器の三足付き羽釜の脚である。369~370は脚の接合方法が知れる資料である。胴部に粘土板を貼り付け脚柱部分を絞って成形し、指揮さえにより細かな整形を施す。371~373は脚片である。

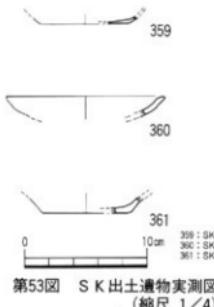
時期：後述するSD8と合流することと瓦質土器にみられるタガの位置から、14世紀前半に比定しておきたい。

#### SD4~SD7 (第5図 図版8)

調査区東半部に位置し、東西方向にはしる溝である。全てが同時に併存していたとは考え難い。なお、これらの溝の西端は、SR1と切り合い関係にあったが、調査では判然としなかった。

#### SD8 (第54図 図版10)

調査区東端部、SD3の東に位置する。SD3同様、北端は調査区外へ続き、南端はSD6と切り合い関係にある。新旧関係は確認できなかった。溝幅は1.0~1.2m、深さは現存で20cmを測る。埋土はSD3と同じである。SD3との合流地点で列をなす拳大~人頭大の河原石を検出した。一部は石を積み上げていた。溝底の北端と南端の比高差は15cmを測る。SD3~8のうち、南北方向のSD3とSD8は同時期に機能したと考えられる。合流地点で検出された河原石群を、小規模な堰とするならば、本遺構は小規模な水路となる。遺物は土師器の坏、瓦質土器の三足付き羽釜、東播系須恵器こね鉢、鉄器がある。

第53図 SK出土遺物実測図  
(縮尺1/4)

## 出土遺物（第56図 図版19）

土師器（374） 壊の底部である。底径値5.8cm、外底面には回転系切り離し痕の上に板目状圧痕（簧の子状圧痕）が残る。口縁部～胴部上半が膨らみ気味で、碗に近い形態である。

瓦質土器（375・376） 三足付き羽釜。375はタガが口縁端部から下がった位置に巡らされ、タガの断面形は「コ」字形に仕上げられる。脚周辺に煤が厚く付着する。

東播系須恵器（377・378） こね鉢である。377は口縁端部が上下に拡張される。胴部内面は磨滅している。378は口縁端部が上へ拡張される。

鉄器（379） 表面が鏽で覆われている完成品である。

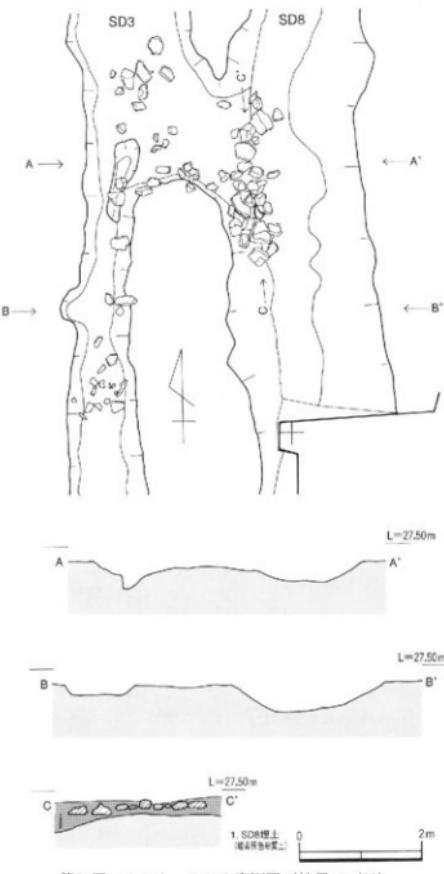
時期：土師器壊底部の糸切り技法、瓦質土器の羽釜にみられるタガの位置と断面形態、東播系須恵器こね鉢の形態等から14世紀前半に位置付けておく。

#### 4. 近世以降の 遺構と遺物

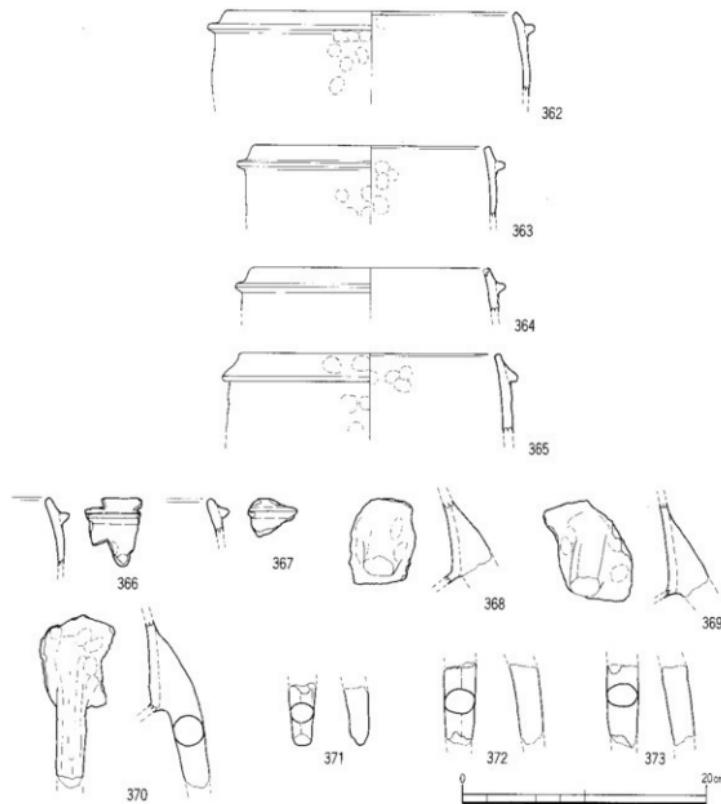
近世以降の遺構は、IV層上面で検出した（第5図）。SX1は、調査区北端中央部から南西で検出した。方形の土坑の南西部には幅狭の小溝が取り付く。調査時に方形の土坑を50cm程度掘り下げたところ、湧水が著しく認められたため、危険と判断して掘り下げを中止した。埋土は、黄色・乳青色・淡褐色の粘土を基調としている。埋土の堆積状況から、二次的に埋め戻された可能性が高い。遺物は陶磁器の湯飲みが一部口縁を欠いて出土した。湧水があり、小溝が取り付くことから、溜め池のような性格を与えることができようか。

他の遺構にSD1、SD2などがある。これらの遺構は遺存が良好とはいえない。加えて、遺物の出土がみられないことから、その性格を特定することは困難である。

時期：検出面と遺物から近世以降に比定される。



第54図 SD3・SD8実測図（縮尺 1/80）

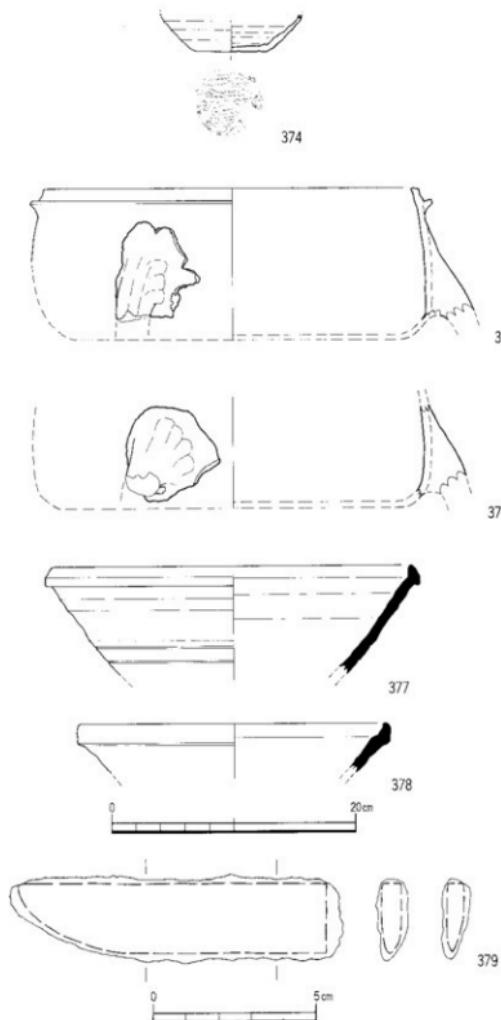


第55図 S D 3出土遺物実測図（縮尺 1/4）

## 5. 包含層出土の遺物

### 1) V層出土の遺物 (第57~64図 図版19)

本層からは多量の遺物が出土した。調査では、本層を①~③に細分して遺物を収納した。遺物整理の段階で、土師器と須恵器の有無を基準にして、①を「上層」、②と③を「下層」とした。上層では弥生土器とともに少量の土師器と多量の須恵器が認められた。一方、下層からは多くの弥生土器が石器とともに出土した。人工層位を用いた分層発掘により、V下層が弥生後期を主体とする遺物包含層であると考えられる。



第56図 SD 8 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・2/3)

## V下層出土遺物（第57・58図）

本層からは弥生土器と石器が出土している。

弥生土器（380～396） 380・381は壺形土器。382～390は壺形土器。391～394は高壺形土器である。なお、391は土師器の可能性がある。394は短脚で擴が広がる形態をもつ。脚部には2段にわたって円孔が施される。395・396は器台形土器である。397は石庵丁である。緑色片岩製。円礪から剥離した剥片を素材としており、背部には打裂調整痕が認められる。刃部の研磨は両面にわたって入念におこなわれている。長方形態の磨製石庵丁の完成品であり、両端には研磨によって仕上げられた紐掛けのための抉りが作出される。398は石庵丁の打裂段階の未成品である。

## V上層出土遺物（第59～64図）

本層からは弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器が出土している。弥生土器が量的に多い。

弥生土器（399～436） 399～404は壺形土器である。「く」の字状口縁部をもつ。404は貼付により口縁外面が肥厚する。405～418は壺形土器である。いずれも複合口縁部をもつ。多くが無文であるが、408は直立気味に立ち上がる二次口縁部の外面に6条の波状文が施される。419～421は鉢形土器。422～432は高壺形土器、433・434は器台形土器、435・436は支脚形土器である。なお、424は土師器の二重口縁壺の可能性がある。

土師器（437～443） 437～441は高壺である。壺部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。壺部下半に段があり、脚部は太い。裾部は外側に屈曲し、床との接地部分は狭い。壺部と脚部の接合はねじ込む形を採用しており、脚内面は丁寧なナデによって飛び出た粘土の盛り上がりを消す調整をおこなっている。442・443は瓶の把手である。

須恵器（444～481） 壱蓋、壹身、壺、甌、高壺がある。

石器（482～484） 482はサヌカイト製の打製石鎚である。484は大陸系磨製石器の石器素材と考えられる。両面には自然面が大きく残置する。石庵丁の素材か。

鉄器（485～487） 485は鋤先状を呈する。486は横断面が方形を呈する棒状の製品である。487は全体が鏽に覆われている器種不明の鉄器である。

## 2) IV層出土の遺物（第65～75図 図版19・20）

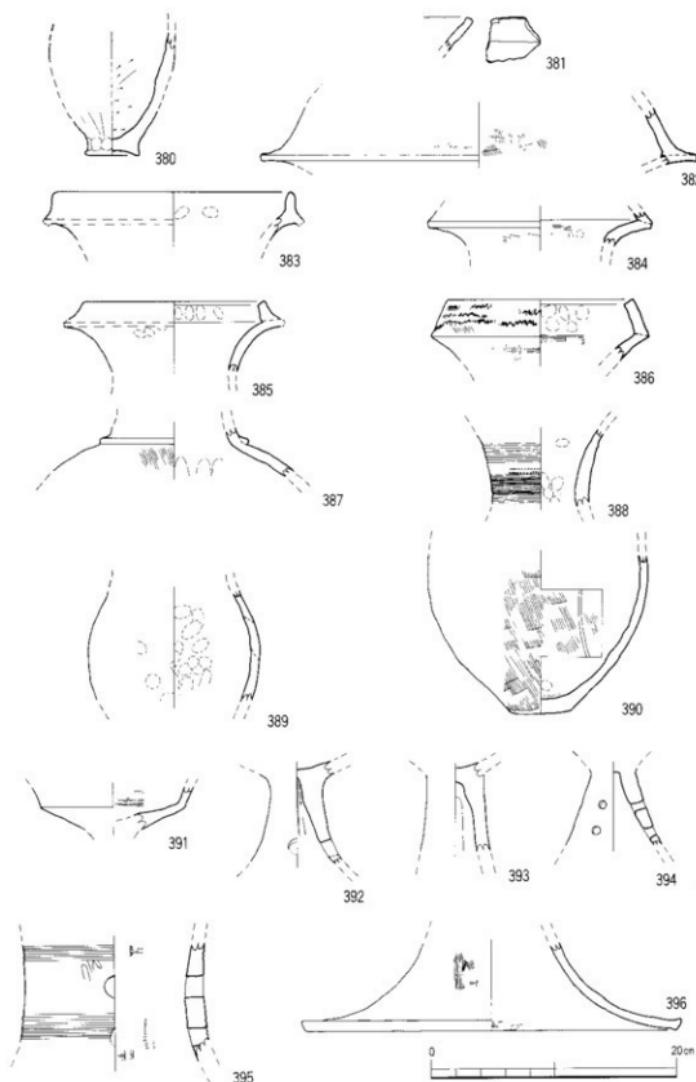
本層からは多種多量の遺物が出土した。調査では人工層位を用いて分層発掘を実施し、上層と下層に区分して遺物を取り上げた。調査当初、調査区の西半では埋土の識別が困難であったため、S D11に伴う遺物も本層として取り上げた可能性がある。

## IV下層出土遺物（第65～69図）

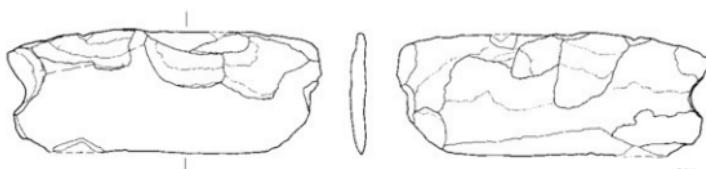
弥生土器、土師器、須恵器、瓦、綠釉陶器、瓦器、石器、鉄器等がある。

弥生土器（488～494） 488は壺形土器。小さい平底。内底面が凹む。489～492は壺形土器。489は頸部片で、斜格子目文の刻みをもつ突帯がみられる。490～492は平底の底部片。493は鉢形土器の底部で、くびれの上げ底をもつ。小型の壺形土器の可能性がある。494は高壺形土器。柱部が円柱状で太く中実の脚部である。

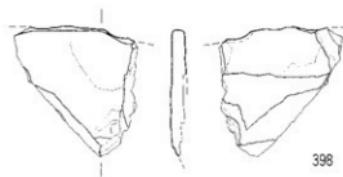
土師器（495～497・525～533） 495～497は古墳時代から古代の土師器である。525～533は中世の土師器であるので、これは後述する。



第57図 V下層出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/4)



397



398

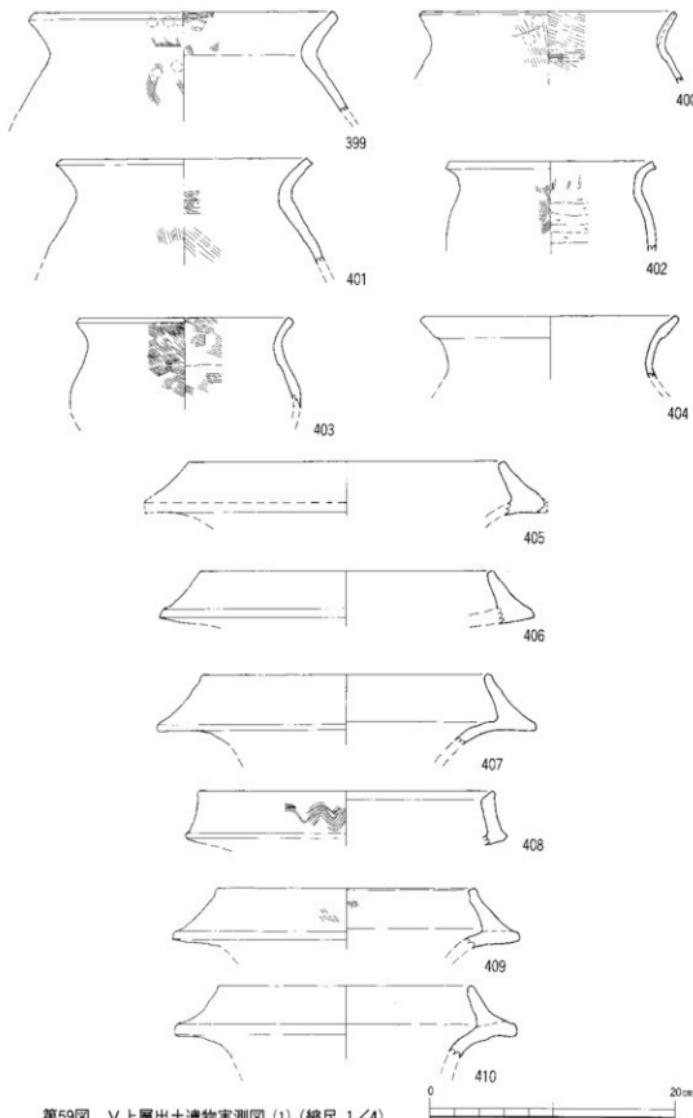


第58図 V下層出土遺物実測図(2)(縮尺2/3)

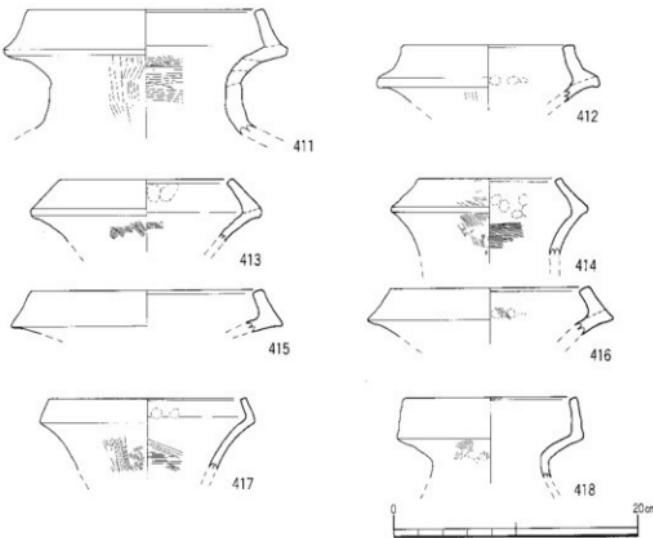
496は壺形土器の口縁部。内外に稜をもち、「く」の字状に屈曲する。口縁部は直線的に外方にのび、口縁端部は尖る。497は高坏の脚部。

須恵器(498~522・537~541) 498~522は古墳時代から古代の須恵器である。537~541は中世の須恵器であるので、これらは後述する。498~500は坏蓋。498は天井部のつまみを欠く。笠形の天井部からなだらかに下がり、口縁部で屈曲する。かえりは短く口縁部より下がらない。7世紀後半。499は天井部が丸みを帯びる。口縁部は反り気味。7世紀代。500は天井部からなだらかに下がり、口縁端部は下内方に屈曲する。8世紀前半。501~504は坏身。501の立ち上がりはやや内済し、底部は扁平。口縁端部は尖る。6世紀後半。502は口縁が直立し、受部は水平。底部は扁平である。外底面にヘラ切り痕が残る。503は口縁が内傾し、受部は内済する。504は口縁が内傾し、受部は水平である。7世紀前半。505~511は有台坏である。いずれも貼付高台である。505は坏部がゆるやかで、底体部の境界は丸みを帯びる。高台は「ハ」の字にひらき、内側につく。8世紀初頭か。506はやや「ハ」の字にひらき、内により高台がつく。507は「ハ」の字にひらき、底体部より内に高台がつく。坏の口縁はゆるやかに立ち上がる。509は高台が直立し、内側につく。底体部の境界は稜をもち、坏部の口縁は直立気味である。510は底体部の境界につく。いずれも8世紀。511は高台が底体部の境界につき、「ハ」の字にひらく。8世紀後半。512~514は無蓋の高坏。いずれも長脚である。512は坏部が碗形を呈し、口縁端部は尖り気味。7~8世紀。513は坏部。口縁は直線的に立ち上がり、端部は尖り気味である。坏部外面の中位に1条の沈線文が巡る。7世紀前半頃。515・516は壺形土器。515は口縁部がゆるやかに外反し、口縁端部は面をもつ。口縁直下の外面には1条の凸線文が巡る。516は口

包含層出土の遺物



第59図 V上層出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4)



第60図 V上層出土遺物実測図(2)(縮尺1/4)

縁～胸部上半部。口縁部が強く外反する。端部は玉縁状に肥厚する。7世紀代。517～521は壺形土器。517は四耳壺、あるいは三耳壺の可能性がある胸部上半部。頭胴部間のくびれに強い稜をもち、その直下に耳を貼付する。7世紀代。518・519は口縁部が強く外反する。端部は外側に肥厚し、内側が突出する。520・521は有台壺の底部。520は高台が底体部の境界につき、「ハ」の字にひらく。8世紀代。521は器壁が厚い。522は台付瓶の底部。高台は底体部の境界につき「ハ」の字にひらく。平坦接地。8～9世紀代。

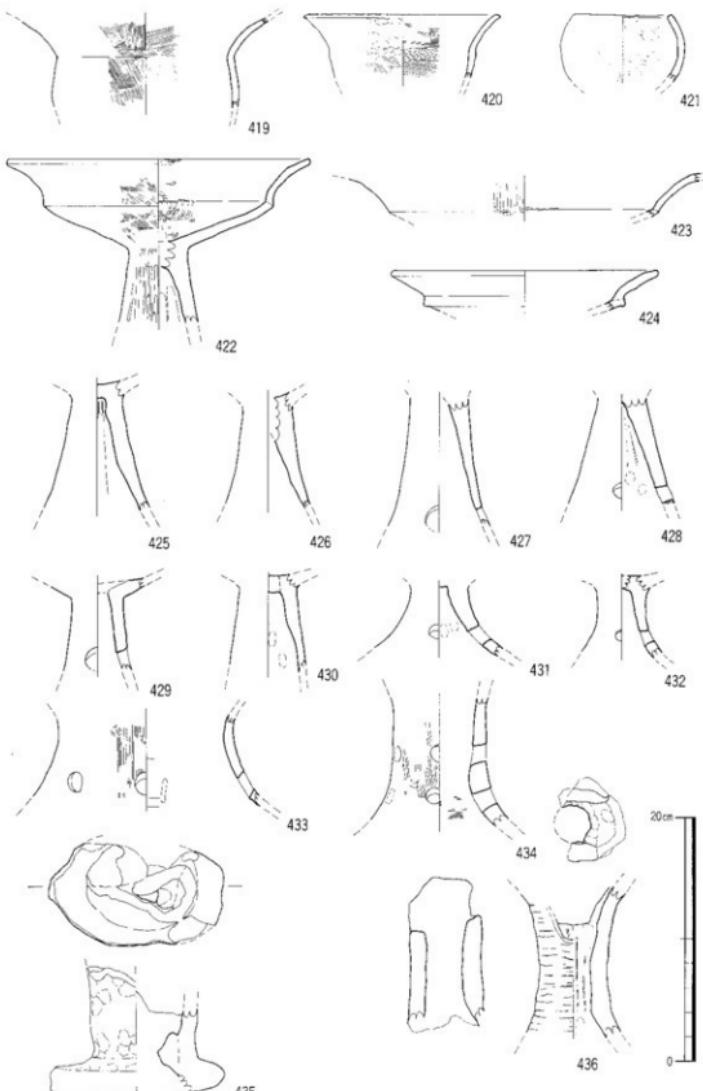
瓦(523) 平瓦。凸面にはナデ調整をおこない、凹面には布目痕が残る。凸面の側縁周辺は面取りされる。側縁部分は遺存する。

綠釉陶器(524) 碗の底部。削り出しによる円盤状高台がつく。釉薬は碗部の内外面、底部の全面に及ぶ。調整は全面にミガキが施されている。色調は薄いオリーブ色である。

中世の土師器(525～533) 525～527は有台、528～531は無台。525は削り出しの円盤状高台である。外底面は回転ヘラ切り。10世紀。526・527は貼付の輪高台。12世紀。532・533は十箇質の羽釜口縁部。532は口縁部が内湾して立ち上がる。端部には垂下した断面三角形のタガが巡る。533は口縁端部から下がった位置に断面三角形のタガが巡る。13世紀代。

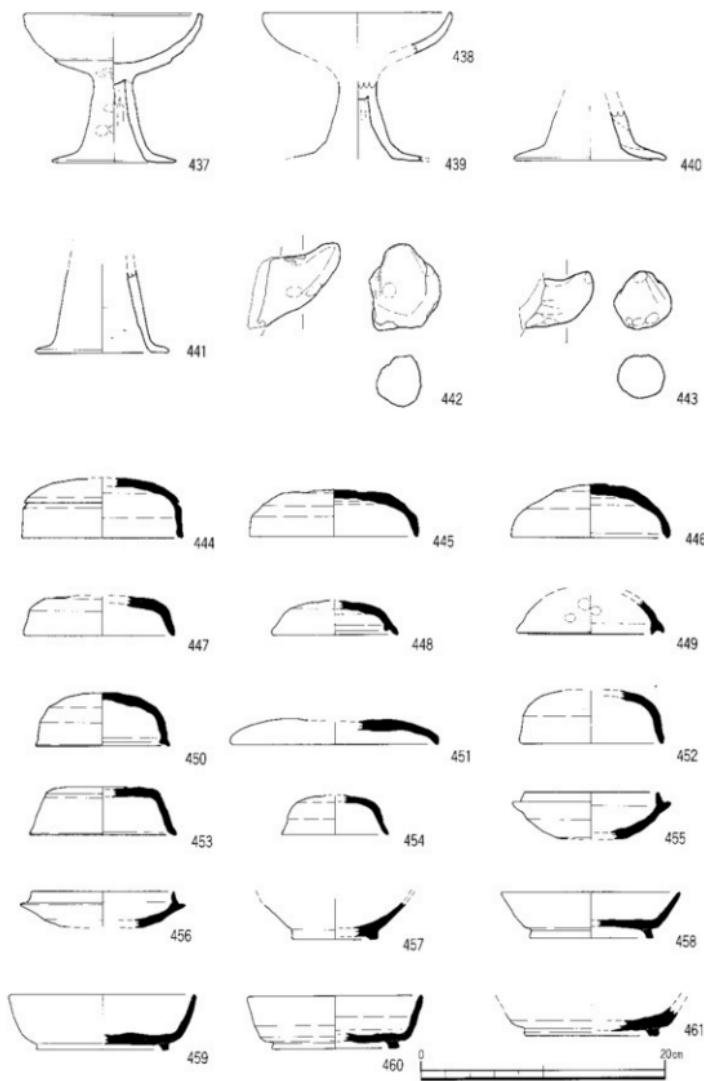
瓦器(534～536) 和泉型に属する。534は碗の口縁部が内湾し、端部は丸い。535・536は貼付輪高台の底部。高台の断面が台形を呈する。和泉型Ⅲ式。13世紀前半。

中世の須恵器(537・538) 537・538は東播系のこね鉢。538は頭部が直線的に立ち上がり、口縁端部が上下に拡張される。14世紀前半。

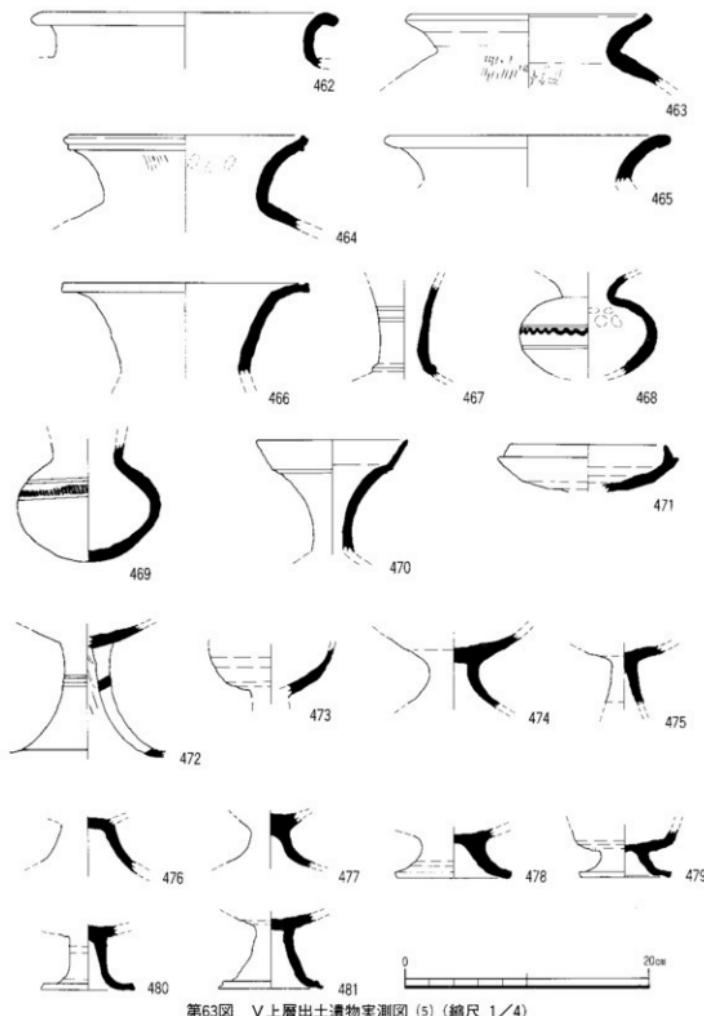


第61図 V上層出土遺物実測図(3) (縮尺 1/4)

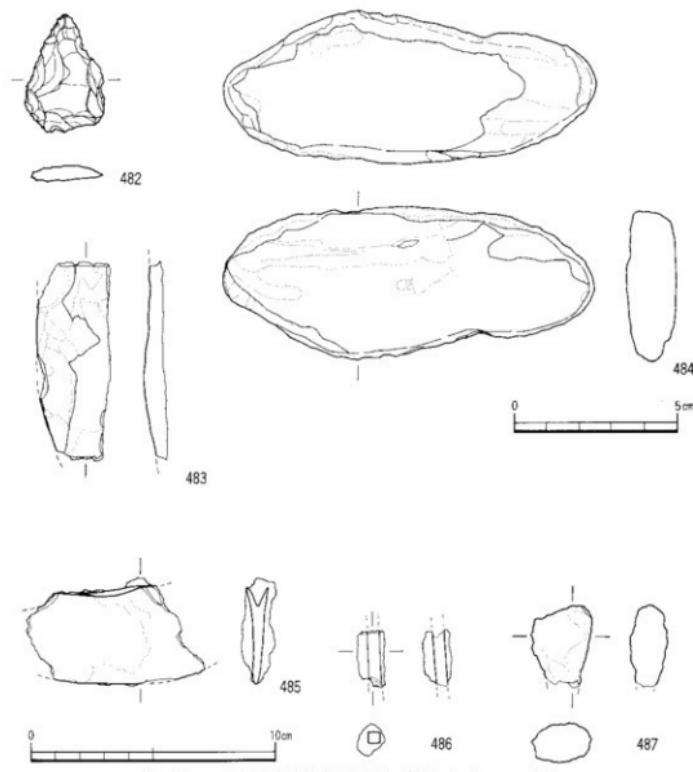
調査の記録



第62図 V上層出土遺物実測図(4)(縮尺1/4)



第63図 V上層出土遺物実測図(5) (縮尺 1/4)



第64図 V上層出土遺物実測図(6)(縮尺2/3・1/2)

539～541は器種と所屬時期が確定できないものである。

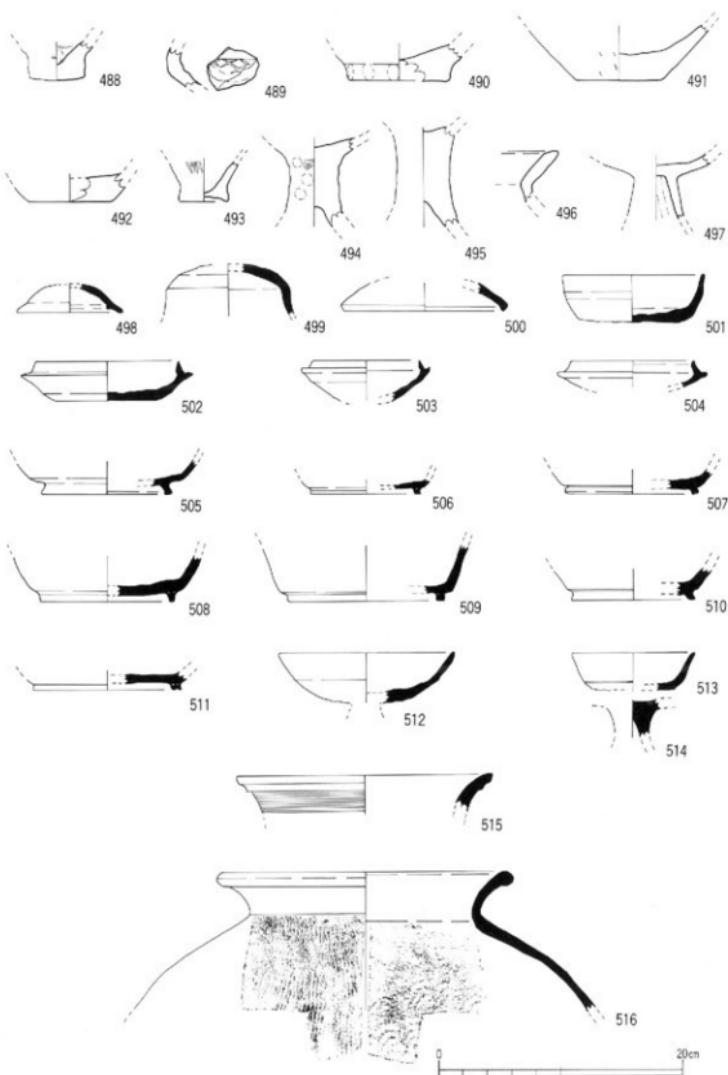
石器(542・543) 542は磨製石庖丁の刃部片。543は砥石である。

鉄器・鉄器製作関連遺物(544～555) 544～549は鉄器、550～555は鉄滓。544はタガネ状の製品である。頭部のみの遺存である。545は棒状の鉄器。546～549は器面に銷が付着し、形態不明の鉄器である。

#### IV上層出土遺物(第70～75図)

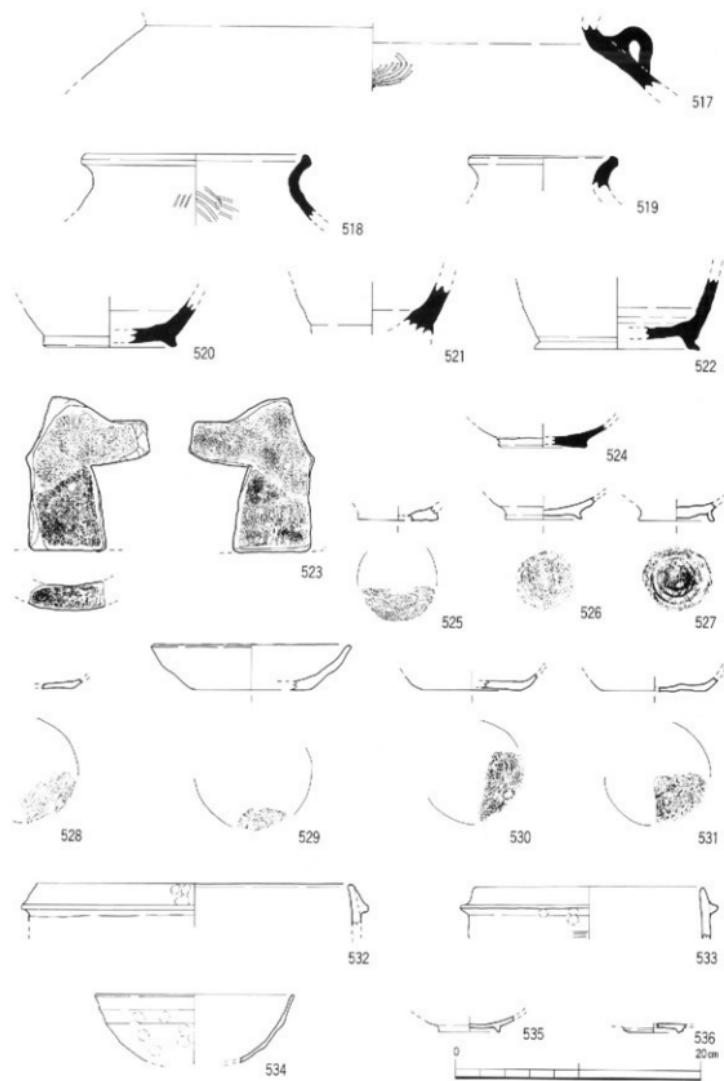
弥生土器、土師器、須恵器、瓦、灰陶器、綠釉陶器、瓦器、白磁、青磁、石器、鉄器等がある。白磁や青磁は主として12～13世紀に時期比定されるものである。IV下層に比して、新しい時期の資料が多くみられる。

包含層出土の遺物

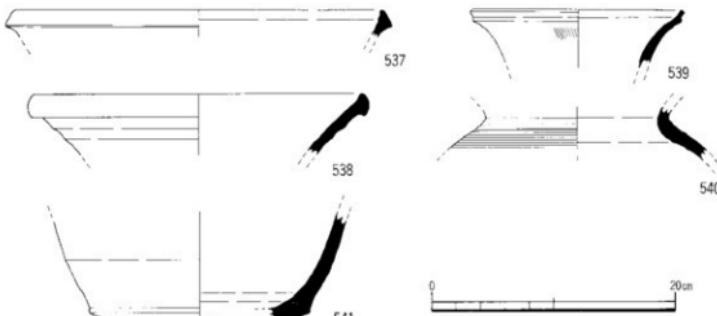


第65図 IV下層出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4)

調査の記録



第66図 IV下層出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4)



第67図 IV下層出土遺物実測図(3) (縮尺 1/4)

弥生土器 (556~561) 559・560は高坏形土器。560は坏部と脚部との接合に充填技法を用いる。

土師器 (562~564・599~609) 562~564は古墳時代から古代までの土師器である。599~609は中世の土師器であるので、これは後述する。563は瓶の把手である。

須恵器 (565~591・617~623) 565~591は古墳時代~古代の須恵器である。565は坏蓋。天井部は丸みをもち、口縁部は垂下する。端部はナデ凹む。5世紀後半。566~568は坏身。569は高台付坏。高台は底体部の境の内につく。8世紀。570~577は高坏。572是有蓋高坏の脚部である。「ハ」の字形に外反し、端部は丸みをもつ。6世紀初頭。573・574は長脚の高坏である。6世紀後半。578は甕、あるいは器台坏部の口縁部である。6~8世紀か。579は甕の口縁部。11縁端部を内にわずかにつまみ上げている。8世紀。580は甕の体部である。581は平瓶の頸部片。582~584は長頸甕。6世紀末~7世紀前半。587は長頸瓶である。高台は底体部の境に接して直立気味につく。588は甕あるいは瓶の底部である。高台はつかない。589~591は台付鉢。7世紀前半。592~594は半瓦。

灰釉陶器 (596) 長頸甕の口縁部である。

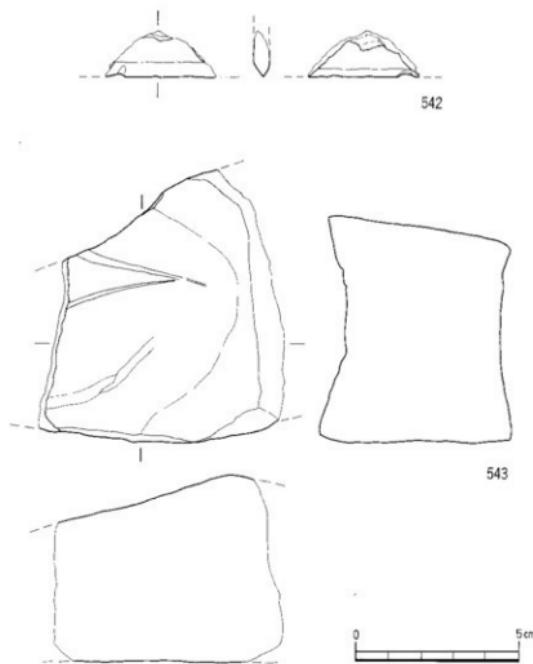
綠釉陶器 (597) 円盤高台付碗である。搬入品の可能性が高い。

599~609・614は中世の土師器である。599は外底面回転ヘラ切りの坏である。600~602は外底面に回転糸切り離しがみられる。輪高台がつく坏である。12世紀。603~609は坏である。607・608は外底面に回転糸切り離しがみられる。これらの遺物は13世紀。

瓦質土器 (610~613) 羽釜である。612と613は同一個体の可能性がある。

瓦器 (615・616) 615は和泉型瓦器碗である。胴部上半でわずかに屈曲する。13世紀前半。

617~623は中世の須恵器である。617~622は東播系のこね鉢。口縁端部を上下に扯張し、「く」の字に近い縁帶に仕上げられる。14世紀。623は体部外面に格子のタタキがみられる。



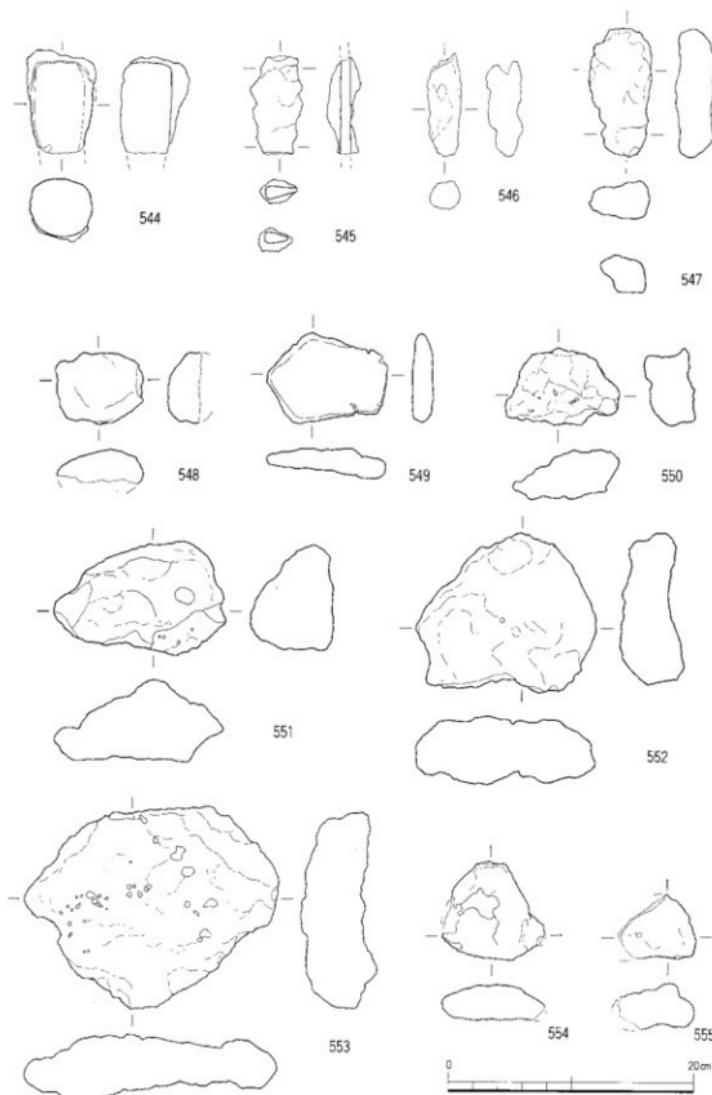
第68図 IV下層出土遺物実測図(4) (縮尺2/3)

貿易陶磁器（624～632） 624～627は白磁の碗である。624は口縁を玉縁状に仕上げる。625・626は削り出し高台をもつ。629は高台が剥離している。628・629は龍泉窯系青磁である。628は碗。630～632は同安窯系青磁。631は削り出しによる高台がつく碗である。630・631は12世紀末～13世紀。632は皿。15世紀に位置付けられようか。

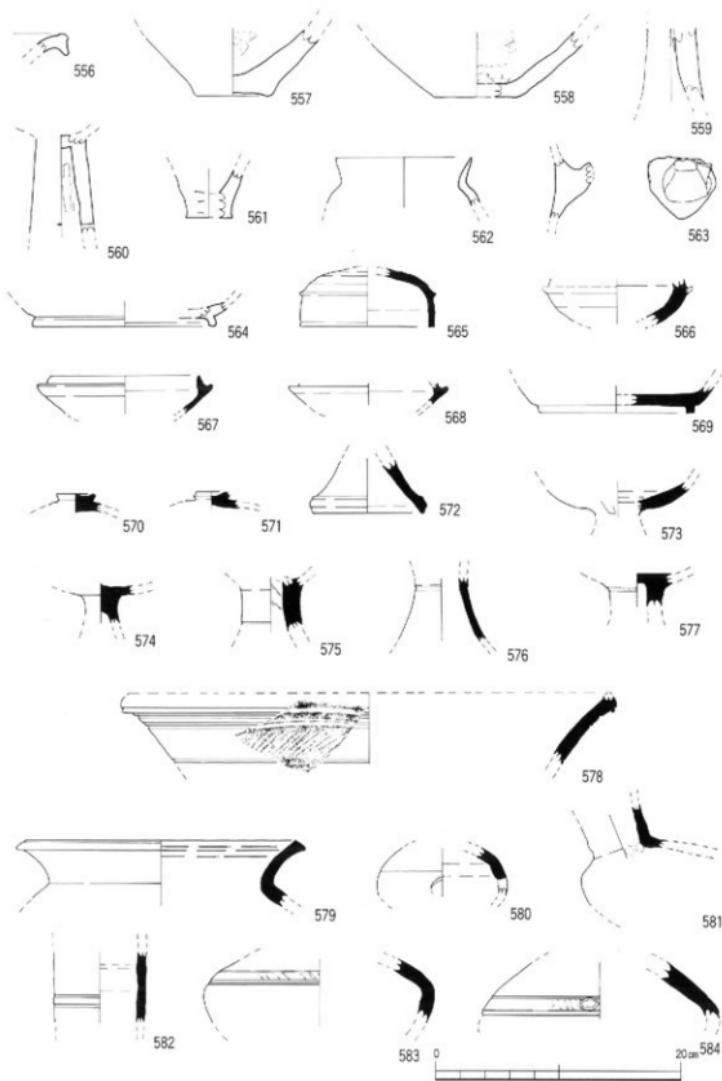
633～637は器種と所属時期が確定できないものである。633は脚付子持壺の子壺であろうか。635は器面に自然釉がみられる。14世紀を下限とする時期か。

石器（638～643） 638は直刃形態の石庖丁の製品である。639～641は石庖丁の未成品である。640は原材から剥離した板状剥片を素材として、打裂調整時に破損したものである。641は円盤を素材としている。642は大陸系磨製石器の石器素材である。形態から加工斧向きの素材と考える。643はサヌカイト製の打製石器の未成品である。石器は6点が出土したが、多時期の遺物を含む包含層資料である。しかし、これらの石器未成品は当地を含めた周辺地において、石器の製作がおこなわれていたことを示唆するものである。

鉄器・鉄器製作関連遺物（644～669） 644～659は鉄製品、660～667は鉄滓、668・669はふいごの羽口である。644～648は棒状鉄器。644は横断面が正方形を呈するものと思われる。649はタガネ状の

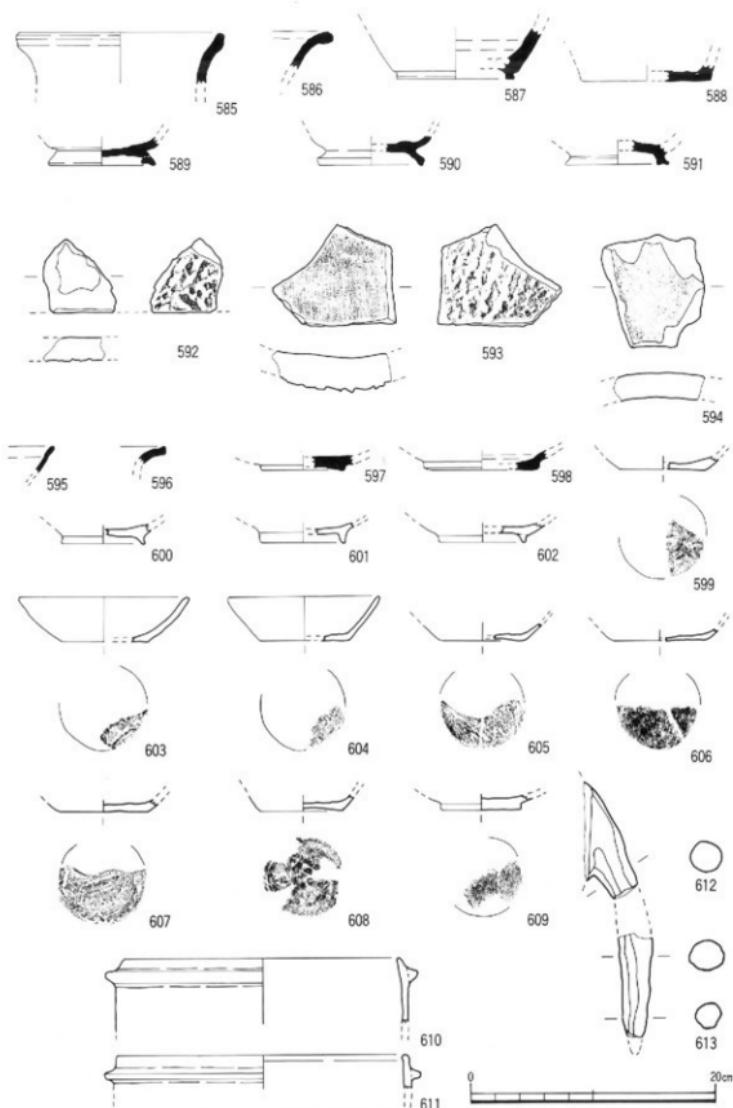


第69図 IV下層出土遺物実測図(5)(縮尺1/2)

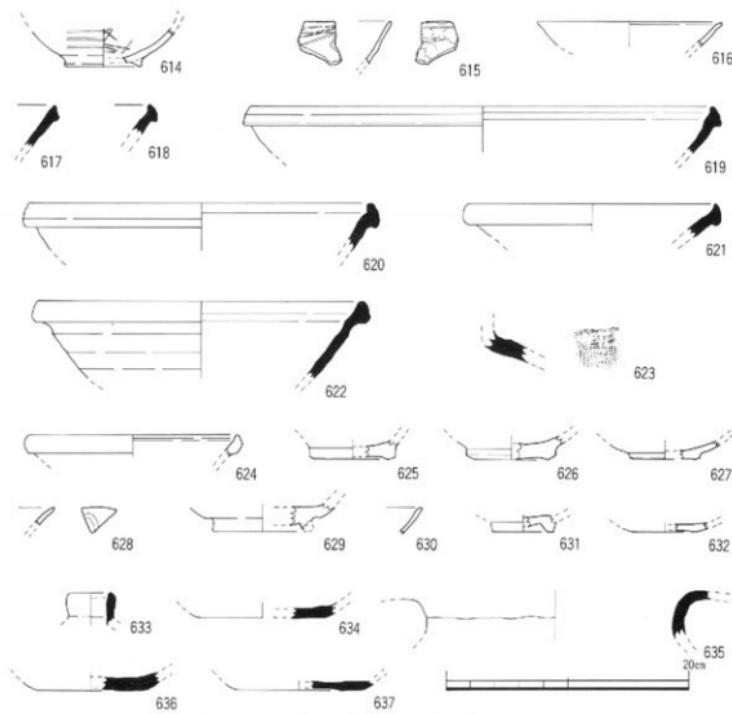


第70図 IV上層出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4)

### 包含層出土の遺物



第71図 IV上層出土遺物実測図(2)(縮尺1/4)

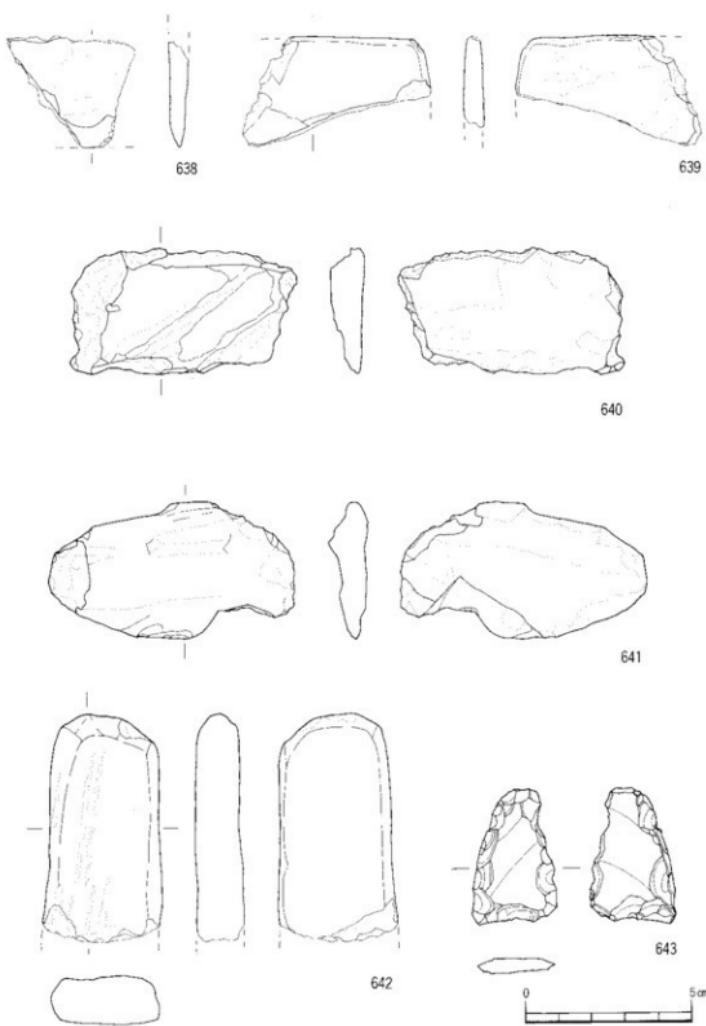


第72図 IV上層出土遺物実測図(3) (縮尺1/4)

製品か。650～659は器面全体に付着する錆のため、形状や器が不明の製品である。多くが板状を呈している。660は器面全体が錆で覆われ、細かい気泡がみられる。表面は茶褐色系、裏面が暗青灰色系を呈している。661～667は器面に細かい気泡がみられ、破断面にも多くの気泡がみられる鉄滓である。鉄滓は赤錆しており、凹凸をもつものが多い。668は表面に黒色の物質が吸着し、裏面には二次焼成により橙色に変色している。669も668に類似する。表面には細かい気泡が多く、黒色の物質が厚さ3～4mmで付着する。

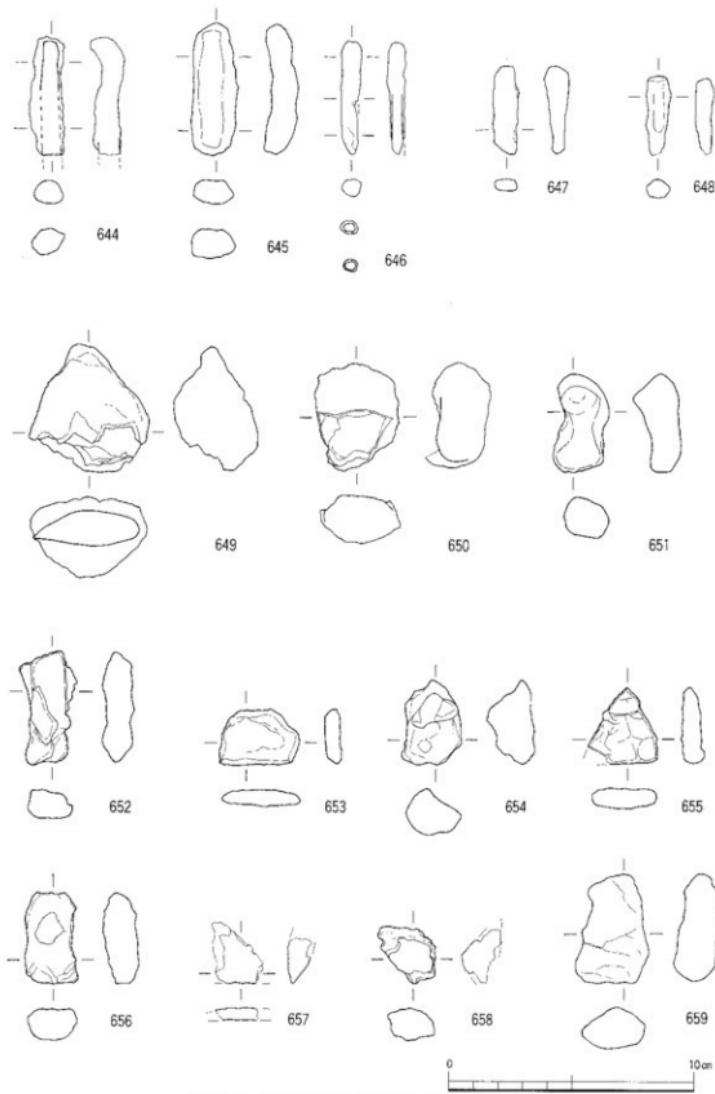
鉄器と鉄器製作関連遺物の出土は、当地を含めた周辺地で鍛冶がおこなわれていたことを示している。

包含層出土の遺物



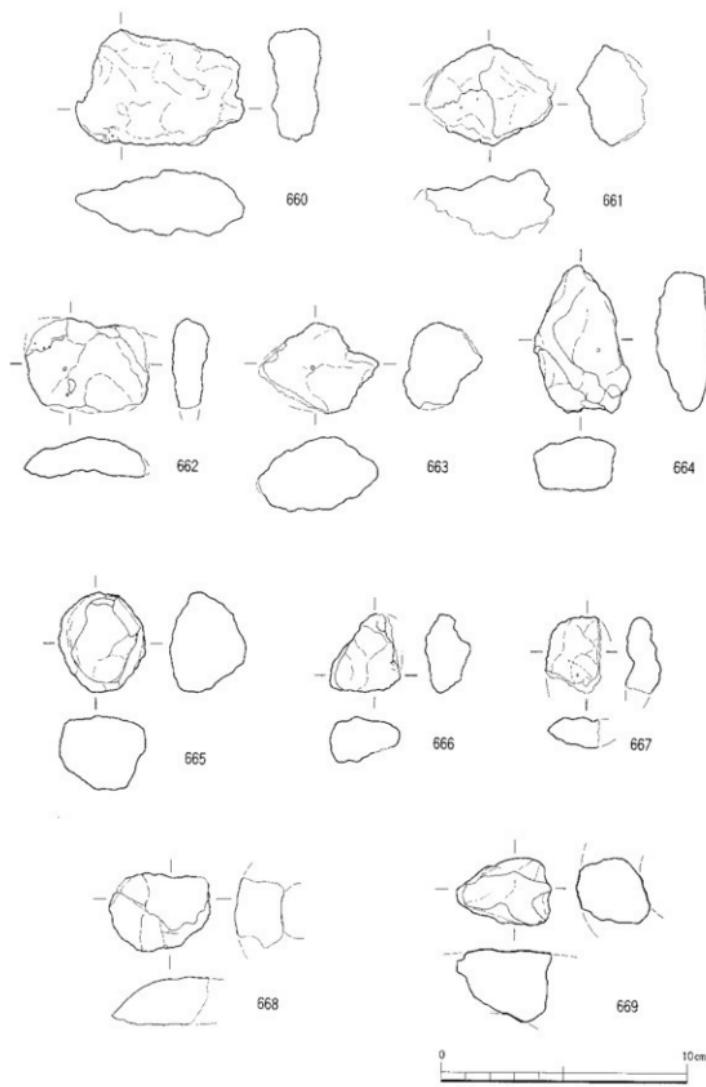
第73図 IV上層出土遺物実測図(4) (縮尺 2/3)

調査の記録



第74図 IV上層出土遺物実測図(5)(縮尺1/2)

包含層出土の遺物



第75図 IV上層出土遺物実測図 (6) (縮尺 1/2)

## 第V章 調査のまとめ

本調査では、弥生時代・古墳時代・古代～中世・近世以降の遺構と遺物を確認することができた。このことは、当時の人々が積極的に土地開発を行い、当地を含む周辺で生活を営んでいたことを示している。以下、成果と課題についてまとめておきたい。

弥生時代では、SD10・SX5が注目される。SD10は帰属時期と方向から調査地北に隣接する福音小学校構内遺跡SD3と同一遺構であるものと考えられる。既往の調査では、この溝の東西において数棟の住居址が検出されている。今後はこの南北に統く溝の性格を明らかにしてゆくことが望まれる。さらには、当地区における弥生後期の集落構造の解明を期待する。SD10とSX5から出土した弥生後期土器は、近年精力的に進められている土器編年を考える上で有効な資料になるものと評価できる。とりわけ、SX5では多量の在地の土器とともに、搬入土器（外来土器）が確認されたことは注目すべきことである。すなわち、長頸壺（241）は備前・備中南部地域における土器編年の中後期I-2期（V-2期）に帰属する。器形、細かい砂粒を含む精製された胎土、乳褐色の色調、肩部に施された「ノ」の字状刺突文、これらの諸特徴から241は搬入された可能性がきわめて高いと考えられる。一方、242は底部の形状、胎土、色調から備前・備中南部地域の土器を模倣して松山平野で製作された土器と判断される。弥生後期における瀬戸内海を介した南北交流の一端を示すものである。

古墳時代では、SX13が注目される。本遺構からは底部を欠く大型の直口壺が破碎した状態で出土している。自然流路にきわめて近い位置で出土しており、本遺構が「水」に対する意識のもとに構築され、底部を欠く大型の直口壺が据え置かれていたと理解したい。本資料については、今後の類例を持つて再検討する必要がある。

古代～中世ではSD11・SD3・SD8が注目される。SD11出土の勾玉と椎状石製品は、当地域における類例が少なく、貴重な資料である。SD3・SD8から出土した遺物は、当該期の土器編年や流通を考える上で有効な資料となろう。

包含層資料ではIV層とV層の遺物が注目される。弥生後期・古墳後期・古代～中世の遺物が多く認められたことは、これら多量の余剰生産物を生み出せる拠点集落が当地的北の微高地に展開していたことを示唆する。人工層位を用いた分層発掘を実施したことにより、遺物と土層の関係が明確となり得た。厚く遺存する包含層に対しては、有効な調査方法である。

以上、本調査に対する若干のまとめをおこなった。今後も既往の調査成果との比較と検討を重ね、本地区の歴史的役割を解明してゆきたい。

なお、報告書作成にあたり、弥生土器は梅木謙一氏、古墳～古代の土師器と須恵器は宮内慎一氏、古代～中世の土師器と貿易陶磁器は栗田正芳氏に御教示を賜った。記して感謝申し上げます。

（平成10年3月31日稿了）

### 【参考文献】

古代学協会 四国支部 1995 『弥生後期の瀬戸内海 一土器・青銅器・鉄器からみたその領域と交通一』

## 出土遺物観察表

## 遺物観察表（加島、小玉、丹生谷、欠野、多知川が作成した）

遺物の観察表は以下のように掲載した。

- (1) 番号は本文中の通し番号である。
- (2) 法量は破損品に対しては復元値を括弧で示した。
- (3) 調整は遺物の各部名称を略記した。口縁部→口、口縁端部→口端、頭部→頸、胴部→胴、胴部上半→胴上、胴部下半→胴下、底部→底、坏部→坏、脚部→脚、柱部→柱、天井部→天、受部→受、擔部→擔。
- (4) 胎土は混和剤を略記した。砂粒→砂、石英→石、長石→長、金雲母→金、その他の雲母→ウンモ、精製土→精。括弧内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
- 例、「1~4mm大の石英、長石を含む」→「石・長(1~4)」である。
- (5) 焼成は焼成具合を略記した。良好→○、良→○、不良→△。

表1 SD10 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備考	(1) 図版
				外 面	内 面				
1	壺	口 径 (25.6) 残 高 7.0	「く」の字状口縁。口縁端部は削取りされた。腹部内面に弱い棱があり。小片。	◎指頭痕 ハケ 裏ハケ	◎ヨコハケ ◎ハケ+ナデ	石・長(4)	△	F3	
2	壺	口 径 (24.2) 残 高 4.2	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は曲をなす。	ハケ	ハケ	石・長(3)少量	○	F3-c4	
3	壺	口 径 (21.6) 残 高 7.1	棱をもって外反する口縁部。	マメツ	ハケ	石・長(3) 全	△	F3	
4	壺	口 径 (22.4) 残 高 8.6	棱をもって外反する口縁部。口縁部は丸みをもつ。	マメツ	マメツ	石・長(4)	△	F3-b4	
5	壺	口 径 (21.8) 残 高 2.9	口縁部片。	◎指頭痕 裏マメツ	マメツ	石・長(3) 黒	△	F3-a4	
6	壺	口 径 (21.2) 残 高 8.4	棱をもって外反する口縁部。 (10本/1cm)	◎ハケ (10本/1cm)	マメツ	石・長(3)多量	△	F3-c4	
7	壺	口 径 18.2 残 高 30.7	棱をもって外反する口縁部。口縁部はやや丸みをもつ。しっかりと段をもつくり上げて底。	◎ナデ ◎ハケ ◎ケズリ ◎指頭痕	マメツ	石・長(3)	○	F3-c3 F3-c4	12
8	壺	口 径 (18.6) 残 高 10.1	棱をもって外反する口縁部。	◎指頭痕 ◎ハケ (10本/1cm)	◎指頭痕 ◎指頭痕→ハケ	石・長(3)少量	○	F3	
9	壺	口 径 (19.0) 残 高 3.5	棱をもって外反する口縁部。	◎指頭痕 ◎ハケ	◎ハケ ◎マメツ	石・長(2)	△	F4	
10	壺	口 径 (18.2) 残 高 4.8	ゆるやかに外反する口縁部。口縁部端は丸みをもつ。	マメツ	マメツ	石・長(2)	△	F3	
11	壺	口 径 (18.6) 残 高 6.5	棱をもって外反する口縁部。	◎マメツ 裏ハケ ◎マメツ	マメツ	石・長(2) 全	△	F3	

## 出土遺物観察表

SD10 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
12	甕	口径 18.2 残高 22.6	縁をもって外反する口縁部。 口縁端部は丸みをもつ。	ハケ	ハケ	石・長(3)	△	F3	
13	甕	口径 (16.4) 残高 9.0	縁をもって外反する口縁部。	④指頭痕 →ハケ (11~12本/cm) 裏面ハケ→ナデ	④ハケ→ナデ ⑤指頭痕→ハケ →ナデ	石・長(2)少量	○	F3	
14	甕	口径 14.8 底径 4.0	「く」の字状のやや長い口縁部。長胴で、平底。肩部外面にタキ痕あり。	マツツ ⑥板状圧痕	⑥指頭痕→ハケ (11~12本/cm) ⑦タテハケ、泡彫痕	石・長(4)多量	△	F3	12
15	甕	残高 16.9	長球形の胴部。	ハケ	⑥ハケ ⑦ハケ(4本/cm)	石・長(2)多量 砂	○	F3	
16	甕	残高 12.0	長球形の胴部。胴部外面にタキ痕あり。	④ハケ(10本/cm) →ナデ ⑤タキ→板ナデ	④指頭痕→ハケ (10本/cm)→ ナデ	石・長(3)少量 金	○	F3-b4 F3-c4	
17	甕	底径 3.5 残高 9.5	平底。	⑥ハケ(10本/cm) ⑦タキ→板ナデ	⑥ナデ	石・長(3) ウンモ	○	F3	
18	甕	底径 (3.0) 残高 10.4	平底。	⑥ハケ→ミガキ ⑦ナデ	⑥指頭痕 ハケ	石・長(1~2) 金	△	F3-b4	
19	甕	底径 3.1 残高 11.9	平底。	⑥タキ→ハケ (4~5本/cm) ⑦ナデ	⑥ハケ (4~5本/cm) 全	石・長(5) 全	○	F3	
20	甕	底径 3.1 残高 8.0	平底。	不明	⑥ナデ ⑦指頭痕→ナデ	石	○	D4	
21	甕	底径 4.1 残高 7.9	平底。	⑥ケズリ ⑦布状圧痕か?	ナデ	石・長(3)・金	○	F3-c4	
22	甕	底径 (5.6) 残高 3.4	立ち上がりをもつ平底。	⑥ナデ ⑦指頭痕→ナデ	ハケ→ナデ	密・石(1)	○	F3	
23	甕	底径 2.5 残高 3.7	平底。	⑥タキ・ナデ ⑦ナデ	シボリ痕 板圧痕	石・長(4)	○	F3	
24	甕	底径 (4.4) 残高 3.5	厚みのある平底。	ハケ・ナデ	ハケ	密・石(2)	○	F3-b4	
25	甕	底径 (4.8) 残高 5.8	ぐびれをもつ平底。	⑥ハケ→ミガキ ⑦指頭痕	マツツ	石・長(4)・砂	○	F3	
26	甕	口径 (32.0) 残高 4.7	「コ」の字接合の複合口縁部。 口縁端部は面をなす。	ヨコナデ	ナデ	石(1~4)金・多量	○	F3-c3	
27	甕	口径 (27.6) 残高 5.2	「コ」の字接合の複合口縁部。	マツツ	⑥ナデ ⑦ハケ	石・長(1~5)	△	E4-b4	
28	甕	口径 (25.0) 残高 6.0	「コ」の字接合の複合口縁部。	マツツ	マツツ	石(2)多量	△	F3-b4	
29	甕	口径 (20.8) 残高 11.5	「コ」の字接合の複合口縁部。 長く外反する・次口縁部に短く内傾する二次口縁部。	⑥ヨコナデ ⑦ハケ→ナデ	ヨコナデ	石(1~4)金・多量	○	F3	
30	甕	口径 (18.4) 残高 6.2	「コ」の字接合の複合口縁部。 口縁端部は面をなす。	⑥ヨコナデ ⑦ハケ→ヨコナデ	ナデ	石(4)・多量	○	出土地区不明	
31	甕	口径 (14.0) 残高 7.9	「コ」の字接合の複合口縁部。 口縁端部は面をなす。	⑥マツツ ⑦ハケ(10~11本/cm) +ヨコナデ	⑥ナデ ⑦指頭痕	石・長(4)・金・多量	△	F3	

## 出土遺物観察表

SD10 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
32	壺	口 径(11.0) 残 高 7.9	「コ」の字。	②ハケ→ヨコナデ ③ハケ(4~5本/1cm) →ナデ	②指痕痕→ナデ ④ハケ (5~6本/1cm)	石・長(1~5)多量	○	F3-a4	
33	壺	口 径(17.8) 残 高 6.4	「コ」の字。	②ナデ ④ハケ	②指痕痕 (12本/1cm)	石・長(1~3)	○	出土地区 不明	
34	壺	口 径(15.6) 残 高 3.5	口縁部片。直線文4条、彌描 波状文4条。	ナデ	指痕痕・ナデ	石・長(2)	○	F3-c4	
35	壺	口 径(14.0) 残 高 6.1	「コ」の字。	①)ナデ ④ハケ	②)ヨコナデ ④ハケ→ナデ (7本/1cm)	石・長(1~2)	○	F3	
36	壺	口 径(21.0) 残 高 6.3	「く」の字接合の複合口縁部。 口縁部は両とりされている。	ハケ→ナデ	ハケ (8本/1cm) →ナデ	石・長(1~5)	○	F3	
37	壺	口 径(22.0) 残 高 2.7	口縁部片。「く」の字接合。 四縁文3条。	ヨコナデ	マメツ	密・石・長(1)	○	D4	
38	壺	口 径(17.8) 残 高 4.9	「く」の字。	ハケ(8本/1cm)	ハケ(12本/1cm)	石・長(1~2)金・ 多量	○	F3	
39	壺	残 高 4.5	複合口縁壺	ハケ(10本/1cm)	ハケ(10本/1cm)	密・石・長(1~2) 多量 金	○	F3	
40	壺	口 径(14.4) 残 高 6.6	「く」の字接合の複合口縁壺。	ハケ (8~9本/1cm)	ハケ	石(2)	○	F3-c4	
41	壺	口 径(13.6) 残 高 9.7	「く」の字接合の複合口縁部。 内縫して立ち上がる二次口縁。	②ヨコナデ ④ハケ	マメツ	石・長(1~3)多量	△	F3-b3	
42	壺	口 径(12.2) 残 高 4.0	「く」の字接合の複合口縁部。	ハケ (7~8本/1cm)	ハケ	吉 石・長(1) 金	○	F3-c4	
43	壺	口 径(11.0) 残 高 2.7	「く」の字接合。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~2)	○	F3-c4	
44	壺	口 径(16.2) 残 高 9.3	「く」の字接合。長い一次口縁に 直立する二次口縁。口縁 端部は両とり。	②)ハケ(9本/1cm) →ヨコナデ ④ハケ(9本/1cm)	②)ハケ(10本/1cm) ④ハケ(12本/1cm)	石・長(1~4)	○	F3	
45	壺	口 径(14.0) 残 高 7.0	「く」の字接合の複合口縁部。	②マメツ ④ハケ	マメツ	石・長(1~4)	△	F3	
46	壺	口 径(13.0) 残 高 8.1	口縁部は直立気味。口縁部 は丸くおさめられている。	②マメツ ④ハケ	マメツ	石(1~3)多量	△	F3	
47	壺	口 径(16.8) 残 高 3.6	口縁部片。「く」の字接合の 複合口縁部。	マメツ	マメツ	石(1~3)多量	△	F3-b4	
48	壺	口 径(16.2) 残 高 9.5	口縁部片は両とりされてい て、接合部はあまい縫をもつ。	ハケ	ハケ	石(1~3)多量	○	F3-b4	
49	壺	口 径(21.2) 残 高 4.5	大きく外反する口縁部。	②ヨコナデ ④マメツ	マメツ	石・長(1~2)	△	F3	
50	壺	口 径(17.2) 残 高 5.9	外反する口縁部。口縁端部は 面をなす。	ハケ	ハケ	石(1~2)多量	△	F3	
51	壺	口 径(14.8) 残 高 5.4	外板口縁。口縁端部はつまみ 上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3) 金	△	F3	

## 出土遺物観察表

## SD10 出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成備考	図版
				外 面	内 面			
52	盃	口径(31.6) 残高 4.5	外反する口縁。口縁端部はつまみ上げる。	⑩ヨコナデ ⑪ハケ	⑫ヨコナデ ⑬ハケ ⑭ヨコナデ	長(1)多量	○ F3	
53	盃	残 高 5.0	長脚壺の底部。	ハケ	ハケ	石・長(3)	△ 出土地 不明	
54	盃	口径(33.2) 残高 7.0	強く唇曲し、やや長く外反する口縁部。	ヨコナデ	ヨコナデ (板状) 石・長(1~2) マツメツ	(板状) 石・長(1~2)	○ F3-c4	
55	盃	口径(34.8) 残高 11.9	直立気味に外反する口縁部。 底部はやや丸い。	ハケ(6~7本/1cm)	ハケ	石・長(3)多量	○ F3	
56	盃	口径 13.2 残高 14.2	ゆるやかに外反する短い口縁部。	⑨ヨコナデ ⑩ヨコナデ→ナデ ⑪ヨコナデ→ナデ ⑫ヨコナデ→ナデ	⑬指頭痕→ ハケ(15本/1cm) ハケ(15本/1cm) ハケ(15本/1cm)	石・長(3)少量 金	○ F3	
57	盃	残 高 5.3	胴上半に焼成前の線刻。	ハケ	指頭痕→ハケ ナデ	石・長(1)	○ F3-b4	12
58	盃	口径(15.4) 残高 3.3	広口盃の口縁部。口縁端部は下方に外張り、外側に3箇所の沈み文、2箇所の対の円形浮文。 1側面内面に4条の波状文。	⑩ヨコナデ ミガキ	ミガキ 金	石・長(3)少量 金	○ F3	12
59	盃	口径(17.0) 残 高 3.7	広口盃。外反する口縁で口縁部は下方にやや膨張されている。[捺壓印]に柔の波状文。	ヨコナデ	ハケ・ヨコナデ	密 石・長(1) 金	○ F9-b4	
60	盃	底径(8.0) 残 高 14.3	底径をもつ、やや立ち上がりのある平底。	ハケ(4~5本/1cm) ハケ(4~5本/1cm)	赤褐色底 ハケ	石・長(2)多量 (4~5本/1cm)	○ F3	
61	盃	底 径 (7.0) 残 高 8.4	やや丸みのある平底。底部付近に焼成前の線刻。	ハケ(10本/1cm) →ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(4) ウンモ	○ F3	
62	盃	底 径 (7.1) 残 高 8.3	平底。	ハケ ハケズリ	(6本/1cm) マツメツ	石・長(1~5)	△ F3-c4	
63	盃	底 径 (8.4) 残 高 5.5	厚みのある平底。	ハケ(11本/1cm) →ナデ	指頭痕、ナデ	密 石(1~3)	△ F3	
64	盃	底 径 (7.4) 残 高 7.5	立ち上がりのある平底。	ハケ・ナデ	指頭痕	石・長(3)	○ E4-b1	
65	盃	底 径 (6.2) 残 高 8.1	平底。底部付近に焼成前線刻。	ハケ	ハケ(4本/1cm)	石・長(3)少量 ウンモ	○ F3-b4	
66	盃	底 径 (4.2) 残 高 24	厚みのある平底。底部付近に焼成前線刻。	ハケ→ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(3)少量 ウンモ	○ D4	
67	盃	残 高 5.7	胴下半片。一部に器面の剥落、外間に焼成前線刻。	ナデ	ハケ→ナデ	石・長(5)	○ F3	12
68	盃	残 高 5.7	鋸部片、鋸部に焼成前の線刻。 板木口の卯伝による「ノ」の字状文。	ハケ→ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(2)少量	○ F4	12
69	盃	残 高 8.0	胴上半に焼成前線刻。2条の波状文。	ハケ→ナデ	ミガキ ハケ	石・長	○ F3	12
70	鉢	口径(34.4) 残 高 8.6	大型品。「く」の字状に折り曲げた口縁端部は面をなす。 底部に割付突芯。	⑩ハケ→ナデ ⑪ハケ(8本/1cm)	ハケ・ナデ	長(3)	○ F3-b4	
71	鉢	口径(33.2) 残 高 6.0	中型品。「く」の字状に折り曲げた口縁端部はやや丸い。底部に割付突芯。	マツメツ	ハケ	石・長(1~2) 全	○ F3-c4	

## 出土遺物観察表

SD10 出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形 勵・施 文	調 整		胎 土	焼成	備 考 団版
				外 面	内 面			
72	鉢	口径(18.6) 底径 5.1	外反する短い口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。	(1)ハクリ (2)ハケ(1本/1cm)	マツフ	石・長(1) 砂	○	F3-a4
73	鉢 残高	5.4	強部は継ぎまり、口縁は「く」の字状に折り曲げられ、つば状に長い。	ハケ(8~9本/1cm)	(1)ハケ (2)指頭痕	石・長(1~2) 多量	○	F3
74	鉢	口径(14.4) 容高 12.9 底径 4.8	完形品。内側する直口縁。口縁端部は丸とりされる。底部はやや立ち上がりをもち厚みのある形状。	ナデ (1)指頭痕→ナデ	(1)ヨコナデ (2)ヨコナデ 等ナデ 等ミガキ	石・長(1~4) 多量	○	F3-c4
75	鉢	口径(10.6) 残高 7.6	内傾して立ち上がる直口縁。口縁端部は筒をなす。	(1)ヨコナデ (2)ヨコナデ 等ナデ 等ミガキ	(1)ヨコナデ (2)ヨコナデ 等ミガキ	石・長(1~3) 多量	○	F3
76	鉢	口径(12.8) 残高 10.4	舌付跡。やや内傾して立ち上がる直口縁。口縁端部は丸く仕上げられている。底部はくびれをもつて底。	指頭痕	指頭痕→ナデ	石・長(1~2) 少量	○	F3
77	鉢 残高	4.5	舌付鉢の台部。	マツフ	マツフ	密・金	△	F3-b3
78	鉢	残高 3.9	舌付鉢の台部。	ナデ	ナデ	石・長(2) 少量	○	F3-c4
79	鉢 残高	4.2	舌付鉢の台部。焼成前の穿孔 4方向。	ミガキ	ナデ	石・長(2) 少量	△	F3-c4
80	鉢	底径 1.9 残高 2.4	突出する平底。	ハケ (9~10本/1cm)	指頭痕	石・長(1) 多量	○	F3-b4
81	鉢	底径 2.0 残高 3.1	突出する平底。	(1)指頭痕 (2)ハケ (10本/1cm)	ハケ	砂・多量	○	F3-c4
82	鉢	底径 1.0 残高 2.3	小さく突出する平底。	マツフ	マツフ	石・長(1) 砂・多量	△	E4-b2
83	高坏	残高 2.8	坏部片。	ナデ	指頭痕→ナデ	石(2)・金	○	F3-c3
84	高坏	残高 5.6	坏部片。	布目江痕→ナデ	(1)ナデ (2)指頭痕→ナデ	石・長(4) ウモ・多量	△	F3
85	高坏	残高 8.6	脚部片。脚部へむけて大きくひろがる。	指頭痕→ハケ ミガキ	(1)ナデ (2)シボリ痕 (3)ハケ→ナデ	石・長(3) ・ウンモ	○	F3
86	高坏	残高 6.1	脚部片。柱部は短いと思われる。	指頭痕→ナデ	(1)マツフ (2)シボリ痕 (3)指頭痕→ナデ	石・長(4) ・ウンモ	○	E4-c1
87	高坏	残高 5.4	脚部片。	ハケ(10本/1cm)	指頭痕→シボリ 痕・ナデ	石・長(4) 少量	○	F3-e4
88	高坏	残高 6.0	脚部片。	ミガキ→ナデ	指頭痕・ナデ	密・金	○	E4-b1
89	高坏	残高 6.3	脚部片。焼成前の穿孔 4方向。	ハケ→ミガキ	(1)ナデ (2)シボリ痕 →ナデ	石・長(2) ・金・少 量	○	E4-c1
90	高坏	残高 6.2	脚部片。焼成前の穿孔 4 方向。	ハケ・ミガキ→ ナデ	(1)ナデ (2)シボリ痕 ・ウモ・少 量	石・長(3) ・ウンモ・少 量	○	F3-b3
91	高坏	残高 12.7	脚部片。脚部へむけて大きくひろがる。焼成前の穿孔 4 方向。(約 12cm)	ハケ・ミガキ→ ナデ	(1)ナデ (2)シボリ痕 →ナデ	密・心・長(2) ・ウンモ・少 量	○	E4-c2

## 出土遺物観察表

SD10 出土遺物観察表 土製品

(6)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
92	高坏	残 高 6.3	脚部片。端部へむけて大きくひろがる。沈漫文8条以降、マツツ燒成前の跡。	布目压痕		石・長(5)	△	F3	
93	高坏	残 高 7.9	脚部片。細長い柱部で焼成前空孔4方向。	ハケ→ミガキ ナデ		石・長(4)・ウンモ	○	F3-b3	
94	高坏	残 高 10.9	脚部片。焼成前空孔4方向。	ミガキ→ナデ		石・長(2)・ウンモ・少量	○	F3-c4	
95	高坏	底 径 (17.6) 残 高 16.0	脚部片。底部は大きくひろがる。焼成前空孔4方向 (約18cm)。	マツツ		心・長(3)・ウンモ・少量	△	F3	
96	高坏	残 高 11.6	脚部。細長い柱部。	布目压痕→ミガキ	シボリ痕	若石・長(3)少量金	○	F3-c4	
97	高坏	残 高 3.8	有段の坏部。大きく外反する口縁部。	ミガキ→ナデ	ミガキ→ナデ	石・長(3)少量金	○	F3-b3	
98	高坏	残 高 3.7	有段の坏部。大きく外反する口縁部。	ナデ	ナデ	石・長(3)ウンモ	○	F3	
99	高坏	残 高 3.8	有段の脚部。段より上部に焼成前空孔。	ナデ	ミガキ	石・長(2)少量金	○	F3	
100	高坏	残 高 3.9	有段の脚部。段に半載竹管文。段より上部に焼成前空孔。	ナデ	ナデ	密 石英(1)少量 ウンモ	○	F3	
101	高坏	底 径 (25.8) 残 高 2.8	脚部。大きくひろがる。端部は凹をなす。	ミガキ ナデ	ナデ	心・長(4) ウンモ	○	E4-a1	
102	器台	口 径 (32.8) 残 高 1.5	口縁部上下に抵抗。端部に2朱の沈線。	①ヨコナデ ②ミガキ	ミガキ	石・長(4)少量	○	F3-b4	
103	器台	口 径 (30.8) 残 高 1.5	口縁部上下に抵抗。端部に3朱の沈線。	マツツ	ミガキ	石・長(1)少量	○	F4	
104	器台	口 径 (25.6) 残 高 1.8	口縁部は垂下する。	①ヨコナデ ②ハケ・ミガキ	ミガキ	石・長(3)少量	○	F3-c4	
105	器台	残 高 7.8	柱部片。円孔 (φ1.0cm)。	ハケ→ミガキ→ ナデ	指ナデ	石・長(2)少量 金	○	F3	
106	器台	底 径 (19.6) 残 高 4.6	大きく広がる裾部。端部はヨコナデ。	ハケ(5-6本/1cm)	ハケ→ナデ	石(3) 金	○	F3	
107	支脚	残 高 12.0	やや細長い柱部をもつ。中空。角をもつ。	指痕 延→ハケ 15本/1cm)→ナデ		しほり痕→指痕 底・ハケ・ナデ ウンモ	○	F3-c4	
108	支脚	残 高 13.5	ゆるやかに広がる裾部。中空。角をもつ。	指痕痕	(2-3本/1cm)	石・長(3) 砂指痕度	○	F3 F3-b4	
109	裏	口 径 (17.4) 残 高 6.2	「く」の字状に屈曲する長い口縁部。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	⑤ヨコナデ ケズリ	砂 石・長(4)	○	F3-b4	
110	裏	口 径 (14.8) 残 高 6.1	「く」の字状に屈曲する。短い口縁部。口縁端部は丸い。	ヨコナデ ハケ→ヨコナデ	⑥ヨコナデ ハケ	砂多量	△	E4-b2	
111	裏	口 径 (17.2) 残 高 6.0	「く」の字状に屈曲する。短い口縁部。口縁端部はつまみ上げられ。	ヨコナデ ケズリ	⑦ヨコナデ ハケ・ヨコナデ	石・長(1) 砂	○	F3-b4	

## 出土遺物観察表

SD10 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
112	甕	口 径(16.2) 残 高 4.5	「く」の字状に屈曲する口縁部。口縁端部は上方につまみあげられる。	②ヨコナデ 等ハケ	④ヨコナデ 等ケズリ	石・長(3) 砂	△	F3-a4	12
113	壺	口 径(14.2) 残 高 2.0	口縁部片。口縁端部はつまみ上げられる。	ヨコナデ	マメツ	砂 多量	○	F3-b4	
114	甕	口 径(13.3) 残 高 3.9	「く」の字状に屈曲し、やや内湾気味に立ち上がる口縁部。口縁端部はつまみ上げられる。	②ヨコナデ 等ハケ	④ヨコナデ 等マメツ	石・長(1)少量 砂	○	E4 c1	
115	甕	口 径(14.0) 残 高 7.9	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部はやや丸い。	ミガキ・ナデ(?)	ヨハケ→ナデ 等ナデ	石・長(4)	○	F 3	
116	壺	口 径(16.8) 残 高 9.6	一重口縁。二次口縁はやや外湾し、口縁端部はつまみ上げられる。	②ヨコナデ 等ハケ→ナデ	④ヨコナデ 等ケズリ	砂 ウンモ	○	F3-c4	12
117	深鉢	残 高 3.9	粗製口縁。口縁端部は面とりされ、削り目がある。口縁から下がった位置に削り目突端。	②ヨコナデ 等ケズリ	ナデ	石・瓦(1~3)多量	○	D 3	

SD10 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	遺存状態	材質	法 量			備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
118	敲 石	23		11.2	9.0	4.2	511.5	F 3 - b 4
119	敲 石	45		9.5	8.1	4.6	572.0	F 3 - c 4
120	敲 石	ほぼ完存		15.4	12.3	6.6	1649.5	F 3 - b 4
121	磨 石	2/3		9.1	7.3	4.1	426.0	D 4 - d 2

表2 SX5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
122	甕	口 径(26.8) 残 高 6.9	ゆるやかに外反する口縁。口縁端部は丸くおさめられている。	②ヨコナデ 等マメツ	④指頭痕→ハケ 等ナデ ⑧ハケ(?)→剥削(?)	石・長(4)	○	F9-b3 ②④	
123	甕	口 径(20.2) 残 高 11.8	民窓。くびれをもつ平底。外反する口縁。口縁端部は面を延ばす。	②ハサワカ→ナデ 等ハケ	④指頭痕→ナデ 等ハケ ⑥指頭痕→ナデ 等ハケ→ナデ	石・長(4) ウンモ	○	F9-a2② F9-a3① F9-a3③	13
124	甕	口 径(22.0) 残 高 6.6	ゆるやかに外反する口縁。口縁端部は面をなす。	マメツ	マメツ	石・長(3)多量	△	F9-b3①	
125	甕	口 径(20.6) 残 高 7.4	棱をもち外反する口縁。口縁端部は外縁し、端面はナデによりやや抵抗している。	ハケ(6本/1cm) +ナデ	④ハケ→ナデ 等ハケ(6本/1cm)	石・長(2)・ウンモ・少量	○	F9-b2①	
126	甕	口 径(20.8) 残 高 9.9	棱をもち外反する口縁。口縁端部は面をなし、ナデによりやや抵抗している。	ハケ(7本/1cm) +ナデ	④ヨコナデ 等ハケ ④指頭痕→ナデ 等指頭痕→ナデ	石・長(2)少量	○	F9-b2②	
127	甕	口 径(23.0) 残 高 11.4	ゆるやかに外反する口縁。口縁端部は面をなす。	④マメツ 等ハケ(7本/1cm)	④マメツ 等ハケ	石・長(2)少量	○	F9-a2① F9-a3②	
128	甕	口 径(24.2) 残 高 6.7	外反する口縁。口縁端部は丸くおさめられている。	ハケ→ナデ 等ナデ	④指頭痕→ハケ 等ナデ	石・長(3)多量	○	F9-a2②	
129	甕	口 径(20.2) 残 高 5.8	棱をもって外反する口縁。口縁端部は面をなす。	ナデ	甘指頭痕→ナデ 等ハケ→ナデ	石・長(2)・ウンモ	○	F9-b3②	

## 出土遺物観察表

## SX5 出土遺物観察表 土製品 (2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 者	図版
				外 面	内 面				
130	甕	残高 8.9	外反する口縁。口縁端部の形態は欠損のため不明。	ハケ(9本/1cm) →ナデ	⑤ナデ 鼻指頭痕→ 板ナデ	石・長(2)・少量	○	F9-c4	
131	甕	口径(19.6) 残高 11.9	ゆるやかな棱をもって外反する口縁。 口縁端部は丸くおさめる。	⑤舌頭痕 ハケナデ 等ハケ(7本/1cm) →ナデ	⑤ナデ 等ハケ(7本/1cm) →ナデ	石・長(3)・ウンモ	○	F9-b4④	
132	甕	口径(20.0) 残高 6.9	ゆるやかに外反する口縁。口縁端部は面をなす。	⑤舌頭痕→ハケ(5 本/1cm)・板ナデ 等ハケ→ナデ	指頭痕・ハケ→ 板ナデ	石・長(3)・金・少 量	○	F9-b4②	
133	甕	口径(18.4) 残高 5.9	棱をもって外反する口縁。口縁端部は面取りされおり、や や下方に抵抗している。	⑤舌頭痕→ハケ(7 本/1cm)→ナデ 等ハケ・ナデ	舌頭痕→ハケ→ ナデ	石・長(3)・少量	○	F9-c3	
134	甕	口径(19.2) 残高 5.2	外反する口縁。口縁端部はマ メツのため、はっきりしない。	ハケ(マメツ)	指頭痕(マメツ)	石・長(3)・ウン モ・少量	○	F9-c4	
135	甕	口径(18.8) 残高 7.4	棱をもって外反する口縁。口 縁端部は面をなす。	⑤ハケ→ナデ 等ハケ(8本/1cm)	⑤指頭痕→ハケ →ナデ 等ハケ・ナデ	石・長(4)・金・少 量	○	F9-c3	
136	甕	口径(16.8) 残高 10.7	ゆるやかな棱をもって外反す る口縁。口縁端部は面をなす。	⑤ハケ→ヨコナデ 等ハケ(6本/1cm) →ナデ	指頭痕→ハケ →ナデ	石・長(3)・ウン モ・少量	○	F10-a3③	
137	甕	口径(16.2) 残高 4.9	外反する口縁。口縁部はま い面をなす。	⑤舌頭痕→ハケ(10 本/1cm)→ナデ 等ハケ→ナデ	指頭痕→ハケ →ナデ	石・長(4)	○	F10-a1④	
138	甕	口径(14.8) 残高 4.7	棱をもって外反する口縁。口 縁端部はナデのため、下にや や抵抗している。	⑤ヨコナデ 等ミカキ・ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(2)・少量	○	F10-c2②	
139	甕	口径(14.3) 残高 4.0	ゆるやかな棱をもって外反す る口縁。 口縁端部は丸くおさめる。	マメツ	⑤ハケ 等指頭痕・ナデ	石・長(2)・少量	△	F9-a2③	
140	甕	口径(15.2) 残高 4.1	ゆるやかに外反する口縁。口 縁端部はあまり面をもつ。	マメツ	指頭痕(マメツ)	石・長(4)・多量	△	F10-c1④	
141	甕	口径(14.8) 残高 4.7	棱をもって外反する口縁部。 口縁端部は面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(3) ウンモ	○	F10-d2①	
142	甕	口径(14.4) 残高 7.1	ゆるやかに外反する口縁部。 口縁端部はあいまいな面をな す。	ハケ→ナデ	⑤ハケ 等指頭痕→ナデ	石・長(3)	○	F10-b1④	
143	甕	残高 10.4	口縁欠損。	ハケ(8本/1cm) →ナデ	等ナデ 等ハケ・ナデ	石・長(4) ウンモ	○	F9-a2④	
144	甕	口径(15.2) 残高 9.0	棱をもって外反する口縁部。 口縁端部は面をなす。	⑤ハケ・ヨコナデ 等ハケ(8本/1cm)	⑤ハケ(7本/1cm) →ナデ 等指頭痕・ハケ・ナデ	石・長(2)・少量 ウンモ	○	F10-d3④	
145	甕	口径(15.0) 残高 3.6	棱をもって外反する口縁部。 口縁端部は丸みをもつ。	指頭痕→ハケ→ ナデ	ハケ・ナデ	石・長(4)	○	F9-b3④	
146	甕	口径(13.9) 残高 9.2	棱をもって外反する口縁部。 口縁端部はあいまいな面をな す。	ハケ(5本/1cm) →ナデ	⑤ハケ→ナデ 等指頭痕 ハハケ・ナデ	石・長(2) ウンモ	○	F10-e1④	
147	甕	口径(13.0) 残高 7.8	ゆるやかに外反する口縁部。 口縁端部は面をなす。刻れあ り。	ハケ(7本/1cm) →ナデ	⑤ヨコナデ 等指頭痕 ハハケ・ナデ	石・長(3)・少 量	○	F9-b1④	
148	甕	口径 17.6 底径 3.8	ゆるやかに外反する口縁部。 口縁端部はひずんでいる。半 球形。	⑤ハケ→ナデ 等ハケ(5本/1cm)→ナ デ 等指頭痕・ナデ	等指頭痕→ハケ →ナデ 等指頭痕・ナデ	石・長(3)	○	F10-c1④ d3④	
149	甕	底径 6.0 残高 12.8	平底。	⑤ハケ 等布目压痕	ハケ(7本/1cm) 指頭痕	石・長(4)・多量	○	F10-a2④	

## 出土遺物観察表

SX5 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種 法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備考	図版
			外 面	内 面				
150	壺 底径 5.6 残高 18.8	立ち上がりをもつ平底。	④ケズリ・ハケ ⑥指頭痕	指頭痕→ナデ	石・長(2)多量	○	F9-a3②	
151	壺 底径 5.8 残高 13.1	平底。	④ハケメ ⑥指頭痕	重りハケ ⑥指頭痕	石・長(3) 全	○	F9-d1	
152	壺 底径 (3.4) 残高 11.6	丸みをもつ平底。	ケズリ→ナデ	ナデ	石・長(4)多量	○	F9-c4②	
153	壺 底径 4.8 残高 15.0	わずかに立ち上がりをもつ上 げ底。	④ハケメ (4本/1cm) ⑥指頭痕	④ハケ (7本/1cm) ⑥指頭痕→ナデ	石・長(2)多量	○	F9-b3② F9-b3④	
154	壺 底径 5.6 残高 13.8	くびれの上げ底。	④ハケ ⑥指頭痕	④重りハケ (5本/1cm) ⑥ナデ	石・長(4)多量	○	F9-24② -c3	
155	壺 底径 5.5 残高 12.5	わずかにくびれをもつ平底。	④ハケ ⑤タキ	指頭痕→ナデ	石・長(8)多量	○	F10-c3②	
156	壺 底径 6.0 残高 12.1	くびれをもつ上げ底。	④ハケ ⑥指頭痕	指頭痕→ナデ ⑥指頭痕	石・長(3)多量	○	F10-bl②	
157	壺 底径 (5.6) 残高 7.2	立ち上がりをもつ平底。	マツフ ⑥指頭痕	指頭痕→ナデ	石・長(2)多量	△	F9-c3	
158	壺 底径 (6.0) 残高 6.7	立ち上がりをもつ上げ底。	④ハケ ⑥指頭痕→ナデ	ハケ	石・長(2)多量	○	F10-b3②	
159	壺 底径 5.6 残高 14.0	わずかに立ち上がりをもつ上 げ底。	④ハケ (7本/1cm) ⑥指頭痕	指頭痕、ナデ	石・長(3)多量	○	F9-h3②	
160	壺 底径 4.0 残高 10.0	小さくくびれる上げ底。	ハケ (6本/1cm)	指頭痕、指ナデ	石・長(3)	○	F9-b4②	
161	壺 底径 (4.0) 残高 5.8	立ち上がりをもつわざかな上 げ底。	指頭痕、ナデ	ハケ (5本/1cm) 指頭痕	石・長(3)多量	○	F9-c4②	
162	壺 底径 (4.6) 残高 9.6	くびれの上げ底。	④タキ ⑥指頭痕	④ハケ ⑥指頭痕	石・長(2)	○	F9-c4②	
163	壺 底径 (6.4) 残高 6.6	くびれの上げ底。	④ケズリ ⑥指頭痕	指頭痕	石・長(5)多量	△	F9-c4②	
164	壺 底径 (2.8) 残高 6.8	下方に突出する厚い平底。	④指頭痕 ハケ (10本/1cm) ⑥指頭痕	指頭痕、ナデ ナデ	石・長(4)多量	△	F9-c2	
165	口 径 (28.0) 残高 4.5	複合口縁。「コ」の字接合。	マツフ	マツフ	石・長(1~2)	△	F9-c3②	
166	壺 底 (28.6) 残高 6.0	複合口縁。「コ」の字接合。	マツフ	ナデ、マツフ	石・長(1~3)	△	F9-h3②	
167	壺 口 径 (25.6) 残高 15.3	複合口縁。「コ」の字接合。 口縁端部は面をなす。	ハケ (10本/1cm) →ヨコナデ	ハケ →ヨコナデ	石(1~4)多量 全	○	F9-b4②	
168	壺 口 径 (25.0) 残高 5.8	複合口縁。「コ」の字接合。 口縁端部は面をなす。	タテハケ (7本/1cm) ヨコナデ	タテハケ (7本/1cm)	石(1~2)	○	F9-a1②	
169	壺 口 径 (25.4) 残高 7.9	複合口縁。「コ」の字接合。	ハケ (8本/1cm) →ヨコナデ	ハケ →ヨコナデ 指頭痕	石(1~3)多量 全	○	F9-p4②	

出土遺物観察表

## SX5 出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種 法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考 国版
			外 面	内 面			
170	壺 口 径(25.0) 残 高 6.5	複合口縁。[コ]の字接合。 口縁端部は面をなす。	ハケ(10本/1cm) →ヨコナデ	指頭痕・ヨコナデ	密 石(1~4)多量 金	○	F3-b4①
171	壺 口 径(25.0) 残 高 11.0	複合口縁。[コ]の字接合。 口縁端部は面をなす。	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ 指頭痕 ハケ	石(1~4)多量 金	○	F9-b4①
172	壺 口 径(24.0) 残 高 6.9	複合口縁。[コ]の字接合。 口縁端部は面をなす。	ヨコナデ マメツ	ヨコナデ 指頭痕	石・長・多量 金	△	F10-c3①
173	壺 口 径(22.0) 残 高 5.5	複合口縁。[コ]の字接合。 口縁端部は面をなす。	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	石(1~3) 金	○	F10-cl③
174	壺 口 径(21.6) 残 高 9.1	複合口縁。[コ]の字接合。 口縁端部は面をなす。黒度。	ハケ(9本/1cm) →ナデ 指頭痕	ハケ(8本/1cm) →ナデ 指頭痕	石・長(1~3) 金	○	F10-c2①
175	壺 口 径 21.4 残 高 9.2	複合口縁。[コ]の字接合。 口縁端部は面をなす。	ハケ→ナデ (5本/1cm) (7本/1cm)	ハケ→ナデ 指頭痕	石・長(1~4) 金	○	F10-b1② -cl②
176	壺 口 径(21.4) 残 高 14.3	複合口縁。[コ]の字接合。 胴上半に「ノ」の字状の刻印。	ハケ→ナデ 指痕痕	指頭痕→ハケ	石・長(3)	○	F9-b3② -c2② -d② -e②
177	壺 残 高 6.0	複合口縁。[コ]の字接合。 頭部は内側する。	ハケ(5本/1cm) 指頭痕	ヨコハケ ヨコナデ 指頭痕	石・長(4)多量 金	○	F9-c4① -d① F10-c1①
178	壺 口 径(19.2) 残 高 16.0	複合口縁。[コ]の字接合。 口縁端部は丸い。頭部に刻印 突帯。	ハケ(3本/1cm) →ナデ 指頭痕	ヨコハケ(4本/1 cm)・ナデ 指頭痕	石・長(1~2)	○	F9-b4① -d④
179	壺 口 径(17.6) 残 高 6.3	[コ]の字接合の複合口縁器。 二次口縁部はやや内済し、口 縫端部は立ち上がり気味。	ハケ ナデ	ナデ	密 石(1~2) 金	○	F9-b4①
180	壺 口 径(15.2) 残 高 8.5	「コ」の字。口縫端部は丸く おさまられる。波文底と竹管 文が組み合いで、これらが2段 にわたって施文される。	指頭痕 (6~8本/1cm)	マメツ	石・長(1)	△	F9-c3② 13
181	壺 口 径(16.4) 残 高 5.3	[コ]の字接合の複合口縁器。 口縫端部、接合部は面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3)	○	F10-c2①
182	壺 口 径(14.8) 残 高 6.0	やや外反する二次口縁器。口 縫端部はあまい面をなす。 [コ]の字。	ハケ(10本/1cm) →ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(1~3)	○	F9-a4①
183	壺 口 径(12.8) 残 高 6.3	[コ]の字。二次口縫部はやや くびくび。接合部は面をなす。 マメツのためはつきりしないが 或次元4糸。	指頭痕→ハケ (6本/1cm)・ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1~2)	○	F10-c3①
184	壺 口 径(13.0) 残 高 8.0	矧いて二次口縫。口縫端部は丸 くおさまられている。長めの 頭部。「コ」の字接合。	ハケ(8本/1cm)	ハケ(5本/1cm)	石・長(1~4)	△	F9-a3①
185	壺 口 径(11.0) 底 高 44.6 底 径 5.5	「コ」の字接合。二次口縫部 は締めこみ、口縫端部は丸くお さまる。頭部に刻印と竹管 文が組み合いで、頭部に 指頭痕。	ヨコハケ→ハケ(7本/ cm)・ナデ 指頭痕→ナデ (5本/1cm)・ナデ 指頭痕→ナデ	指頭痕→ハケ (5本/1cm)・ナデ 指頭痕	石・長(2)少量	○	F9-b3② -c2② -d② -e② -f② -g② 13
186	壺 口 径(26.0) 残 高 10.9	「く」の字接合。二次口縫部 は直立気味で、口縫端部は面 取りしてある。直縫文5条。	ハケ(10本/1cm) →ナデ	マメツ	粗 石・長(1~3) 多 量	△	F9-c4① -d①
187	壺 口 径(25.4) 残 高 7.5	直立する短い二次口縫部。口 縫端部はナデ凹み、「く」の 字接合。	ハケ→ヨコナデ	指頭痕(マメツ)	石・長(3)多量	○	F9-a3①
188	壺 口 径 23.6 残 高 25.3	直立する短い二次口縫部。口 縫端部はナデ凹み、「く」の 字接合。赤色顔料。	ハケ(5本/1cm)	ハケ(10本/1cm)	石・長(1~4)	○	F10-b4① 13
189	壺 口 径(19.6) 残 高 9.0	「く」の字接合。二次口縫部 は直立し、口縫端部は面をな す。接合部は外方にタガ状に 突出する。	ハケ(4~5本/1cm) →ナデ	指頭痕→ナデ	石(1~3)	○	F10-c2①

## 出土遺物観察表

SX5 出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
190	壺	口 径 (18.0) 残 高 7.7	直立気味の二次口縁部。口縁端部は面をなす。腹部に貼付突帯。「く」の字接合。	ハケ(5本/1cm) →ナデ	指頭痕→ナデ	石(1)	○	F9-c1①	
191	壺	口 径 (18.0) 残 高 5.8	「く」の字接合。口縁端部は面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	石(1~3)・ウンモ	○	F9-b1②	
192	壺	口 径 (18.4) 残 高 6.0	「く」の字接合。二次口縁部は直立し、口縁端部は面をなす。	指頭痕→ナデ	ナデ	長(5)	○	F9-c3①	
193	壺	口 径 (16.8) 残 高 8.4	「く」の字接合。二次口縁部は短く口縁端部は面をなす。	ハケ(5本/1cm) →ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1)	○	F9-b3②	
194	壺	口 径 (14.4) 残 高 9.9	「く」の字接合。二次口縁部は短く、口縁端部はあまり面をなす。	ハケ(9本/1cm) →ナデ	指頭痕→ハケ→ ナデ	石・長(1~3)・金	○	F9-c5③	
195	壺	口 径 (14.0) 残 高 3.8	「く」の字接合。口縁端部は面をなし、接合部はやや下方に張張している。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~1.5) 金	○	F9-c1③	
196	壺	口 径 (12.8) 残 高 4.6	「く」の字接合。口縁端部は面をなす。	ナデ	ナデ	石・長(1~2)	△	F9-b2④	
197	壺	口 径 14.4 残 高 7.9	「く」の字接合。二次口縁部は直立気味で口縁端部は面をなす。	ハケ(10本/1cm)	指頭痕→ハケ	石・長(1~2)	○	F9-a2④ -b2⑤	
198	壺	口 径 (13.2) 残 高 4.8	複合口縁壺。二次口縁部は内傾し、端部は面をなす。	ナデ	ヨコナデ	石(1~2) 金	○	F9-c2④	
199	壺	口 径 (17.4) 残 高 3.4	複合口縁壺。二次口縁部は短く内傾する。	ヨコナデ ハケ	ハケ→ナデ	石・長(1~2)	○	F9-b3④	
200	壺	口 径 (16.0) 残 高 4.9	複合口縁壺。「く」の字接合。	マメツ	マメツ	石(1~2)	○	F9-b3④	
201	壺	口 径 (16.2) 残 高 10.0	複合口縁壺。二次口縁部は直立気味に立ち上がる。	マメツ	マメツ	石・長(1~5)	○	F9-d1	
202	壺	口 径 (15.6) 残 高 4.9	複合口縁壺。「く」の字接合。	マメツ	マメツ	石(1~3)	○	F9-h1④	
203	壺	口 径 (14.2) 残 高 4.0	複合口縁壺。「く」の字接合。 一次口縁部は内傾し、端部は面をなす。	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ	石(1~2) 金	○	F9-c1④	
204	壺	口 径 (12.0) 残 高 5.3	複合口縁壺。「く」の字接合。ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	石・長(1)	○	F9-c2④		
205	壺	口 径 (15.4) 残 高 6.9	複合口縁壺。「く」の字接合。 二次口縁部は直立し、端部は面をなす。	ハケ→ヨコナデ ハケ→ヨコナデ	(回)ヨコナデ ハケ→ヨコナデ	石(1~2)	○	F9-c4④	
206	壺	口 径 (14.6) 残 高 6.6	複合口縁壺。「く」の字接合。 接合部はタガ状に突出する。	指頭痕→ヨコナデ	(回)ヨコナデ ●指頭痕→ ヨコナデ	石・長(1~3) 金	○	F9-c4	
207	壺	口 径 (12.0) 残 高 2.9	複合口縁壺。「く」の字接合。 口縁部に3条の沈線。口縁部は直立気味に立ち上がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	長(1)	○	F9-a3 -b4④	
208	壺	口 径 (15.4) 残 高 7.8	複合口縁壺。「く」の字接合。 口縁部は直立気味に立ち上がる。二次口縁部はタガ状に突出する。	ハケ→ヨコナデ ハケ→ナデ	(回)ヨコナデ ナデ	石・長(1~3)	○	F9-c1④	
209	壺	口 径 (17.4) 残 高 3.0	複合口縁壺。口縁部は直立気味に立ち上がる。二次口縁部は外側に三角文か。	ナデ	ナデ	石・長(1~2)	○	F9-c2④	

## 出土遺物観察表

SX 5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		胎土	焼成	備考	図版	(6)
				外面	内面					
210	壺	口径(16.0) 残高 4.6	短い口・通常の單口縁部。	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	石・長(1~2)	○	F9-b4①		
211	壺	口径(13.0) 残高 3.8	外反する口縁部。	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	石・長(1~3) 全	○	F10-a5②		
212	壺	口径(12.0) 残高 3.5	大きく外反する口縁部。	ヨコナデ	ハケ・ナデ	石・長(1~2)	○	F10-c3		
213	壺	残高 12.6	扁球形の体部。頭部は短く内傾し、口縁部は欠損する。	ヨコナデ (ヨコナデ (ヨコナデ 指痕痕 指痕痕・ナデ	佛シボリ痕 指痕痕 指痕痕・ナデ	石・長(4)	○	F10-c2③		
214	壺	口径(7.2) 残高 7.8	長頭部の口縁部片。タテ刷毛後に細く浅い多条の直線文。 口縁部は頭をなす。	ヨコナデ、タテ ナデ、タテハケ	ヨコナデ	石・長(1~3)	○	F9-d3④		
215	壺	口径(11.4) 残高 26.5 底径 5.4	肩部の張りが強く、直立気味の頭部にわずかに外側する口縁部。側部下に焼成前縫割。	ヨコナデ (ヨコナデ (ヨコナデ ハケ (ハケ (ハケ・ナデ	ハケ (ハケ (ハケ・ナデ	4・長(3)	△	F9-b4⑤ F9-c4⑥ F9-c5⑦	14	
216	壺	底径 4.4 残高 16.0	扁球形の体部。底部はやや丸みをもつ。刷毛調整後に縫割跡。	ハケ ヨコナデ	指痕痕、ハケ	石・長(2) ウンモ	○	F9-a3⑧ F9-b3⑨	14	
217	壺	残高 14.9	肩部の張りがやや弱い長い胴部。	ハケ(7本/1cm)	指痕痕→ナデ	石・長(2) ウンモ	○	F9-a3⑩		
218	壺	残高 7.0	肩部片。	ハケ(10本/1cm)	指痕痕 タテハケ (10本/1cm)	石・長(3) 多量	△	F9-b4⑪		
219	壺	残高 8.1	扁球形の体部下半。	ハケ・ミガキ	ハケ、ナデ (9本/1cm)	石・長(5) ウンモ	○	F9-b2⑫		
220	壺	残高 6.1	長頭部の体部。中位は内傾して立ち上がり、胴上位と中位ミガキ・ナデに加縫割。	ミガキ・ナデ	ナデ	4・長(1) 少量	○	F9-b2⑬ F9-c4⑭	14	
221	壺	口径(17.0) 残高 27.3	外側で長い頭部に、外反する口縁部。山根横部は頭をなす。 頭高10cmを越える大型品。	ヨコナデ (ヨコナデ ヨコナデ ミガキ	指痕痕 (ヨコナデ 指痕痕 (6本/1cm) マメツ	4・長(1) 全	△	F10-c1⑯	14	
222	壺	口径(14.0) 残高 6.9	山根部片、ゆるやかに外反する口縁部。	ハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	石・長(0.5~1)	○	F10-a1⑰		
223	壺	口径(13.0) 残高 7.4	口縁部片。	マメツ	タテハケ (3本/1cm)	石・長(1~2)	○	F9-c4⑱		
224	壺	残高 2.5	肩部片。焼成前縫割。	ナデ	指痕痕	石・長(1)	○	F9-c3	15	
225	壺	残高 2.8	肩部片。焼成前縫割。	マメツ	マメツ	石・長(3) 多量 全	△	F10-c3⑲	15	
226	壺	残高 3.1	肩部片。焼成前縫割。	マメツ	マメツ	石・長(2)	△	F9-c2	15	
227	壺	残高 4.6	肩部片。焼成前縫割。	マメツ	マメツ	石・長(3) 多量	△	F10-c1⑳	15	
228	壺	残高 4.9	肩部片。焼成前縫割。	マメツ	マメツ	石・長(3) 多量 全	△	F10	15	
229	壺	底径(7.0) 残高 9.8	わざかに立ち上がりをもつ平底。黒斑。	ナデ	指痕痕 ケズリ	石・長(4) 多量	△	F9-c4⑳		

## 出土遺物観察表

SX5 出土遺物観察表 土製品

(7)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
230	壺	底径 6.0 残高 12.5	わずかに立ち上がりをもつ平底。胴下半に焼成前縫跡。	●ハケ(8本/1cm) ◎指頭痕 ヨコナダ	指頭痕	石・長(3)多量 金	○	F9-b1⑤	15
231	壺	残高 9.5	胴下半に焼成前縫跡。	ナデ・ケズリ	ナデ	石・長(3)多量 金	△	F9-a1⑤	15
232	壺	底径 (8.6) 残高 4.6	厚みのある平底。	●ハケ→ミガキ +ナデ ■ナデ	ヨコハケ→ナデ (4本/1cm)	石・長(5) 金	○	F9-c2②	
233	壺	底径 (4.4) 残高 4.8	厚みのある平底。底部付近に ナデ	ハケ(6本/1cm)	指頭痕・ヨコナ デ	Li・長(2)多量 金	○	F9-c1⑤	15
234	壺	底径 (4.0) 残高 3.1	厚みのある平底。底部付近に 焼成前縫跡。	指頭痕・ナデ	マメフ	石・長(2)多量	△	F9-c1	15
235	壺	底径 3.6 残高 3.9	厚みのある平底。底部付近に 焼成前縫跡。	ハケ→ナデ (5本/1cm)	指頭痕	石・長(3)多量 金	○	F9-b1⑦	15
236	壺	底径 (6.4) 残高 2.1	やや立ち上がりをもつ平底。 底外面に焼成前縫跡。	ハケ(10本/1cm)	ハクリ	石・長(2)多量	△	F9-b3⑤	15
237	壺	底径 (7.4) 残高 4.2	やや立ち上がりをもつ平底。	ケズリ	ハケ(6本/1cm) +ナデ	石・長(2)・金	○	F9-a1	
238	壺	底径 6.0 残高 4.9	立ち上がりをもち、厚みのあ る平底。	ハケ(10本/1cm) +ナデ	ハクリ	石・長(2)	○	F9-b3⑥	
239	壺	底径 6.0 残高 13.7	底部はやや立ち上がりをもつ 平底。胴部は球形。下半に焼 成前縫跡。	ハケ(13本/1cm)	指頭痕→ナデ	石・長(4)・金	○	F9-c2⑥	15
240	壺	口径 (18.8) 残高 3.8	口縁部は上下に拡張され、 直線文4条。外來系。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3)	○	F9-c2	
241	壺	口径 (14.0) 残高 18.8	長縫跡。肩部が膨らむ部に、長い凹 凸の跡跡。口縁は人字くぼり外反。 直線文4条。外來系。	●ヨコナデ ■ヨコナデ ●シボリ痕 ■指頭痕・ケズリ	ヨコナデ シボリ痕 ■指頭痕・ケズリ	密・石・長(2)	○	F9-a1① F9-a2④	14
242	壺	口径 17.0 残高 39.7 底径 (6.5)	長縫跡。部は張り、近部はや や小さく外反する口縁。直 線文4条。外來系。	●ヨコナデ ●ハケ(11本/1cm) ●シボリ痕 ●指頭痕→ナデ	ヨコナデ ●ハケ(11本/1cm) ●シボリ痕 ●指頭痕→ナデ	石・長(4)・ウンモ	○	F9-a3③ F9-a3④ F9-a4④	14
243	鉢	口径 (14.6) 残高 6.2	ゆるやかに外反する口縁。口 縁部はあまり圓をなす。	●ハケ→ヨコナデ ■ミガキ	●ハケ→ヨコナデ ■ヨコナデ	石・長(4)多量	○	F9-a2③	
244	鉢	口径 (5.2) 器高 8.7 底径 5.2	体部はやや内湾し、口縁部 は丸くおさめられている。直 口縁。平底。	(直)シボリ痕 (直)指頭痕	指頭痕→ナデ	砂・多量	○	F9-c1⑤	
245	鉢	口径 (11.2) 残高 6.6	ゆるやかに外反する口縁。口 縁部はあまり圓をなす。	●ハケ→ヨコナデ ●指頭痕・ハケ ●ハケ	●ハケ→ヨコナデ ●指頭痕・ハケ ●ハケ	石・長(2)多量	○	F9-b3⑥	
246	鉢	口径 (15.8) 器高 14.1 底径 9.6	体部はやや内湾し、口縁部 は丸くおさめられている。直 口縁。平底。	●ハケ ●ハケ→ナデ	ハケ (6本/1cm)	石・長(2)多量	△	F9-a1⑤	16
247	鉢	口径 (15.4) 残高 6.9	ゆるやかに外反する口縁。口 縁部は丸くおさめられている。	指頭痕→ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(3)多量	○	F9-d2④ -d3④	
248	鉢	底径 5.8 残高 8.5	くびれをもつ平底。	●マメフ ◎指頭痕	ハケ (12本/1cm)	石・長(2)多量	△	F9-b3⑥	
249	鉢	底径 (4.3) 残高 2.3	くびれをもつ平底。	●ハケ→ナデ ●ナデ	指頭痕→ナデ	石 (1)	○	F9-e4④	

## 出土遺物観察表

SX 5 出土遺物観察表 土製品

(8)

番号	器種 法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成 備考	図版
			外 面	内 面			
250	鉢 底径(3.0) 残高 4.0	くびれをもつ平底。 脚付鉢の脚部。脚端部は丸く おさめられている。焼成前穿孔 孔4万個。	磨マツフ 磨ミガキ (直面)ナデ	磨マツフ (直面)ナデ	石・長(1)・ウンモ	○ F9-bM①	
251	鉢 底径(17.6) 残高 2.7	脚付鉢の脚部。脚端部は丸く おさめられている。焼成前穿孔 孔4万個。	ハケ→ミガキ	ハケ (マツフ)	石・長(2)・多量	○ F10-cI③	
252	高環 口径(31.2) 残高 4.8	环部。有段。口縁は大きく外 反し、口縁端部は面をなす。	指頭痕→ミガキ →ナデ	ナデ	石・長(2)・ウンモ	○ F9-bM① ②	
253	高環 口径 22.1 残高 6.3	环部。有段。段から直立した もので外反する口縁。口縁端部 は面をなす。	指頭痕→ハケ (9本/1cm)→ナデ	指頭痕→ハケ→ ナデ	石・長(2)	○ F10-c2②	
254	高環 残高 7.9	环部片。有段。大きく外反す る口縁。口縁端部の形態は欠損 のため不明。	ハケ(8本/1cm) →ナデ	ハケ(5本/1cm) →ナデ	石・長(2)・少量	○ F9-bM③	
255	高環 口径(20.2) 残高 6.4	环部片。有段。外反する口縁。 口縁端部は面をなし、やや下 方に屈曲。焼成前刻溝。	ナデ	ナデ	石・長(3)	△ F9-b -c4	
256	高環 口径 26.0 底径(16.9)	様をもって外反する口縁。 部は圓をなす。焼成前穿孔5 万個。	②ハケ→ミガキ ④指頭痕・ハケ→ナデ (直面)ナデ ⑤ハケ→ナデ	②ハケ→ナデ ④指頭痕・ナデ 全 ⑤ハケ→ナデ	石・長(2)	○ F9-aM① 16	
257	高環 残高 12.2	环部に有段。焼成前穿孔4万 個。	マツフ	④ミガキ・ナデ 布目痕	石・長(3)	△ F9-bM③	
258	高環 口径(19.8) 残高 11.8	外反する口縁。有段。口縁端部 は圓をなす。焼成前穿孔5 万個。	②指頭痕→ナデ ④ナデ (直面)ナデ	②指頭痕・ナデ ④ナデ ⑤指頭痕→ハケ→ナデ	石・長(3)	○ F10-bM②	
259	高環 残高 3.8	环部片。段をもって外反する 口縁。口縁端部の形態は欠損 のため不明。	ハケ・ナデ	ミガキ	石・長(2)	○ F10-cM①	
260	高環 残高 10.7	焼成前穿孔。	④ハケ→ナデ ⑤ミガキ	磨マツフ 磨シボリ痕・ 指頭痕・ナデ	石・長(2)	○ F9-b④	
261	高環 残高 8.1	焼成前穿孔5方向か。	マツフ	マツリ シボリ痕	石・長(2)・多量	△ F9-c3	
262	高環 残高 14.8	脚部片。円板充填技法。	ナデ	シボリ痕・指頭 痕 ナデ	石・長(2) ウンモ	○ F9-bM③	
263	高環 残高 8.7	环部の底部は充填による。	ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(1) 珍	○ 游十差风 不 明	
264	高環 底径(11.8) 残高 6.9	細い脚部。縮端部にあまい面 をなす。焼成前穿孔。	布目痕か	シボリ痕→ナデ	石・長(4)	△ F9-cM③	
265	高環 底径(19.4) 残高 15.0	焼成前穿孔5方向か。	マツフ	④シボリ痕・ナデ 布目痕	石・長(2)	△ F9-c3	
266	高環 底径(15.0) 残高 2.6	大きく外反する脚部。縮端部 は丸くおさめられている。焼 成前穿孔。	マツフ	マツフ	石・長(3)	△ F10-bM② -M④	
267	高環 底径(18.0) 残高 3.4	大きく外反する脚部。縮端部 は面をなす。焼成前穿孔。	マツフ、ヨコナデ	マツフ	石・長(2) ウンモ	△ F9-c3	
268	高環 底径(13.0) 残高 7.7	焼成前穿孔。縮部面取り。	ハケ→ミガキ ナデ	シボリ痕・指頭痕 ナデ	石・長(3) ウンモ	○ F9-bM③	
269	高環 口径(29.2) 残高 6.7	大きく外反する口縁。口縁端 部は下方に垂下(屈曲)させ て縫間に複線3条を施す。	(直面)ハケ→ナデ (直面)ハケ・ミガキ →ナデ	(直面)ハケ→ミガキ →ナデ	石・長(1)	○ F9-bM② -M④	

## 出土遺物観察表

SX5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
270	高環	底径(21.0) 残高 3.6	縦部片。有孔。 焼成前穿孔。	マメツ	マメツ	石・長(3)	△	F9-c4①	
271	器台	口 径 46.8 器 高 23.1	斜面光弧の三脚式。 焼成前穿孔(4方向)。	ハケ→ナデ	口頭部・指頭痕 窓ハケ→ミガキ →ナデ	石・長(1)	△	F10-bl②	16
272	器台	口 径 29.4 残 高 1.65	口頭端面に斜面光弧による三 角文が施されている。	ナデ	ナデ	石・長(3)少量	△	F10-c2③	16
273	器台	口 径 (31.0) 残 高 2.6	2条の半段竹管文。	(左面)指頭痕→ナデ ②ナデ	ミガキ→ナデ	石・長(2)・ウンモ	○	F9-c4	16
274	器台	底 径 (28.6) 残 高 3.7	大きく外反する縦部。縦部 はナデのため上方にやや膨張 している。	指頭痕→ナデ	ナデ	青 石(1)	○	F9-b2④	
275	器台	底 径 (19.6) 残 高 5.2	底部。穿孔が施されていたか もしれない。	マメツ ヨコナデ	指頭痕	石・長(2)	△	F9-b3⑤	
276	器台	底 径 (28.0) 残 高 4.4	底部。5条の沈線。	ヨコナデ	ヨコナデ→ケズ リ	石・長(2) 金	○	F9-t1	16
277	支脚	底 径 9.3 残 高 12.3	受部は、「じ」字状に傾斜す る。	(左面)ナデ ②指頭痕→ナデ 木(1cm)→ナデ	シボリ痕 指頭痕→ハケ(7 木(1cm)→ナデ	石・長(3)	○	F9-c4①	
278	支脚	受鉄(10.2) 残 高 9.5	中空。受部は斜めにカットさ れる。	指頭痕→ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(3) ウンモ	○	F9-b3⑤	

SX5 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	遺存状態	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
279	砥 石	完 存		9.0	5.8	4.8	256.6	F9-c 3	16
280	砥 石	完 存		4.5	3.7	3.0	81.6	F10-c 2	16

表3 SR1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
281	甕	口 径(22.6) 残 高 13.5	口縁部は短く外反し端部は面 取り。 肩部の振りは弱い。	ヨコハケ(12本/1 cm)→ナデ→ミガ キ ②指頭痕→ナデ	②指頭痕→ハ ケ→ナデ ③指頭痕→ナデ	石・長(4) ウンモ	○	H10	
282	甕	口 径(24.2) 残 高 4.1	口縁部は「く」の字に外反し 端部は面取り。	指頭痕→ハケ→ ナデ	ヨコハケ→ナデ (6本/1cm)	石・長(2) ウンモ	○	E 4	
283	甕	口 径(20.6) 残 高 5.3	ゆるやかに外反する口縁部。 口縁端部は面をもつ。	マメツ	マメツ	石・長(4) ウンモ	△	H 8	
284	壺	口 径(29.0) 残 高 3.6	複合口縫合。「コ」の字接合。	マメツ	マメツ	石・長(3)多量	△	F 7	
285	壺	口 径(22.2) 残 高 4.0	複合口縫合。「く」の字接合。	②マメツ ヨコナデ	マメツ	石・長(1)多量	○	G 8	
286	壺	口 径(15.6) 残 高 4.1	複合口縫合。「く」の字接合。	マメツ	マメツ	石・長(1)多量	△	G 6	

## 出土遺物観察表

SR1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種 法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備考	図版
			外 面	内 面				
287	壺 口径(14.6) 残高 3.6	複合口縫底。『く』の字接合。	ハケ→ナデ (10本/1cm)	指頭痕→ハケ (10本/1cm)→ ナデ	石・長(2)	○	F 7	
288	壺 口径(17.8) 残高 4.1	口縫部の屈曲が強く、短い 口・腹部をもつ。口縫端部に は2条の沈線を施す。	ヨコナデ	ナデ	石・長(1) ウンモ	○	H 10	
289	壺 残高 6.0	複合口縫底の頭部片。斜格子 文の刻目帶帯が焼成時に遮る。	ハケ (5本/1cm)	マメツ	石・長(2)	△	H 7	
290	壺 残高 6.5	複合口縫底。頭部に斜格子文 の刻目帶帯が焼成時に遮る。	ハケ・ヨコナデ (12本/1cm)	ハケ(15本/1cm)	石・長(2)多量	○	F 11	
291	壺 残高 5.1	直立する細長い腹部をもつ。 肩部との境界には6条の沈線 を施す。	ミガキ	ミガキ	石・長(2)	○	F 10	
292	高环 残高 7.2	柱部片。环状部は充填技法で ない可能性がある。	マメツ	指頭痕→ナデ 金	石・長(2)	○	F 9	
293	器台 残高 10.5	焼成前卓脚。4方向か。	マメツ	マメツ 指頭痕	石・長(2) ウンモ	△	F 10	
294	器台 口径(37.0) 残高 2.1	受部片。端部が下方に拡張さ れ、裏面に加縫。	マメツ	マメツ	石・長(1) ウンモ	△	F 7	
295	甕 口径(34.2) 残高 9.4	口縫部片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密	○	G 8	
296	甕 口径(21.8) 残高 8.0	口縫部片。頭部は棱をもって 外反する。	①回転ナデ ②回転カキ呑	①回転ナデ ②回転タタキ	密	○	F 5	
297	坏壺 残高 2.1	床底つまみの行く坏壺。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	G 6	
298	坏壺 口径(8.2) 器高 3.4	床底つまみの行く坏壺。笠形 の天井部分からなだらかに下 り、口縫部は丸く仕上げる。 がたりは、口縫端部より短い。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	G 6	
299	蓋 口径 9.0 残高 1.7	やや圓半笠形の天井部。口 縫端部は細くなる。	回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	密	○	Tr	
300	坏身 口径(12.7) 残高 3.4	立ち上がりは内傾し、端部は 丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	G 6	
301	坏壺 11径(19.8) 残高 2.2	やや扁平な笠形の天井部。口 縫部は下方に屈曲する。受部 は上向外方へのびる。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	E 4	
302	坏身 口径(12.0) 残高 2.8	立ち上がりは内傾し、端部は 丸く仕上げる。受部は上向外方 へのびる。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	当土地区 不 判	
303	坏 口径(12.4) 底径 8.6 器高 3.2	無台壺。口縫端部はやや丸み をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	密 石・長(1)	○	F 6	
304	坏 底径(11.0) 残高 3.4	口縫部は欠損。高台は「ハ」 の字状に開き底面は四面を なす。	①回転ナデ ②回転ヘラ削り	回転ナデ	密 長(1)	○	G 10	
305	坏 底径(11.0) 残高 1.4	口縫部は欠損。高台は「ハ」 の字状に開き底面は四面を なす。	回転ナデ 回転ヘラ削り	ナデ	密	○	G 5	
306	壺 口径(10.6) (延強量) 残高 4.5	丸みのある大升部。口縫端部 は内傾する。	回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ ナデ	密	○	F 5	

## 出土遺物観察表

## SR1出土遺物観察表 土製品

(3)

番号・器種	法量(cm)	形 勵・施 文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
			外 面	内 面				
307 瓦	口 径(10.4) 残 高 4.8	広口壺。腹部は外反し口縁部 部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	密		△	G8	
308 瓦	口 径(13.6) 残 高 5.3	広口壺。腹部は外反し口縁部 部は丸玉形状に仕上げる。	②回転ナデ ⑧タタキ	回転ナデ	密 石・長(1)	○	F9	
309 瓦	口 径(12.8) 残 高 4.7	腹部は外反し口縁部はあい まいな面をもつ。	回転ナデ	②回転ナデ 青タタキ (青海波紋)	密 石(1)	○	F9	
310 瓦	口 径(17.0) 残 高 4.7	腹部は直線的に立ち上がり口 縁部は外反する。端部は拡張 する。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	G6	
311 瓦	口 径(17.8) 残 高 8.8	腹部は直線的に立ち上がり、 口縁部は丸玉状に仕上げ る。	④回転ナデ ⑨タタキ後回転 ナデ	④回転ナデ ⑨タタキ (青海波紋)	密 石・長(2)	○	F5	
312 帽 残 高 5.2	頭部片。肩部に擦痕。	回転ナデ	回転ナデ	密 石・長(1)		○	F7	
313 長腰壺 残 高 5.9	口 径(14.6) 短頸壺。颈部は短く外反する。	②ヨコナデ ⑨タタキ	①ヨコナデ ⑨タタキ	密		△	G9	
314 長腰壺 残 高 6.3	半球形の体部。肩部に刻文 を施す。	⑨ナデ ⑨ヨコナデ	⑨ナデ ⑨ヨコナデ	密		○	G7	
315 長腰壺 残 高 4.5	頸部片。	回転ナデ	回転ナデ	密		○	F7	
316 瓦 残 高 6.3	長颈壺。頸部片。頸部は外反 する。	ヨコナデ	ヨコナデ→指揮 痕	密 紗		○	F4	
317 高坏 残 高 9.9	口 径(11.1) 無蓋、長脚二段透かし。透か しは長方形。	回転ナデ	④回転ナデ シボリ痕	密		○	F5	
318 高坏 底 径 9.8 残 高 5.5	低脚。標記は大きくなりき。 脚端部は下方にわずかに屈曲 する。	回転ナデ	回転ナデ	密		○	G9	
319 高坏 底 径 11.8 残 高 13.8	長脚。外面に自然釉。無蓋。	回転ナデ	回転ナデ	密		○	G6	
320 甌 口 径 12.7 器 高 17.9	口部は外反した後屈曲し、口 縁部は外反気味に深く。肩球 形の体部。	回転ナデ	④回転ナデ 密回転へ前り 長(4)	密		○	G7	17
321 ふいご 長さ 4.2 幅 2.9 厚さ 2.1	大きく欠損する。外面に氣泡 が残る。鉄滓が付着する。	指頭痕、ナデ	ナデ			○	H9	17
322 ふいご 長さ 5.1 幅 4.4 厚さ 2.7	大きく欠損する。	指頭痕、ナデ	ナデ			○	H9	17

## SR1出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	遺存状態	法 量				備 考	図版
			材 質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
323	鐵 淚	一部欠	鉄	6.2	5.7	2.8	94.7	F 3 17

## 出土遺物観察表

表4 SX13 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備考 因版
				外 面	内 面			
324	甕	口 径(19.0) 残 高 4.2	ゆるやかに外反する口縁部。	(回転)ヨコナデ (回転底)ヨコナデ (回転)ハケ	(回転)ハケ→ヨコナデ (回転)ナデ	石・長(1)	○	
325	切削器	口 径 13.0 器 高 42.5	定形品。口縁部は直立し、端部は尖り気味に丸く仕上げる。半球形の体部。	(回転)ナデ (回転)タキ→ナデ (回転)ケズリ→タキ (回転)タキ	ヨコナデ	密	○	17
326	坏身	口 径(12.6) 残 高 2.3	たらあがりは短く内傾し、受部は水平にのびる。	マメツ	マメツ	長(1)	△	
327	高坏	残 高 3.4	脚部は大きく外反する。	マメツ	マメツ	密	△	

表5 SD11 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備考 因版
				外 面	内 面			
328	甕	口 径(18.4) 残 高 5.2	口縁部は外反し、口縁端部分でやや垂れ下がる。口縁端部に接をなす。	(回転)回転ナデ (回転)カキ日	回転ナデ	密	○	F 5
329	甕	口 径(17.4) 残 高 4.2	口縁部は外反し、口縁端部は内傾し内面に接をなす。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	E 4
330	甕	口 径(20.4) 残 高 7.3	頭部は後をとして扁曲し、腹部は外反する。口縁端部は内傾する面をなす。	(回転)ナデ (回転)タキ→目転ナデ	回転ナデ	密	○	E 5
331	坏	底 径(10.8) 残 高 1.7	高台付坏。高台。	回転ナデ マメツ	マメツ	石・長(1)	△	E 4
332	坏	底 径(11.6) 残 高 1.6	高台付。高台は輪高台、「ハ」の字状に開く。	回転ナデ ※回転ヘラ切り	ナデ	密	○	F 5
333	坏	底 径(10.8) 残 高 3.2	高台付。体部は直線的に立ち上がる。 高台は輪高台。	回転ナデ 指ナデ	指ナデ	密	○	E 4
334	坏	底 径(7.0) 残 高 2.2	高台付。	回転ナデ ※回転糸切り	回転ナデ	長(1)	○	E 5
335	坏	底 径(7.4) 残 高 1.6	高台付。	回転ナデ ※ナデ	ナデ	密	△	F 4
336	坏	底 径(6.6) 残 高 2.3	平底の底底部から斜め上方に直線的に立ち上がる。	回転ナデ	指ナデ	密	○	E 4
337	坏	底 径(10.0) 残 高 1.6	無高台。体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。	回転ナデ。ナデ	指ナデ	石・長(1)	△	F 4
338	皿	口 径(12.8) 器 高 1.6 底 径(9.4)	体部は内凹して立ち上がり口縁部は外反する。	マメツ	マメツ	密	△	E 5
339	坏	口 径(12.7) 器 高 4.0 底 径 6.0	体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。	(回転)ナデ (回転)ヘラ切り	回転ナデ	密	○	E 4
340	瓦器等	口 径(15.8) 器 高 2.7	口縁は外反し口縁は内凹する。	横ナデ、指頭底 (回転)ヨコナデ (回転)ミガキ	指ナデ	密	○	D 3
341	皿	口 径(8.0) 器 高 1.5 底 径 4.6	体部は外反する。	①回転ナデ ②回転糸切り	回転ナデ、ナデ	密	○	F 4

## 出土遺物観察表

SD11 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成備考	図版
				外面	内面			
342	鉢	口径(18.6) 残高 5.9	体部は内反し口縁部は玉縁状に仕上げる。	ヨコナデ	回転ナデ	密	○ E 4	
343	壺	口径(46.6) 残高 6.0	龜山焼。口縁端部はナデ凹む。	回転横ナデ (周)タカキ	ナデ	石-長(1)	○ F 5	
348	ふいご	長さ 3.6 幅 3.6 厚さ 2.0	大きく欠損。羽口片。気泡残る鐵洋付着。	指頭痕、ナデ	ナデ		○ F 5	
349	ふいご	長さ 8.5 幅 5.3 厚さ 2.5	一部欠損。羽口片。気泡残る鐵洋付着。	指頭痕、ナデ	ナデ		○ F 5	

SD11 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
344	勾玉	完存	硬玉	4.0	2.4	1.25	13.7	E 4	18
345	椎状石製品	ほぼ完存		5.15	3.4	2.4	57.0	D 4	18

SD11 出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
346	棒状	下平欠	鉄	4.9	3.0	1.7	18.8	F 5	18
347	タガネ状	欠	鉄	4.3	1.8	1.1	19.3	F 4	18
350	鉄 淚	完存	鉄	6.9	9.2	3.3	197.7	E 1	18
351	鉄 淌	完存	鉄	7.3	8.9	3.0	176.2	F 5	18
352	鉄 淌	完存	鉄	6.4	6.7	4.0	148.9	E 4	18
353	鉄 淌	一部欠	鉄	5.6	6.4	1.8	57.5	E 4	18
354	鉄 淌	完存	鉄	3.8	4.5	2.4	40.0	E 4	18
355	鉄 淌	完存	鉄	4.2	4.4	2.3	40.4	F 5	18
356	鉄 淌	完存	鉄	2.9	4.3	1.8	30.0	F 5	18
357	鉄 淌	完存	鉄	3.8	4.6	3.5	40.8	F 4	18
358	鉄 淌	完存	鉄	3.7	5.4	3.0	49.5	F 4	18

表6 SK出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成備考	図版
				外面	内面			
359	皿	底径(6.8) 土師皿の底部。体部は外反する。 残高 0.6	(周)マツツ (周)糸切り	マツツ	マツツ	密	△ SK1	
360	環	口径(12.8) 残高 1.7	口縁は外反し、口縁端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	密	○ SK3	
361	環	底径 7.0 残高 1.4	体部は外反する。	ヨコナデ (周)回転糸切り	ヨコナデ	長(1)	△ SK4	

## 出土遺物観察表

表7 SD3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
362	羽釜	口径(23.6) 残高 6.9	瓦質。三足付羽釜の口胴部。 口縁端部より下がった位置に タガが貼りつけられる。	指頭痕→ヨコナデ	指頭痕→ヨコナデ	石・長(1)	○	F10	
363	羽釜	口径(19.0) 残高 5.8	瓦質。三足付羽釜の口胴部。 口縁端部より下がった位置に タガが水平に貼りつける。	指頭痕→ヨコナデ	指頭痕→ヨコナデ	石・長(1)	○	F10	
364	羽釜	口径(19.0) 残高 3.5	瓦質。三足付羽釜の口胴部。 口縁端部より下がった位置に タガが貼りつけられる。	指頭痕→ナデ	ヨコナデ	長(1)	○	F10	
365	羽釜	口径(21.0) 残高 6.5	瓦質。三足付羽釜の口胴部。 口縁端部より下がった位置に タガが下垂して貼りつける。	指頭痕→ヨコナデ	指頭痕→ヨコナデ	石・長(2)	○	F11	
366	羽釜	残高 5.6	瓦質。三足付羽釜の口縁部片。	指頭痕→ヨコナデ	ヨコナデ	密	○	F10	
367	羽釜	残高 3.1	土師質。三足付羽釜の口縁部 片。口縁端部より下がった位置に タガが貼りつけられ、その周囲 は丸く仕上げられている。	マメツ	ヨコナデ	石・長(1)	△	F10	
368	羽釜	残高 6.8	瓦質。脚の接合部。	指頭痕→ナデ	ヨコナデ	石・長(1)	○	F10	
369	羽釜	残高 7.8	土師質。脚の接合部。	指頭痕→ナデ	マメツ	石・長(2)	○	F10	
370	羽釜	残高 13.6	土師質。脚部。	指頭痕→ナデ	ナデ	密	○	F10	
371	羽釜	残高 4.5	土師質。脚端部。	マメツ		石・長(1)	△	F10	
372	羽釜	残高 5.9	土師質。脚部。	ナデ		石・長(1)	○	F10	
373	羽釜	残高 6.5	土師質。脚部。	ナデ		石・長(3)	○	F10	

表8 SD8 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
374	环	底径(5.8) 残高 3.1	土師質。部体は外反して立ち 上がり棱をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ ④回転角切り →板状灰陶	ウンモ	△	E11	
375	羽釜	口径(29.6) 残高 10.8	瓦質。三足付羽釜の口胴部。 口縁端部より下がった位置に タガが貼りつける。從付窓。	ヨコナデ ⑤ヨコナデ ⑥ヨコナデ ⑦ヨコナデ	石(1)	○	G10		
376	羽釜	残高 7.7	瓦質。三足付羽釜の脚部。様 付窓。	ナデ	ヨコナデ	石・長(1)	○	G10	
377	こね鉢	口径 29.4 残高 8.8	東播系こね鉢。口縁部は外反 し、口縁端部は内傾する曲を なす。	ヨコナデ ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1)	○	F10	
378	こね鉢	口径(25.2) 残高 4.0	東播系こね鉢。口縁部は外反 し、口縁端部は内傾する曲を なす。	回転ナデ	回転ナデ	長(1)	○	出土地区 不明	

SD8 出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
379	刀子	完存	鉄	10.2	2.7	1.07	40.0	E11	19

## 出土遺物観察表

表9 V下層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
380	甕	底径 4.0 残高 10.0	くびれをもつ上げ底。	指頭板・ナデ	ケズリ	石・長(1~3)・露 伊	○	F 10	
381	甕	残高 2.8	口縁部。口縁部は面をなす。	マメフ	マメフ	石・長(1)多量	△	E 5	
382	甕	残高 4.7	「コ」の字接合の複合口縁部。	ハケ(7本/1cm) →ナデ	指頭痕→ハケ→ ナデ	石・長(2)	○	F 9	
383	甕	口径(19.0) 残高 4.0	「コ」の字接合。二次口縁部 は直く直立し、口縁端部は丸く仕上げる。	指頭痕	マメフ	石・長(3)	△	F 10	
384	甕	残高 2.9	「コ」の字接合。	ハケ→ヨコナデ	指頭痕・ハケ→ ナデ	石・長(2)・金	○	Tr	
385	甕	口径(14.6) 残高 5.7	「コ」の字接合。二次口縁部 は直く直立する。口縁端部は面をなす。	指頭痕・ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(3)・金	○	F 10	
386	甕	口径(15.0) 残高 5.0	「く」の字接合。二次口縁部 は内傾する。口縁端部は面をなす。波状文3条。	ハケ(8本/1cm) →ヨコナデ	指頭痕→ハケ→ ナデ	石・長(2)	○	E 8 19	
387	甕	残高 4.0	頭部片。貼付文帯。	ハケ(7本/1cm) →ナデ	ナデ	石・長(1~2)多 量	△	F 10	
388	甕	残高 6.3	頭部片。直線文5条、刺突文2段、草體文11条。	ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(2)・金	○	F 10 19	
389	甕	残高 9.0	胴部片。	指頭痕→ナデ	指頭痕・ナデ	石・長(2)	○	E 9	
390	甕	口径 5.0 残高 13.0	平底。胴下半に焼成前線割。 (⑤)ハケ(7本/1cm) (⑥)ナデ	指頭痕	石・長(1~3)多 量	△	E 9		
391	高坏	残高 3.4	坏部片。有段。	ヨコナデ	ハケ(8本/1cm) →ナデ	密・金	○	F 3	
392	高坏	残高 8.5	脚部片。焼成前穿孔4方向。 (≠1.4cm)	マメフ	シボリ痕→ナデ	石・長(2)	△	F 10	
393	高坏	残高 7.3	脚部片。筒状の柱部。	ナデ	⑤マメフ ⑥ナデ	石・長(1)	○	F 8	
394	高坏	残高 6.3	脚部片。裾部へ向けて大き く広がる。上段4方向、下段6 方向の焼成前穿孔(≠0.7cm)。	マメフ	マメフ	石・長(2)・金	○	F 10	
395	器台	残高 9.6	柱部片。直線文6条以1.2段、 焼成前穿孔2段以上。何方向 かは不明。	ミガキ	ハケ→ナデ	石・長(1)	○	F 9	
396	器台	底径(30.2) 残高 7.1	大きめ外反する脚部。裾部 は上方へやや平坦化されてい る。	ハケ(10本/1cm) →ナデ	指頭痕・ハケ→ ナデ	石・長(2)・金	○	F 10	

V下層 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	遺存状態	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
397	石庖丁	ほぼ完存	緑色片岩	9.5	3.8	0.56	34.7	F 8	19
398	石庖丁	1/4	緑色片岩	3.7	4.0	0.51	9.7	E 5	

## 出土遺物観察表

表10 V上層出土遺物観察表 土製品

番号	器種 法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 者	図版
			外 面	内 面				
399	甕 口径(24.4) 残高 8.2	縁をもって外反する口縁部。 口縁端部は丸く仕上げる。	⑤指頭痕 ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1~3) 金	○	F 3	
400	甕 口径(20.6) 残高 5.8	ゆるやかに外反する口縁部。	ハケ(6本/1cm) →ナデ	ハケ(6本/1cm)	石・長(1~3) 金	△	F 9	
401	甕 口径(20.0) 残高 8.8	ゆるやかに外反する口縁部。	⑥ヨコナデ ⑦ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1~3)	△	F 3	
402	甕 口径(16.6) 残高 7.5	直立する颈部に外反する口縁部。 口縁端部はナデ凹む。	①横ナデ ⑧ハケ→ナデ	③ナデ 筋ヶズリ	石・長(1~2)	○	F 9	
403	甕 口径(17.0) 残高 7.3	ゆるやかに外反する口縁部。	⑨(?)ナデ ⑩ハケ(7cm) →ナデ	ハケ(6本/1cm)	石・長(1~2)	○	F 10	
404	甕 口径(20.4) 残高 5.1	口縁部は外反し、口端は外面肥厚する。	マメツ	マメツ	石・長(2)	△	F 3	
405	甕 口径(25.8) 残高 4.4	複合口縁。「コ」の字接合。	マメツ	マメツ	石・長(1~3)	△	G 7	
406	甕 口径(24.0) 残高 4.2	複合口縁。「コ」の字接合。	マメツ	マメツ	石・長(1~3)	△	G 7	
407	甕 口径(23.4) 残高 5.7	複合口縁。「コ」の字接合。 接合部は外方に突出する。	マメツ	マメツ	石・長(1~3) 金	△	G 7	
408	甕 口径(24.0) 残高 4.3	複合口縁。「コ」の字接合。 二次口縁部は直立気味に立ち上がり、外間に波状文を施す。	ハケ・ナデ	ヨコナデ	石・長(1~2) 金	△	F 3	
409	甕 口径(21.0) 残高 4.8	複合口縁。「コ」の字接合。 強いヨコナデにより口端は直立する。	⑥ヨコナデ ハケ→ナデ	④ハケ→ヨコナデ 集ナデ	石・長(1~2)	△	G 7	
410	甕 口径(20.6) 残高 5.8	複合口縁。「コ」の字接合。 接合部は外方にやや突出する。	マメツ	マメツ	石・長(1~2)	△	G 8	
411	甕 口径(19.2) 残高 10.3	複合口縁。「コ」の字接合。 口縁端部面をなす。颈部は矧く直立する。 (3~4本/1cm)	⑤ヨコナデ ⑥ハケ	⑤ヨコナデ 集ハケ (6本/1cm)	石・長(1~4)	△	F 10	
412	甕 口径(13.6) 残高 4.6	複合口縁。「コ」の字接合。 口縁端部面をなす。	⑥ヨコナデ ⑦ハケ→ナデ	ヨコナデ、指頭痕	石・長(1~2)	△	F 10	
413	甕 口径(14.0) 残高 5.1	複合口縁。「コ」の字接合。 口縁端面をなす。	⑤ナデ、指頭痕 ⑦ハケ→ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑦ハケ	石・長(1~3)	△	F 9	
414	甕 口径(11.6) 残高 6.3	複合口縁。「コ」の字接合。 二次口縁部は強く内側する。	⑥ヨコナデ ⑦ハケ→ナデ	⑤ヨコナデ ⑦ハケ	石・長(1~2)	△	F 3	
415	甕 口径(18.6) 残高 3.4	複合口縁。「く」の字接合。	⑤マメツ ⑥ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~2) 金	△	G 8	
416	甕 口径(16.0) 残高 4.0	複合口縁。「く」の字接合。	ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ハケ→ヨコナデ	石・長(1~2) ウンモ	△	G 7	
417	甕 口径(16.0) 残高 6.2	複合口縁。「く」の字接合。 一次口縁は長く外反し、二次口縁は近く内側する。	⑥ヨコナデ ⑦ハケ→ヨコナデ ⑧ヨコナデ	⑤ヨコナデ ⑥ハケ→ヨコナデ ⑧ヨコナデ	石・長(1~2) 金	△	F 11	
418	甕 口径(14.0) 残高 6.6	「く」の字接合。 二次口縁部はやや内凹しながら立ち上がる。 口縁端部は面をなす。	ハケ(6本/1cm) →ナデ	マメツ	石・長(1~3) 小石(5)?	△	F 3	

## 出土遺物観察表

V上層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備 考	(2) 団版
				外 面	内 面				
419	鉢	残高 7.2	ゆるやかに外反する長めの口線。	ハケ(10~11本/1cm)→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1~2)	○	F 3	
420	鉢	口 径 (15.4) 残 高 5.3	ゆるやかに外反する口線。口縁部は底をなす。	指頭痕・ハケ(7本/1cm)→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(2)・金・多量	○	F 9	
421	鉢	口 径 (8.0) 残 高 5.4	内湾する直口線。	ハケ→ナデ	ハケ(4本/1cm)→指頭痕	石・長(1~2)・金	○	F 11	
422	高坏	口 径 (21.5) 残 高 13.4	外反する口線。有段。口縁部は丸く仕上げる。	ハケ(8本/1cm)→ナデ ハケ→ミガキ→ナデ	ハケ(4本/1cm)→指頭痕・ナデ	石・長(2)・金	○	出土地区不明	
423	高坏	残 高 3.6	坏部。外反する口線。有段。	(左)ミガキ→ナデ (右)ハケ・ミガキ	(左)ナデ (右)ミガキ	石・長(1)・ウンモ少見	○	F 9	
424	高坏 か 盒	口 径 (21.4) 残 高 3.3	山縁端部は丸く仕上げる。有段。	マツフ	ハケ→ナデ	石・長(3)・ウンモ	△	F 4	
425	高坏	残 高 10.5	脚部。三角錐状に広がる柱脚。	マツフ	ハケ(4本/1cm)→ナデ	石・長(2)	○	F 3	
426	高坏	残 高 9.5	脚部。	マツフ	マツフ	石・長(1)少見	△	G 8	
427	高坏	残 高 10.5	脚部。焼成前穿孔5方向。(φ1.4cm)	マツフ	マツフ	石・長(1)多量	△	F 3	
428	高坏	残 高 8.6	脚部。焼成前穿孔4方向か?	ナデ	シボリ痕→指頭痕・ナデ	石・長(3)・ウンモ・少見	○	出土地区不明	
429	高坏	残 高 7.5	脚部。焼成前穿孔4方向。	マツフ	マツフ	石・長(1)・金	△	F 3	
430	高坏	残 高 8.0	脚部片。接合部は円弧充填法。	ナデ	ハケ(4本/1cm)→ナデ	石・長(1)・ウンモ・少見	○	H 9	
431	高坏	残 高 5.8	脚部。裾部へ向けて大きくながる。 焼成前穿孔4方向。(φ1.4cm)	ナデ	シボリ痕→指頭痕・ナデ	石・長(3)・ウンモ	○	F 11	
432	高坏	残 高 6.7	脚部片。焼成前穿孔4方向。(φ1.0cm)	マツフ	マツフ	石・長(3)・金	○	F 3	
433	器台	残 高 7.5	柱部。焼成前穿孔6方向。	ハケ(9本/1cm)→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(2)多量	○	F 10	
434	器台	残 高 10.6	柱部片。焼成前穿孔6方向2段。(φ1.4cm)	ハケ(11~12本/1cm) →ナデ	ハケ(11本/1cm) →ナデ	石・長(3)・ウンモ	○	F 3	
435	支脚	残 高 9.8	指頭痕→ナデ	指頭痕・ナデ	石・長(3)	○	E 10		
436	支脚	残 高 12.4	「U」字状の受部を2ヶもつ。中空。	タタキ→ナデ	シボリ痕・指頭痕・ナデ	石・長(3)・ウンモ	○	F 3	
437	高坏	口 径 (14.0) 器 高 12.2 底 径 (9.5)	やや内湾する口線。口縁端部は面とりされている。三角錐状の柱部に外反する筋部をもつ。	指頭痕・ナデ	ハケ(4本/1cm)→ナデ	青	○	E 8	
438	高坏	口 径 (15.2) 残 高 3.4	ゆるやかに内湾する口線。口縁端部は丸く仕上げる。	ナデ	ナデ	青	○	F 6	
439	高坏	残 高 6.5	脚部。三角錐状の柱部に外反する筋部。	マツフ	シボリ痕	青	△	E 8	

## V上層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
440	壺坏	底 径(12.2) 残 高 4.0	外反する短い縦部。	ナデ	ナデ	密・ウンモ	○	E 3	
441	壺坏	底 径(10.6) 残 高 6.8	外反する縦部。	ナデ	ケズリ	石・長(1)少量	△	E 8	
442	瓶	底 残 高 6.8	把手。上方向にのびる。端部は丸くおさめる。	指頭抜→ナデ	マメツ	石・長(1)	○	G 7	
443	瓶	底 残 高 4.6	把手。横方向に水平にのび、先端部は上方に向かう。端部は丸くおさめる。	指頭抜→ナデ	密	○	E 9		
444	壺蓋	口 径(13.0) 残 高 4.7	扁平な天井部。口や下端すち幅をもち、口縁部は円弧状に下がる。口縁端部は凹西をなす。	④回転ヘラ削り ⑤回転ナデ	回転ナデ	密	○	E 9	
445	壺蓋	口 径(13.6) 器 高 3.8	扁平な天井部。口縁部はやや外反し、口縁端部は丸く仕上げる。	⑥回転ヘラ削り ⑦回転ナデ	回転ナデ	密	○	E 11	
446	壺蓋	口 径(13.0) 器 高 4.3	丸底のある天井部。口縁部はやや外反し、口縁端部はわずかに凹面をなす。	⑧回転ヘラ削り ⑨回転ナデ	回転ナデ	石・長(1~3)	○	出土地区 小 明	
447	壺蓋	口 径(12.0) 残 高 3.1	扁平な天井部。口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く仕上げる。	⑩回転ヘラ削り ⑪回転ナデ	回転ナデ	密	○	G 9	
448	壺蓋	口 径(10.2) 残 高 2.7	扁平な天井部。かえりは短く口縁端部より下がらない。	⑫回転ヘラ削り ⑬回転ナデ	回転ナデ	密・長(2)	○	E 7	
449	壺蓋	口 径(10.0) 残 高 2.7	口縁部は屈曲し、口縁端部はほぼ同じ位置で接地する。	⑭回転ヘラ削り →指頭抜 ⑮回転ナデ→指頭抜	回転ナデ・指頭抜	密	○	E 7	
450	壺蓋	口 径(10.8) 器 高 4.3	扁平な天井部。口縁はやや内溝し口縁で屈曲する。かえりは口縁端部より下がらない。	⑯回転ヘラ削り →ヨコナデ ⑰回転ナデ	回転ナデ	密	△	F 9	
451	壺蓋	口 径(16.8) 残 高 2.1	笠形の大井部。口縁部は下方へ屈曲し、口縁端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	G 4	
452	壺蓋	口 径(13.4) 残 高 4.4	扁平な天井部。口縁部はやや外反し、口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	F 6	
453	壺蓋	口 径(11.8) 残 高 3.9	笠形の大井部。口縁部は外反し口縁端部は丸く仕上げる。	⑱回転ヘラ削り ⑲回転ナデ	回転ナデ	密	○	F 9	
454	壺蓋	口 径(8.6) 残 高 3.2	扁平な大井部。口縁部はやや外反する口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	G 10	
455	壺身	口 径(10.8) 残 高 3.8	たちあがりは内構し、端部は丸く仕上げる。受部は太く本平にのびる。	⑳回転ナデ ㉑回転ヘラ削り	回転ナデ	密・長	○	E 8	
456	壺身	口 径(11.4) 残 高 2.9	立ち上がりは比較的短く、内傾する。端部は丸く仕上げる。受部はやや外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	F 6	
457	环	底 径(6.8) 残 高 3.0	高台の付く环。高台は体部と底部の境界附近に付く。高台は貼り付けた。	㉒回転ナデ ㉓ナデ	回転ナデ	密	○	F 4	
458	环	口 径(14.6) 底 径(10.0) 器 高 3.8	高台の付く环。高台は体部と底部の境界附近に付く。高台は貼り付けた。	㉔ヨコナデ ㉕ヘラケズリ	ナデ	石(1)	○	F 7	
459	环	口 径(15.0) 底 径(10.6) 器 高 4.5	高台の付く环。高台は体部と底部の境界附近に付く。	㉖回転ナデ ㉗ナデ	㉘回転ナデ ㉙ナデ	密	○	G 7	
460	环	口 径(14.1) 底 径(10.2) 器 高 4.3	体部と底部の境は棱をなし、高台は境より内側に付く。	㉚回転ナデ ㉛回転ナデ ㉜回転ナデ ㉝回転ヘラ削り	㉞回転ナデ ㉟ナデ	密	○	F 10	

## 出土遺物観察表

上層出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	種類 法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備考	備考
			外 面	内 面				
461	坏 底径(30.8) 残高 2.4	高台の付く坏。高台接地面は わざかに凹面をなす。	⑤回転ナデ ⑥ナデ・回転ヘナデ ヘ削り		密	○	F 7	
462	壺 口径(23.0) 残高 4.5	頭部は小さく外反し、口縁端 部は丸く仕上げる。口縁はひ ずんでいる。	⑦回転ナデ ⑧カキ目 一回転ナデ	回転ナデ	密	○	F 4	
463	壺 口径(19.0) 残高 5.8	頭部は後をもって外反し、口 縁端部は面をなす。	⑨ヨコナデ ⑩タタキ →ナデ消し	⑪ヨコナデ ⑫タタキ →ナデ消し	密	○	F 10	
464	壺 口径(19.0) 残高 7.7	口縁部の頭部は大きく外反。 口縁端部は丸く仕上げる。	タタキ・回転ナ デ	指頭ナデ・ナデ	長(3)	○	E 9	
465	壺 口径(22.6) 残高 3.9	口縁部は外反し、口縁端部は 丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	F 11	
466	壺 底径(19.8) 残高 7.5	広口壺の口縁部。口縁は外反 する。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	G 8	
467	壺 残高 7.5	長頸壺の頭部。	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	密	○	F 8	
468	壺 残高 8.1	球形の体部。頭部は大きく外 反する。頭部に3~4条の波 状文。	ナデ	参ナデ 参指頭ナデ・ナデ	者	○	F 10	
469	壺 残高 9.7	球形の体部。肩部に肩突文。		⑩回転ナデ ⑪回転ヘラ削り	密	○	E 8	
470	壺 口径(12.2) 残高 9.1	口縁部は棒をもって外反す る。口縁端部は細い。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	F 10	
471	高坏 口径(12.8) 残高 3.8	立ち上がりは内傾し、頭部は 内傾する。受部は水平にのび る。	⑫回転ナデ ⑬回転ヘラ削り	⑭回転ナデ ⑮ナデ	密	○	F 11	
472	高坏 残高 10.75	脚部片。脚部は大きく外反す る。脚部に通し土F 2ヶ所。	回転ナデ	⑯ナデ 参しほり・ナデ・ 回転ナデ	密	○	F 11	
473	高坏 残高 4.1	坏部片。坏部のひずみが大き い。	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	密	○	F 9	
474	高坏 残高 6.1	脚部片。大きく開く脚部。	⑰回転ヘラ削り 参回転ナデ	⑱回転ナデ・ナ デ ⑲回転ナデ	密	○	G 7	
475	高坏 残高 4.7	脚部片。	回転ナデ	ナデ 参シボリ痕	密	○	G 9	
476	高坏 残高 4.4	口縁部欠損。	回転ナデ	⑳ナデ 参回転ナデ	密	○	G 10	
477	高坏 残高 4.4	脚部は大きく外反している。	マメツ	マメツ	密	△	F 9	
478	高坏 底径(9.2) 残高 4.0	低脚。脚部は大きく外反し、 脚端面は、「U」の字状に位 上げている。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	F 10	
479	高坏 底径(7.2) 残高 3.9	低脚。脚部は外方に開き、脚 端部は上下に拡張する。	①回転ヘラヘラ ②回転ナデ 参回転ナデ	③ナデ・回転ナ デ 参回転ナデ	密	○	H 9	
480	高坏 残高 6.1	坏部及び脚部は欠損。脚部は 大きく外反する。	回転ナデ	④ナデ 参回転ナデ	密	○	G 10	
481	高坏 底径(8.6) 残高 6.1	ひずんでいる。脚端部は下方 へ屈曲する。端部は凹面をな す。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	F 9	

## 出土遺物観察表

V上層 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
482	打製石器	完存	サスカイト	3.6	2.4	0.55	4.5	D 8	
483	扁平片刃石斧	1/2	緑色片岩	6.1	2.2	0.65	13.6	E 3	
484	石磨丁	完存	緑色片岩	11.4	4.7	1.55	118.1	G 10	

V上層 出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
485	圓丸状	両端欠	鉄	4.4	7.3	1.5	46.0	G 7	
486	棒状	上・下欠	鉄	2.3	1.15	1.24	3.7	F 10	
487	棒状	一部欠	鉄	3.3	2.5	1.7	10.1	F 3	

表11 IV下層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
488	壺	底径 4.4 残高 3.2	小さい平底。内底面が凹む。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(3)多量	○	G 6	
489	壺	残高 3.3	新格子目文の刻目突唇あり。	ナデ	ナデ	石・長(3)多量	○	E 4	
490	壺	底径 (8.0) 残高 3.0	平底。	マメツ (指頭痕)	マメツ	石・長(2)多量	△	G 6	
491	壺	底径 (7.0) 残高 4.5	平底。	マメツ	マメツ	石・長(3)	○	G 6	
492	壺	底径 (6.8) 残高 2.3	平底。	マメツ	マメツ	石・長(3)	○	E 9	
493	鉢	底径 (3.8) 残高 3.3	くびれの上げ底。小型の裏形 土器の可能性あり。	ナデ (一部ハケ)	ハケ→ナデ	石・長(1)	○	D 4	
494	高環	残高 7.3	脚部片。柱部が円柱状で太く、 中実。長い脚部を持つ。	ナデ (マメツ) (指頭痕)	マメツ (ナデ)	青、赤色粒	○	G 5	
495	高環	残高 8.1	脚部片。柱部が円柱状で太く、 中実。長い脚部を持つ。	ナデ (マメツ)	マメツ (ナデ)	石・長(1)多量	○	G 6	
496	壺	残高 4.2	口縁部。内外ともに後をもち 「く」の字に屈曲。口縁底部 は尖る。	ナデ	ナデ	砂	△	D 4	
497	高環	残高 5.3	三角錐の柱部。	マメツ	マメツ (シボリ痕)	4-L・長(2)	○	G 5	
498	壺蓋	口径 (8.6) 残高 2.3	等形に天井部からなるらかに 下がり、口周部で屈曲。かえ りは短く、口縁部より下が らない。	回転ヘラブズリ (回転ナデ)	回転ナデ	青	○	G 6	
499	壺蓋	残高 4.2	蓋。天井部は丸みを帯びる。 口縁部は反り気味。	回転ヘラ切刃 (未調整) (回転ナデ)	回転ナデ	青	○	F 9	

## 出土遺物観察表

IV下層 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成 備考	回版
				外 面	内 面			
500	环唇	口 径(13.0) 残 高 2.3	口縁部は下内方に屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	密・長(3)	○ H10	
501	环身	口 径(11.5) 容 積 3.9 底 高 8.8	立ち上がりはやや内湾。底部は扁平。口縁部は尖る。	⑤回転ナデ ⑥ナデ	回転ナデ	密・石・長(1)	○ H 8	
502	环身	口 径(11.6) 容 積 3.2 底 高 8.0	立ち上がりは直立し。受部は水平。底部は扁平。	⑤回転ナデ ⑥回転ヘラケズ	⑤回転ナデ ⑥回転ナデ→ナデ	密・長(1)	○ G 6	
503	环身	口 径(8.7) 残 高 3.4	立ち上がりは内傾し、受部は内湾する。	⑤回転ナデ ⑥回転ヘラケズ	回転ナデ	密・長(1)	○ F10	
504	环身	口 径(10.0) 残 高 2.2	口縁は内傾し、受部は水平。	回転ナデ	回転ナデ	密	○ G 9	
505	坏	底 径(10.6) 残 高 2.9	貼り付け高台。高台は底体部より内側につく。	回転ナデ	回転ナデ	密・石・長(1)	○ G 9	
506	坏	底 径(9.0) 残 高 1.3	貼り付け高台。高台は内側につく。	回転ナデ	回転ナデ	密・石・長(1)	○ E 4	
507	坏	底 径(11.0) 残 高 2.1	貼り付け高台。「ハ」の字に開く。底体部より内側につき、環の立ち上がりはゆるやか。	回転ナデ	回転ナデ→ナデ	密	○ D 4	
508	坏	底 径(11.0) 残 高 3.7	貼り付け高台。底体部の縁に焼き、直す。	④回転ナデ ⑤マメフ	回転ナデ	密・移	△ E 4	
509	坏	底 径(12.6) 残 高 4.4	貼り付け高台。直立に下がり内側よりにつく。环部の立ち上がりは急。	回転ナデ	回転ナデ	密	△ E 4	
510	高环	底 径(10.0) 残 高 2.5	貼り付け高台。「ハ」の字に開き、底体部の縁につく。环の立ち上がりは急。	回転ナデ	回転ナデ	密	○ D 4	
511	高环	底 径(12.0) 残 高 1.5	貼り付け高台。底体部の縁につき、「ハ」の字に開く。	回転ナデ	回転ナデ	密	○ E 4	
512	高环	口 径(14.4) 残 高 4.2	無蓋高环。環部の环部。口縁部は尖り気味。	⑤⑥回転ナデ ⑦回転ヘラケズ	⑤⑥回転ナデ ⑦回転ナデ→ナデ	石・長(3)	○ G 9	
513	高环	口 径(10.0) 残 高 3.0	口縁は直線的に立ち上がる。溶部は尖り気味。1条の辺縁がめぐる。	回転ナデ	回転ナデ	密	○ G 9	
514	高环	残 高 3.0	肩部が高环。長脚の高环。	回転ナデ	回転ナデ→ナデ	密 石・長(1)	○ E 4	
515	壺	口 径(21.0) 残 高 3.1	口縁部。ゆるやかに外反する。口縁部は外側に突出する。口縁部は面をもつ。	⑤回転ナデ ⑥回転カキド	回転ナデ	密・石・長(1)	○ G 10	
516	壺	口 径(23.0) 残 高 11.3	口縁～頸部上半分。口縁部はつぶく外反する。口縁部は外側に直線状に肥厚する。四耳壺、又は二耳壺の頸部上半分。頸部前のびれに強い棱を持ち、直しに耳を貼付する。	⑤回転ナデ ⑥平行タタキ →ナデ	⑤回転ナデ ⑥平行タタキ →ナデ	密	○ G 6	
517	壺	口 径(11.0) 残 高 5.3	口縁部は強く外反する。口縁部は内側に突出する。	⑤回転カキド ⑥ナデ	⑤同心円文タタキ →ナデ	密	○ I 8	
518	壺	口 径(17.8) 残 高 5.2	口縁部は強く外反。口縁部は外側は肥厚。	マメフ ⑤平行タタキ	マメフ ⑤同心円文タタキ	密・石・長(1)	△ G 5	
519	壺	口 径(11.0) 残 高 2.8	口縁部は強く外反する。口縁部は内側に突出する。	回転ナデ	回転ナデ	密	△ G 6	
520	壺	底 径(11.0) 残 高 4.0	有脚壺の底部。高台は底体部の縁につき、「ハ」の字に開く。	回転ナデ	回転ナデ	密・石・長(1)	△ F 5	

## 出土遺物観察表

IV下層 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
521	壺	残高 4.3	有台壺の底部と考える。器厚が非常に厚い。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	H10	
522	瓶	底径 (13.6) 残高 5.9	有台壺の底部。底部の縁に「き」、「人」の字に驚く。半埋葬地。年の立ち上がりは急である。	回転ナデ→ナデ ⑧回転ナデ→ナデ	⑥回転ナデ ⑨回転ナデ→ナデ	密	○	G 9	
523	平瓦	長さ 2.5 幅 10.2 厚さ 2.1	小片。(凸面) ナデ	(凹面) ナデ	(凹面) 希目痕	密	○	H 7	
524	碗	底径 (6.8) 残高 1.9	縁袖陶器。割り出しの円盤状高台。軸渠は坏部内外、底部全体に施す。	施袖 ナデ→ミガキ ⑩ナデ→ミガキ ⑪ミガキ	施袖 ⑧ナデ→ミガキ ⑨ミガキ	密・石・灰(1)	○	F 5	
525	壺	底径 (6.6) 残高 1.2	土師質。円盤状に突出した半底。	⑩ヨコナデ ⑪側削ヘラ切り	ヨコナデ→ナデ	密	○	F 5	
526	壺	底径 6.3 残高 1.9	土師質。貼り付け高台。底体部の縁に「人」字につく。断面三角形。	回転糸切り (?) ・板状工具圧痕	マメツ	石・長(1)	△	H 8	
527	壺	底径 (6.0) 残高 1.6	土師質。貼り付け高台。底体部の縁に「人」字につく。底外側に同心円状に凹みが落ちる。	マメツ	ヨコナデ→ナデ	石(1)・少量	○	F 5	
528	壺	残高 0.8	上師質。	⑩ヨコナデ ⑪目輪糸切り	ヨコナデ→ナデ	密・石(1)	○	H 8	
529	壺	口径 (16.3) 器高 3.7 底径 (9.8)	土師質。胸部下部でくぼむ。口縁部はやや内済し、口縁端部は丸い。	⑩マメツ ⑪回転糸切り	マメツ	密・鉛	○	H 8	
530	壺	底径 (7.9) 残高 1.4	土師質。底部の外周が凹む。	⑩ヨコナデ ⑪目輪糸切り	ヨコナデ→ナデ	密	○	H 7	
531	壺	底径 (8.2) 残高 1.1	土師質。	⑩ヨコナデ ⑪回転糸切り	ヨコナデ	石(4)・少量	○	G 8	
532	羽蓋	口径 (25.4) 残高 3.4	土師質。口縁端部にやや垂下した断面三角形のタガがある。	ヨコナデ (指痕)	ヨコナデ	石(2)・少量	○	F 6	
533	羽蓋	口径 (18.6) 残高 4.3	土師質。口縁端部からやや下がった部分に断面三角形のタガがある。	ナデ ハケ痕?	ナデ	石・長(2)	○	F 10	
534	碗	口径 (16.2) 残高 5.4	瓦器。坏部は内済しながら立ち上がる。口縁端部は丸い。和泉型。	⑩ヨコナデ (ナデ) (指痕痕)	ナデ	密・石(1)	○	H 8	
535	碗	底径 (5.0) 残高 1.3	瓦器。貼り付け高台。断面は台形。和泉型。	⑩ヨコナデ 密ナデ	マメツ	密	○	H 8	
536	碗	底径 (4.2) 残高 0.8	瓦器。貼り付け高台。断面は台形。和泉型。	⑩ナデ	ナデ	密・石(3)	○	G 6	
537	すり鉢	口径 (30.0) 残高 2.3	須恵質。口縁端部は断面三角形。東播系。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(2)・少量	○	G 9	
538	すり鉢	口径 (26.9) 残高 4.9	須恵質。朝部は直線的に立ち上がる。口縁端部は下方に垂下。上方が立ち上がる。東播系。	⑩ヨコナデ ⑪ナデ	⑩ヨコナデ 密ナデ	石・長(2)	○	G 9	
539	不明	口径 (17.0) 残高 4.8	須恵器。口縁部と見える。並るやかに立ち上がる須恵。口縁端部は内外両面を持つ。外唇に斜擦文。	回転ナデ	回転ナデ	石(1)・少量	○	E 9	
540	不明	残高 4.4	須恵器。胴部片。	回転カキ目	回転ナデ	長(1)・少量	○	G 7	
541	不明	底径 (15.0) 残高 8.8	須恵器系の瓶、又はすり鉢の可能性あり。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	E 4	

## 出土遺物観察表

## IV下層 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
542	石庖丁	一部欠	緑色片石	3.4	1.4	0.47	2.8	H 7
543	砥石	1/3か		8.3	7.5	5.9	478.0	G 8

## IV下層 出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
544	タガネ状	一部欠	鉄	4.2	2.8	2.7	72.6	F 4
545	棒状	一部欠	鉄	4.0	2.1	1.25	12.1	D 4
546	形態不明	完存	鉄	4.2	1.4	1.4	7.7	G 9
547	形態不明	完存	鉄	5.2	2.5	1.5	21.4	E 4
548	形態不明	一部欠	鉄	3.6	2.9	1.4	15.5	G 5
549	形態不明	完存	鉄	3.7	5.0	1.1	19.3	H 7
550	鉄津	完存	鉄	3.2	4.6	2.45	37.9	E 4
551	鉄津	完存	鉄	4.65	7.0	3.35	115.1	E 4
552	鉄津	完存	鉄	6.5	7.3	2.5	198.9	G 5
553	鉄津	完存	鉄	8.3	10.4	2.9	239.0	G 5
554	鉄津	完存	鉄	4.0	4.2	1.8	21.5	F 4
555	鉄津	一部欠	鉄	2.6	3.2	1.9	15.3	E 4

## 表12 IV上層 出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
556	壺	残高 1.7	口縁端部は下方に垂下する。	◎ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	長(1)・少量	○	F 7	
557	壺	底径 (6.0) 残高 5.4	小さくくびれる上げ底。	◎ハケ→ナデ ◎ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1~3)	○	G 8	
558	壺	底径 (6.6) 残高 5.4	平底。	ハケ→ナデ	◎ハケ ◎指頭痕	(6本/10cm) 石・長(2)・多量	○	G 7	
559	高坏	残高 5.9	脚部片。柱上部に4条の平行沈痕が巡る。	ナデ	ナデ (シボリ痕)	石(1)	○	出土場所 不明	
560	高坏	残高 8.0	脚部片。円孔推定3~4個。光済投げ法。	マメツ	ナデ (シボリ痕)	石・長(1)・多量	△	B 5	
561	不明	底径 (3.8) 残高 3.9	小さな平底。ややくびれる。 小形の类型土器の可塑性あり。	ナデ ◎マメツ	ナデ	青・少	○	出土場所 不明	
562	壺	口径 (11.1) 残高 3.9	口縁は直線的に立ち上がり、 口縁端部は尖る。瓶底で「く」の字形に畳曲す。	マメツ	◎マメツ ◎指頭痕	石(1~3)	△	D 9	

## 出土遺物観察表

IV上層 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土	焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
563	瓶	残高 5.1	瓶の把手。細い舟状を呈する。 貼り付け法で接合。	ナデ	ナデ	石・長(2)多量	○	G 7	
564	杯	底径 (15.0) 残高 2.0	土師質の杯。貼り付け高台。 「ハ」字に開き、底部より内側につく。	マメツ	マメツ	密	○	G 7	
565	坏蓋	口 径 (11.0) 残 高 4.7	天井部は丸みを帯びる。縁は 短く尖る。口縁部は内側に 凹む。	回転ナデ ④回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ	回転ナデ	密・石(2)	◎	出土地区 不明	
566	坏身	残 高 3.6	受部は削い。器壁厚い。 ④回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	○	F 6		
567	坏身	口 径 (12.0) 残 高 3.0	立ち上がりは内傾し、受部は 内溝する。受部の内側に沈線 が1条ある。	回転ナデ ④回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	△	F 5	
568	坏身	残 高 1.7	立ち上がりは内傾する様子。 受部は内溝する。受部の内側に沈線 が1条ある。	回転ナデ	密・石(1)	○	出土地区 不明		
569	坏	底径 (12.8) 残 高 2.2	貼り付け高台。底部の内側 につき「ハ」字に開く。坏は ④回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ ゆるやかに立ち上がる。 →ナデ	回転ナデ ④回転ナデ ⑤ナデ	密・鉢	◎	出土地区 不明		
570	高坏	残 高 1.5	有蓋高坏の蓋のつまみ。中央 部がやや突出する。	回転ナデ	ナデ	密	○	B 5	
571	高坏	残 高 1.4	有蓋高坏の蓋のつまみ。中央 部がくぼむ。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	E 5	
572	高坏	底径 (9.0) 残 高 4.3	還脚高坏の脚部。方形の通し 孔を有す。	回転カキ目	回転ナデ	長(1)少量	○	H 7	
573	高坏	残 高 3.0	長脚高坏の脚部。坏底部はや や丸底気味。方形の通し孔を 有す。	回転ヘラケズリ →ナデ	回転ナデ	密・鉢	○	F 6	
574	高坏	残 高 3.1	長脚。柱上部は細く、直線的 に伸びる。	回転ナデ	ナデ	密	○	出土地区 不明	
575	高坏	残 高 4.3	やや内溝する柱上部。下間に 1条の沈線が湛る。柱上部は 太い。	マメツ (シボリ鉢)	ナデ	密	○	F 5	
576	高坏	残 高 4.9	概形が三角錐状に広がる。上 半に沈線が一条湛る。	回転ナデ ④ナデ	回転ナデ	密	○	G 7	
577	高坏	残 高 2.7	高坏の脚部片。柱上部の部分 に2条の沈線が湛る。	回転ナデ	ナデ	密・長(1)	○	出土地区 不明	
578	不明	LJ 径 (30.0) 残 高 5.4	底部はあるやかに内反。口縁部は上下 方に張出。外側に沈線と乳点穴を有す。 裏あるいは唇台なしの二段脚部。	回転ナデ	密・長(1)	○	出土地区 不明		
579	瓶	口 径 (22.0) 残 高 5.3	瓶の口頭部。房頭部上半、頭部 は外反し、口縁部は下方に拡 張。口縁部部は直角を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	出土地区 不明	
580	瓶	残 高 3.8	瓶の脚部。丸みのある肩球 形の脚部。円孔あり。肩部に 沈線一筋ある。	回転ナデ ④回転ヘラケズリ →ナデ	回転ナデ	密	○	出土地区 不明	
581	平瓶	残 高 6.5	平瓶の頭部。頭部1半。頭部 は直線的に立ち上がる。肩部 はやや弧がある。	回転ナデ ④ナデ (シボリ鉢)	回転ナデ	密・長(1)	○	出土地区 不明	
582	長足壺	残 高 5.7	長頸壺の颈部。瓶状を呈し、 4条の沈線が湛る。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	出土地区 不明	

## 出土遺物観察表

## IV上層 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法 量(cm)	形 異・施 文	調 整		胎 土	焼成	備 考	図版
				外 面	内 面				
583	土瓶型 残 高	5.1	長輪底の頭部。最大径の上半には2条の沈線の間に列立文を残す。	巡回転カキ日	回転ナデ	密・長(1)	○	出土地区 不明	
584	土瓶型 残 高	4.5	長輪底の頭部上半。最大径の上半には2条の沈線。斜文を残す。	巡回転ナデ	回転ナデ	密	○	E 9	
585	壺 口 径(16.8) 残 高	4.3	長輪底の口部か?頭部はゆるやかに外反し、口縁部は外方に拡張する。	巡回転ナデ	回転ナデ	密	○	G 4	
586	不明 残 高	3.1	逆又は裏の口部部。頭部はゆるやかに外反する。口縁部は外方に拡張し段を有する。	巡回転ナデ	巡回転ナデ	密	△	G 9	
587	瓶型 底径(9.7) 残 高	4.3	長輪底の底部。貼り付けの輪高台。底部の縁につき、「ハ」字につく。内腹接地。	巡回転ヘラケズリ 巡回転ナデ	巡回転ナデ	密 石・長(1)	○	G 5	
588	不明 残 高	1.2	長輪底の底部。平底。立ち上がりが大きい。長輪底の可塑性もある。	巡回転ナデ	巡回転ナデ	密 石・長(1)	○	G 6	
589	鉢 底 径(8.7) 残 高	2.4	台付脚の底部。高台は底体部の内側につき、「ハ」字に開く。内腹接地。	巡回転ナデ	巡回転ナデ	密 石・長(1)	○	出土地区 不明	
590	鉢 底 径(8.4) 残 高	2.4	台付脚の底部。底白は底体部の内側につき、「ハ」字に開く。底白端部は下内方に屈曲している。	巡回転ナデ	巡回転ナデ	密 長(1)	○	G 8	
591	鉢 底 径(8.6) 残 高	2.0	台付脚の底部。比較的頗度の高台で、高台の外端面はやや突出する。	巡回転ナデ	巡回転ナデ	密	○	F 3	
592	平瓦 厚さ	5.9	重さ65g	(凸面) 巡回転タキ	(凹面) 巡回転タキ	密	△	H 8	
593	平瓦 厚さ	2.0							
594	平瓦 厚さ	8.4	重さ270g	(凸面) 巡回転タキ	(凹面) 巡回転タキ	密	○	H 8	
595	平瓦 厚さ	2.8							
596	平瓦 厚さ	9.3	小片。磨滅が激しい。平瓦の可能性もあり。重さ190g	(凸面) 巡回転タキ	(凹面) 巡回転タキ	密	△	G 8	
597	碗 底 径(6.8) 残 高	1.2	須志紋。網の口縁部。口縁部は丸く膨らむ。内腹部に施す。	巡回転ナデ 施袖	巡回転ナデ 施袖	密	○	B 5	
598	坏 底 径(9.4) 残 高	1.6	須志賀の坏底部。円盤状高台。平底。	巡回転ナデ ナデ	巡回転ナデ ナデ	密	○	G 10	
599	坏 底 径(7.0) 残 高	1.1	土師質。坏の底部。器壁厚し。	④ヨコナデ 巡回転ヘラ切り	ナデ	密	○	E 8	
600	坏 高台高 残 高	0.6 1.6	土師質。貼り付け輪高台。底体部の縁につき、「ハ」字につく。	マメツ ナデ(マメツ)	ナデ(マメツ)	密	△	H 8	
601	坏 底 径(6.9) 残 高	0.8 1.6	土師質。輪高台。底体部の縁につき、直立につく。	マメツ マメツ	マメツ	密	△	H 8	
602	坏 底 径(7.0) 残 高	0.5 1.6	土師質。貼り付け輪高台。底高台高 内腹につき、直立につく。	④ヨコナデ 巡回転ヘラ切り ナデ	ナデ	密	○	F 4	

## 出土遺物観察表

N上層 出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
603	环	口径(13.8) 底径(7.0) 高 3.6	土師質。ゆるやかに立ち上がりが 底径はやや内凹。口縁部はやや内凹気味。 唇部は丸い。	④回転ナデ →ナデ ⑤回転糸切り	④回転ナデ →ナデ	密	○	H 9	
604	环	口径(12.2) 底径(7.2) 高 3.6	土師質。立ち上がりが直線的。 口縁部は丸い。	④ヨコナデ ⑤回転糸切り	ヨコナデ	密	○	G 7	
605	环	底径(7.0) 残高 1.5	土師質。底部の外側が凹む。	④マツフ ⑤回転糸切り	マツフ	密	○	B 5	
606	环	底径(7.4) 残高 0.9	土師質。	④マツフ ⑤回転糸切り	マツフ	密	○	F 7	
607	环	底径(7.0) 残高 1.0	土師質。	④ナデ ⑤回転糸切り →板江戸	④回転ナデ →ナデ	密	○	H 9	
608	坏	底径(6.6) 残高 1.3	土師質。外側が凹む。	④ヨコナデ ⑤回転糸切り	ヨコナデ	密・石・長(2)	○	F 5	
609	坏	底径(6.4) 高台高 0.5 残高 1.2	土師質。円盤状高台。	④ナデ ⑤回転糸切り	ナデ	密	○	H 10	
610	羽釜	口径(22.2) 残高 5.3	土師質。羽釜の口縁部。立ち上がり はやや内凹。口縁部よりやや下が た部分に直角三角形の溝が巡る。	ナデ	マツフ	砂・長(1)	△	F 10	
611	羽釜	口径(24.0) 残高 2.7	土師質。羽釜の口縁部。口縁 部よりやや下がった部分に 斜面「コ」の字形の溝が巡る。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂・長(1)	○	F 10	
612	羽釜	口径(9.5) 残高 9.5	瓦質。三足付き羽釜の脚部。 脚部と脚合部分に焼け付 着。	ヨコナデ	ナデ	砂・長(1)	○	H 9	
613	羽釜	口径(8.3) 残高 8.3	土師質。三足付き羽釜の脚部。	マツフ	—	密・金	△	E 10	
614	碗	底径(6.4) 高台高 0.9 残高 3.1	土師質。碗の底部。貼り付け 高台高。断面三角形を呈す。	ヨコナデ→ミガキ ナデ→ミガキ	ナデ	密	○	F 5	
615	碗	底径 3.5 残高 3.5	瓦質。碗の口縁。立ち上がり は直線的で口縁部は丸い。 和型。	ナデ (指頭痕)	ナデ	密	○	E 5	
616	碗	口径(15.0) 残高 2.0	土師質。碗の口縁。口縁部 で外に屈曲し、丸く仕上げる。	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	密	○	F 4	
617	こね棒	口径 3.4 残高 3.4	瓦質。口縁部が下方両端 に強張りがある。直 線的な立ち上がり。 東播系。	ヨコナデ	ヨコナデ	密・砂	○	F 4	
618	こね棒	口径 2.4 残高 3.8	瓦質。口縁部が上方両端へ 強張りしている。立ち上がりは 直線的。東播系。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	砂・石・長(1)	○	F 10	
619	こね棒	口径(38.0) 残高 3.8	須恵質。口縁部が上方両端と も強張りしている。内側には1 条の沈線が巡る。東播系。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	砂・石(1)	○	G 9	
620	こね棒	口径(28.1) 残高 3.9	須恵質。口縁部が上方両端と も強張りする。内側には1 条の沈線が巡る。東播系。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	砂	○	G 8	
621	こね棒	口径(20.0) 残高 2.7	須恵質。口縁部が上下両端と も強張りする。外 縁には直線的な段を有す。東播系。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	密・長(1)	○	G 9	
622	こね棒	口径(26.6) 残高 6.2	須恵質。立ち上がりが直線的。口 縁部が上下両端とも強張りする。外 縁には直線的な段を有す。東播系。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	密・長(1)	○	G 8	

## 出土遺物觀察表

## IV上層 出土遺物觀察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土	焼成	備考	図版
				外面	内面				
623	壺	残高 2.5	頸部質。壳の頂部上半部。東播系か龜山焼きの變か不明。	ヨコナデ ※格子目タケホ	ヨコナデ ※同心円文叩 密・長(2) きか?			○	出土地区 不明
624	碗	口径 (17.0) 残 高 1.8	白磁。碗の口縁部。口縁部は土模状を呈す。	施釉	施釉	密	○	F 5	
625	碗	底 径 (7.0) 高台高 0.9 残 高 1.5	白磁。碗の底部。高台は削り出しの円錐高台。内面のみ施釉。	ヨコナデ ※削り出し		密	○	F 6	
626	碗	底 径 (7.3) 高台高 0.8 残 高 1.9	白磁。碗の底辺。高台は削り出しの円錐高台。内面のみ施釉。	ヨコナデ ※削り出し		密	○	出土地区 不明	
627	碗	底 径 (5.8) 高台高 0.4 残 高 1.5	白磁。碗の底部。輪高台の部分は剥離している。施釉は内面と高台外側のみ。	施釉 ※削り出し	施釉	密	○	出土地区 不明	
628	碗	底 径 1.5	青磁。碗の口縁部。外面上に落文が施されている。内外ともに施釉。底面黒。	施釉	施釉	密	○	出土地区 不明	
629	碗	底 径 2.1	青磁。碗の底部。内面見込みに段を有す。施釉は内面と高台外側のみ。難泉窯。	施釉 ※削り出し	施釉	密	○	G 9	
630	碗	底 径 2.2	青磁。碗の口縁部。口縁部は丸く。内面に段をもつ。施釉は内外両面。岡安窯。	施釉	施釉	密	○	F 5	
631	碗	底 径 (5.0) 高台高 0.8 残 高 1.4	青磁。碗の底部。打り出し高台。内面に段をもつ。施釉は内面と高台外側のみ。岡安窯。	※削り出し	施釉	密	○	F 5	
632	皿	底 径 (5.2) 残 高 0.7	青磁。皿の底部。内面には輪状工具で平行条線を施文する。施釉は内面と体部外側に施す。岡安窯。	施釉 ※削り出し	施釉	密	○	G 5	
633	不明	口径 (3.2) 残 高 2.6	頸部質。器種不明。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	F 4	
634	不明	底 径 (11.0) 残 高 1.1	頸部質。東播系こね跡の底部の可能性あり。	ナデ ※ケズリ→ナデ	回転ナデ	粗砂粒、2mm大の砂粒含む	△	G 7	
635	不明	底 径 3.9	頸部質。器の口頭部か? 軸は内外両面とも施釉を施す。	(選) 自然釉 (選) 施釉	(選) 自然釉 (選) 施釉	密・石(1)	○	G 5	
636	不明	底 径 (8.6) 残 高 1.4	頸部質。坏か墨か不明。	※ナデ(マメ) ※回転系切り	マメツ	石・長(3)少量	△	G 6	
637	不明	底 径 (11.0) 残 高 0.7	頸部質。坏か墨か不明。	マメツ	マメツ (一部ナデ)	密・石(1)	△	出土地区 不明	
668	ふいご	長さ 4.1 幅 3.2 厚さ 2.0	利口片。	指頭痕、ナデ	ナデ		○	G 5	
669	ふいご	長さ 3.9 幅 2.7 厚さ 2.8	羽口片。	指頭痕、ナデ	ナデ		○	G 7	

## IV上層 出土遺物觀察表 石製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
638	石磨丁	1/5か	緑色片岩	3.8	3.4	0.53	8.7	D 9	
639	石磨丁	1/3か	緑色片岩	5.6	3.3	0.64	18.2	B 6	
640	石磨丁	光 存	緑色片岩	6.8	3.9	1.0	40.2	G 9	

## 出土遺物観察表

IV 上層 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
641	石刀	完存	緑色片岩	7.4	4.2	1.04	36.6	B 6	
642	扁平片刃石斧	2/3	緑色片岩	7.0	3.6	1.54	77.0	F 5	
643	打製石器	完存	緑色片岩	4.1	2.6	0.45	5.9	出土地不明	

IV 上層 出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
644	棒状	一部欠	鉄	4.9	1.4	1.1	8.4	H 7	20
645	棒状	完存	鉄	5.4	1.9	1.2	17.3	出土地区不明	20
646	棒状	完存	鉄	4.65	0.85	0.72	3.4	出土地区不明	20
647	棒状	完存	鉄	3.6	1.1	1.1	3.9	F 5	20
648	棒状	完存	鉄	3.3	1.0	0.76	3.1	G 7	20
649	タガホ状?	一部欠	鉄	5.2	4.8	3.3	64.7	F 11	20
650	鉄製品	一部欠	鉄	4.4	3.4	2.3	36.0	F 4	20
651	鉄製品	完存	鉄	4.0	2.3	1.8	15.6	出土地区不明	20
652	鉄製品	完存	鉄	4.6	2.2	1.4	10.0	F 4	20
653	鉄製品	完存	鉄	2.3	3.3	0.7	6.2	出土地不明	20
654	鉄製品	完存	鉄	3.45	2.35	1.9	23.3	F 4	20
655	鉄製品	一部欠	鉄	3.1	2.8	0.85	8.1	F 7	20
656	鉄製品	完存	鉄	3.7	2.1	1.3	13.4	G 7	20
657	鉄製品	大きく欠	鉄	2.5	2.1	0.9	5.2	F 11	20
658	鉄製品	大きく欠	鉄	2.35	2.3	1.38	7.1	F 11	20
659	鉄製品	完存	鉄	4.4	3.1	1.7	26.0	出土地区不明	20
660	鉄津	完存	鉄	4.8	6.8	2.8	124.5	F 4	20
661	鉄津	大きく欠	鉄	4.1	5.2	2.85	53.4	F 4	20
662	鉄津	一部欠	鉄	3.9	5.0	1.6	47.1	F 7	20
663	鉄津	一部欠	鉄	3.7	4.8	3.0	49.3	F 4	20
664	鉄津	完存	鉄	6.0	3.9	2.2	56.7	出土地不明	20
665	鉄津	完存	鉄	4.1	3.45	3.1	55.0	F 5	20
666	鉄津	完存	鉄	3.2	2.8	1.85	18.1	F 5	20
667	鉄津	一部欠	鉄	3.2	2.3	1.4	13.6	F 7	20

写 真 図 版

## 写真図版例言

1. 遺構の撮影は加島次郎・大西朋子がおこない、一部やぐらを使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパー・アンギュロン 90mm他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67 55mm他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール 28~85mm他
フィルム	プラスXパン・ネオパンSS・エクタクロームEPP		

2. 遺物の撮影は、大西がおこなった。

使用機材：

カメラ	トヨノビュ-45G	レンズ	ジンマーS 240mm他
ストロボ	コメット/C A-32・C B2400 (パンク使用)		
スタンド他	トヨノ無影撮影台・ウェイトスタンド101		
フィルム	プラスXパン		

3. 白黒写真的現像・焼き付けは、一部を除いて大西がおこなった。

使用機材：

引伸機	ラッキー-450MD	レンズ	エルニッコール 135mm
	ラッキー-90MS		エルニッコール 50mm
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RC		
フィルム現像剤	コダックD-76・HC110		

【参考】『埋文写真研究』Vol. 1~8

(大西朋子)



1. 調査前全景（西より）



2. 調査前近景（北より）



1. 調査区北壁土層



2. 調査区西壁土層



1. 完掘状況（南西より）



1. SD10 検出状況①(南より)



2. SD10 検出状況②(北東より)



1. SD10 遺物出土状況 ① (南より)



2. SD10 遺物出土状況 ② (南より)



1. SX5検出状況①（東より）



2. SX5検出状況②（南西より）



1. SX 5 遺物出土状況（北西より）



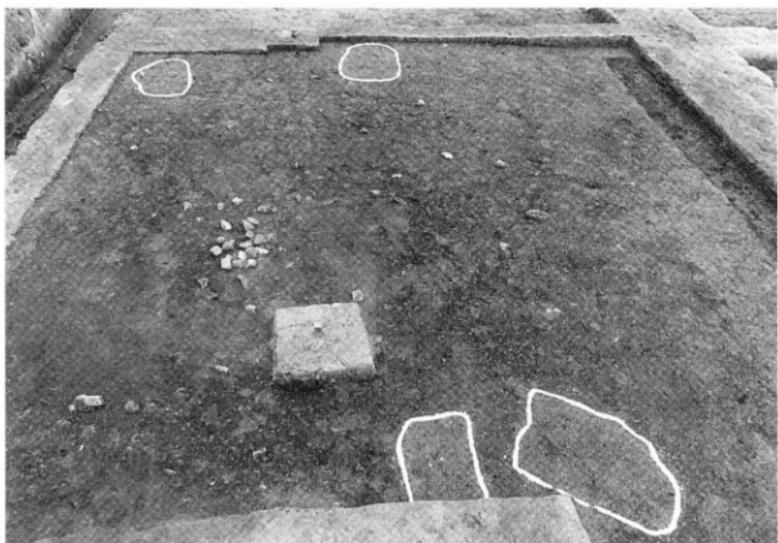
1. 第2造構面検出状況（西より）



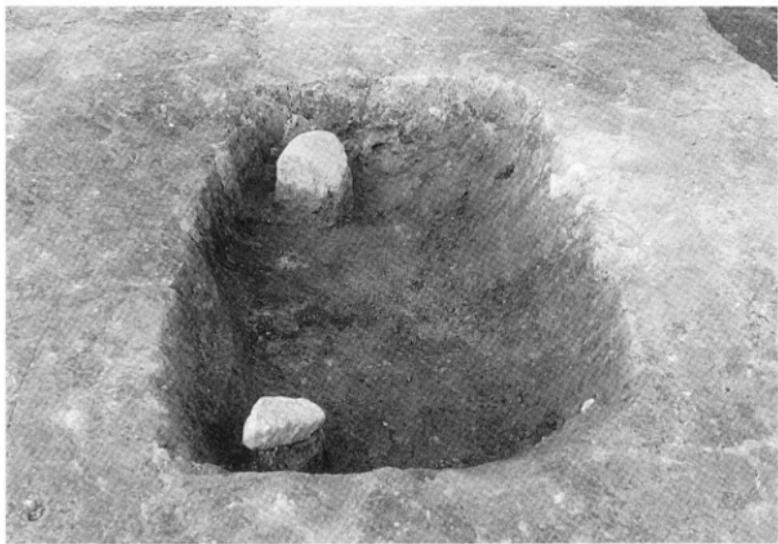
2. 第2造構面完掘状況（東より）



3. SD11 権状石製品出土状況（東より）



1. SK 3～6 棚出状況（西より）



2. SK 2 完掘状況（南より）



1. SD3・SD8検出状況（北より）



2. SD3・SD8完掘状況（北より）



1. SX 1 完掘状況（北東より）



2. 現地説明会



7



14



58



57

67

68

69



112



116



1. SX5 出土遺物 ①



216



220



215



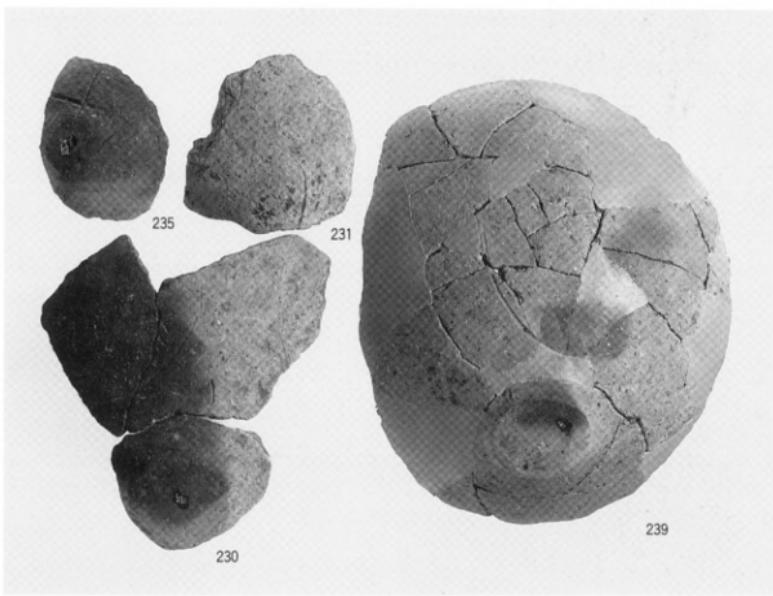
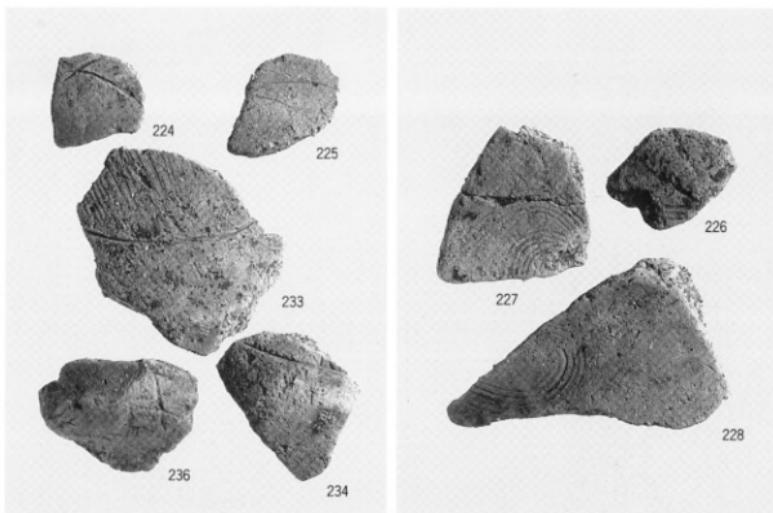
241



221



242



1. SX5 出土遺物 ③



246



256



271



273

276

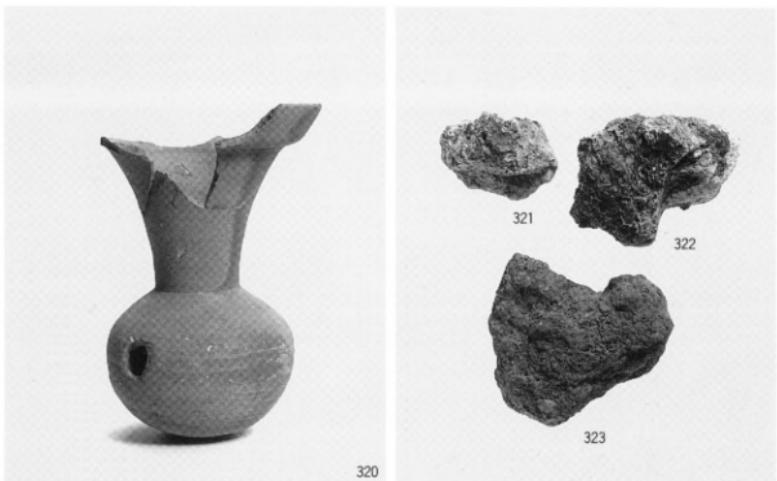
272



279

280

1. SX5 出土遺物 ④



1. S R 1 (320~323) • S X13 (325) 出土遺物

325



344



345



346



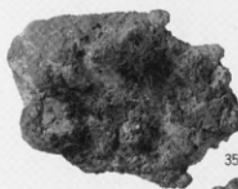
347



348



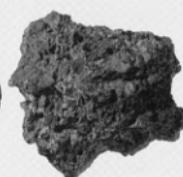
349



350



351



352



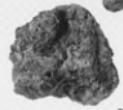
353



354



355



356

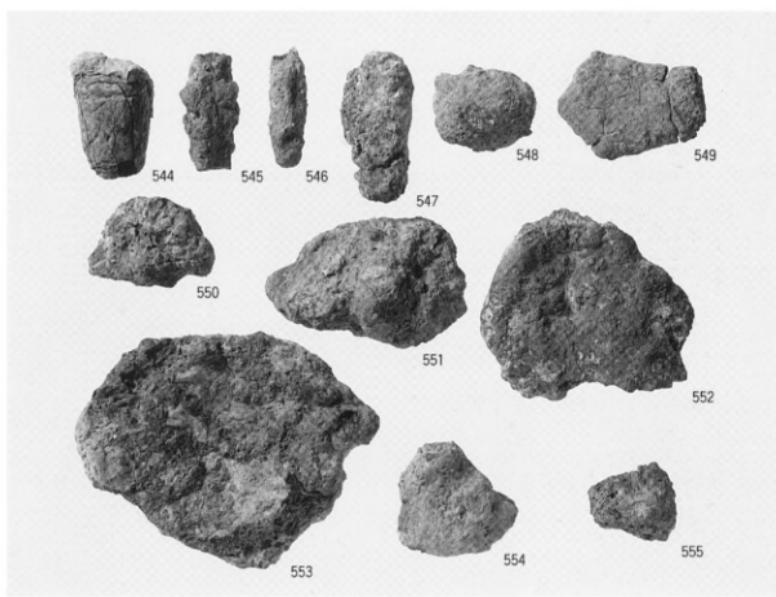
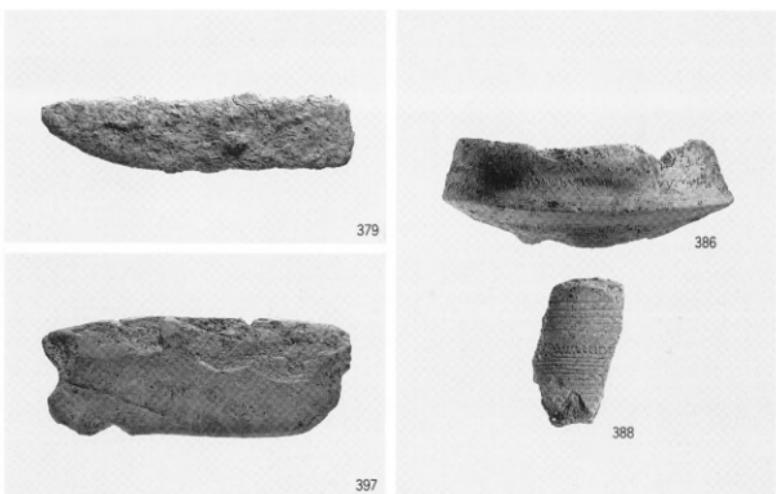


357

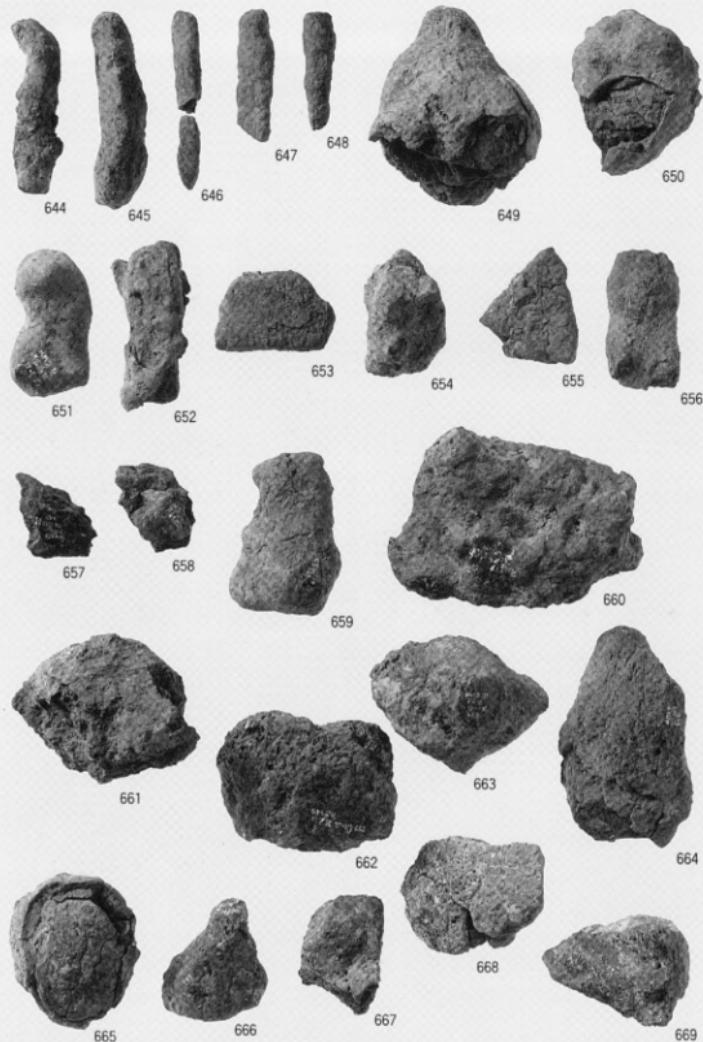


358

1. S D11 出土遺物



1. SD 8 (379) · V下層 (386·388·397) · IV下層 (544~555) 出土遺物



1. IV上層出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	のまのうらいせき
書名	乃万の裏遺跡
副書名	2次調査地
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第72集
編著者名	加島 次郎、小玉重紀子、大西 朋子
編集機関	財團法人 松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター・松山市教育委員会
所在地	〒791-8032 松山市南斎院町乙67-6 〠089-923-6363・〒790-0002 松山市二番町4丁目7-2 〠089-948-6605
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 °'\"/>	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
乃万の裏	愛媛県松山市 北久米町	38201	288	33° 49' 00"	132° 47' 10"	19950717~ 19951124	2,475 宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
乃万の裏	集落	弥生 古墳 古代 中世	溝、土器窪り、土坑、 河川、掘立柱建物	弥生土器、土師器、 須恵器、石器、鉄器、 勾玉、椎状石製品	弥生後期の区画溝、 土器窪り、河川を検出。 土器窪りからは、 外来系土器が出土。

松山市文化財調査報告書 第72集

乃万の裏遺跡  
2次調査地

---

平成11年3月31日

編集 松山市教育委員会

発行 〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1

TEL (089) 948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター

〒791-8032 松山市南斎院町乙67番6

TEL (089) 923-6363

印刷 岡田印刷株式会社

〒790-0012 松山市湊町7丁目1-8

TEL (089) 941-9111

---